

旧石器時代の領域分析

—特定共時における‘戦略束’—

国 武 貞 克

1. 視点

旧石器時代の居住パターンを、消費石材のサイクルとその獲得方法から考察する視点は、武蔵野台地における黒曜石の入手をめぐる問題を扱った稲田孝司の研究によって、明確に示されたといえる（稲田1984）。消費石材の入手と運用過程に的を絞ったこの論点は、二極構造論（佐藤1988）や二項的モード論（田村1989a）の提唱によって、特定共時における技術/モードの選択と結びつき、居住形態を行動論的な観点から分析する方向性が切り拓かれたと評価することができる。とりわけ、石刃モードと剥片モードが共時的に二項化されており、それらが推移構造を有することを抽出した田村隆は、その二項性のメカニズムを、「石器製作の始点ともいべき石材の獲得過程に論点を絞り」（田村前掲；46頁）こむ考察を通して、行動領域や領域内での循環構造を、実証的に検証した。この検証過程において重視すべき点のひとつは、下総台地から100km～150km離れた古鬼怒川沿いの北関東地方で採取されたと推定される石材を、「日常的に消費される石材であるので、集団の移動に伴って少量ずつ採取されたもの」（田村前掲；46頁）と考え、そうであるならば、「下総台地に遺留した石材を詳細に検討することによって、集団の活動領域を間接的に知ることができるかもしれない」（田村前掲；46頁）との見通しを示したことである。

この埋め込み戦略（Binford1979：田村1992a）によって日常的に消費される石材が獲得されたとする前提と、先に述べた双分モードの推移構造は、その後「放射型」/「循環型」モデル（Marks 1983：安斎1988）とともに、角張淳一による信州産黒曜石の入手をめぐる行動論モデルの重要な操作概念となった（角張1991）。角張は、埋め込み戦略に基いて、石刃モードに使用される石材が、遺跡近傍の石材であるか、否かにより、移動領域の範囲を推定し、とりわけ関東地方の遺跡については信州産黒曜石や東北地方産の硬質頁岩の使用状況から、その領域にそれらの産地を含むかどうかを検討した。その上で、その領域内に残された遺跡の機能的な異同を検討し、機能を異にする遺跡を放射状に残しながら、領域内を移動する「放射型」と、同じ機能の遺跡を循環的に残しながら移動する「循環型」の両者のパターンを設定した。そして、領域の範囲もしくは広さと、これら2つのパターンを複合させることにより、X層段階からIV下V層段階にかけての中部、関東各地における local group の居住パターンの通時的な変化を進化的な視点から提示した。

角張によるこの分析では、石材原産地の立ち入りの機会などを介しての各 local group 間の多様

な関係が具体的に推定されたり、またⅦ層、Ⅵ層段階では、「放射型の遺跡類型をとりながら広域に移動して高効率の資源利用を行なう」（角張前掲；63頁）など、最適捕食理論の食餌幅モデルからも支持することができる生業活動の推定を行なうなど、有効な視点が数多く提示された。

また、先にみた田村前掲論文による石材獲得過程に論点を絞る視点は、石材獲得モデルを具体的に提示した論考（田村1992a）によって補強されるとともに、同年に公表された論考（田村1992b）によってより全体的な位置付けが行なわれた。（田村1992b）では、石器群の構造を包括する技術的構造組織（Binford1979：阿子島1989：安斎1990）とそれを機制する様々な社会生態学的なモデルとの間の理論的な考察がなされ、また環境、生態的な検討を経た上で、武蔵野Ⅱ期の local group 間の社会的諸関係が通時的に、mating network の形成と領域性を強める傾向にあることが指摘された。その上で、最適捕食理論に基いて、利用可能な資源パッチが細区画化されていく環境の変化に対応して、技術的構造組織の総体が reliable system を強化する方向性を辿ることが予測された。

この論考によってうちたてられた新たな視点は、ここではすべてを語りえない。しかし、いま着目したいのは、各時期の居住形態を技術的組織の観点から考察し、その通時的な変化について社会生態学的な解釈を施すなかから local group 間の関係と資源利用の傾向を抽出していくという論理構成である。居住形態に関わる行動論的な研究の基本的な戦略が示されたとみなすことができる。

したがって、この研究戦略においては初期段階に位置するが、各時期の居住形態を技術的組織の観点から分析する段階は、様々な方法によって精緻化される必要がある。共時下における遺跡間の関係を分析するには、高倉純（高倉1998）も指摘しているように、遺跡間の機能的な相互補完性を秩序立てるある論理を導入する必要がある。高倉が実践したような沿岸部と内陸部の反復移動モデルもそのひとつであるし、またそれが石刃の製作地点や搬出地点、石材の消費傾向を基盤にした分析であることを考慮すると、技術的組織のなかでもとりわけ消費石材の搬入を主眼にすえた野口淳の分析は有効な実践であった（野口1995）。

野口の分析により、特定共時の遺跡を、石材消費の軌跡を基礎にして、石器の運用にかかわる様々な行動の関係態の中に位置付けて理解することができた（国武1999）。しかしながら、このような石材受給関係（佐藤1995）を基盤にした領域内の移動戦略や様々な行動の関係態を、先にみた研究戦略に戻して通時的に統合的な視点から分析するには、改めて別の方法論が必要となる。

各時期の石器群を、石器生産とその運用に関する様々な戦略の束からなるデザインとして表現し、その時間的な変遷から、移行の論理を引き出した田村隆のデザイン分析は、そのような戦略デザインを行使する個人の身振りの積み重なりから実証的な社会理論を導き出すことを明瞭な目的としている（田村1998）。その実践としての後期旧石器時代後半期の分析では、biface reduction の定着を支えるべく、伝統的な埋め込み戦略が解体して、特定原産地を周回領域へ取り込むかたちへと石材獲得方法の変化し、それに伴い local group の領域が固定化され、バンド社会が形成されていくという一部の結論の中に、この時期の変化の本質が語り尽くされてしまった観もある。

各種の石器生産とそれに用いられる石材の消費のされ方と獲得方法を一組の戦略として記号化し、それらの関係束としてのデザイン体系を分析の単位とする方法は、通時的な視点で変化の構造を抽出するために開発された極めて有効な方法である。同様の視点を特定共時の遺跡にむけるならば、そこには、戦略の束の独自性を根拠とするある種の領域が、それぞれに見えてくる可能性もある。また、そのような特有の戦略束を持つことでくられた領域内においても、遺跡間の機能的な差異の検討などを通して、構成する戦略相互の関係性を記述することが出来るかもしれない。隣接する異なる領域同士の関係も、このレベルにおいて比較しその連続性や断続性を検討することが出来る。

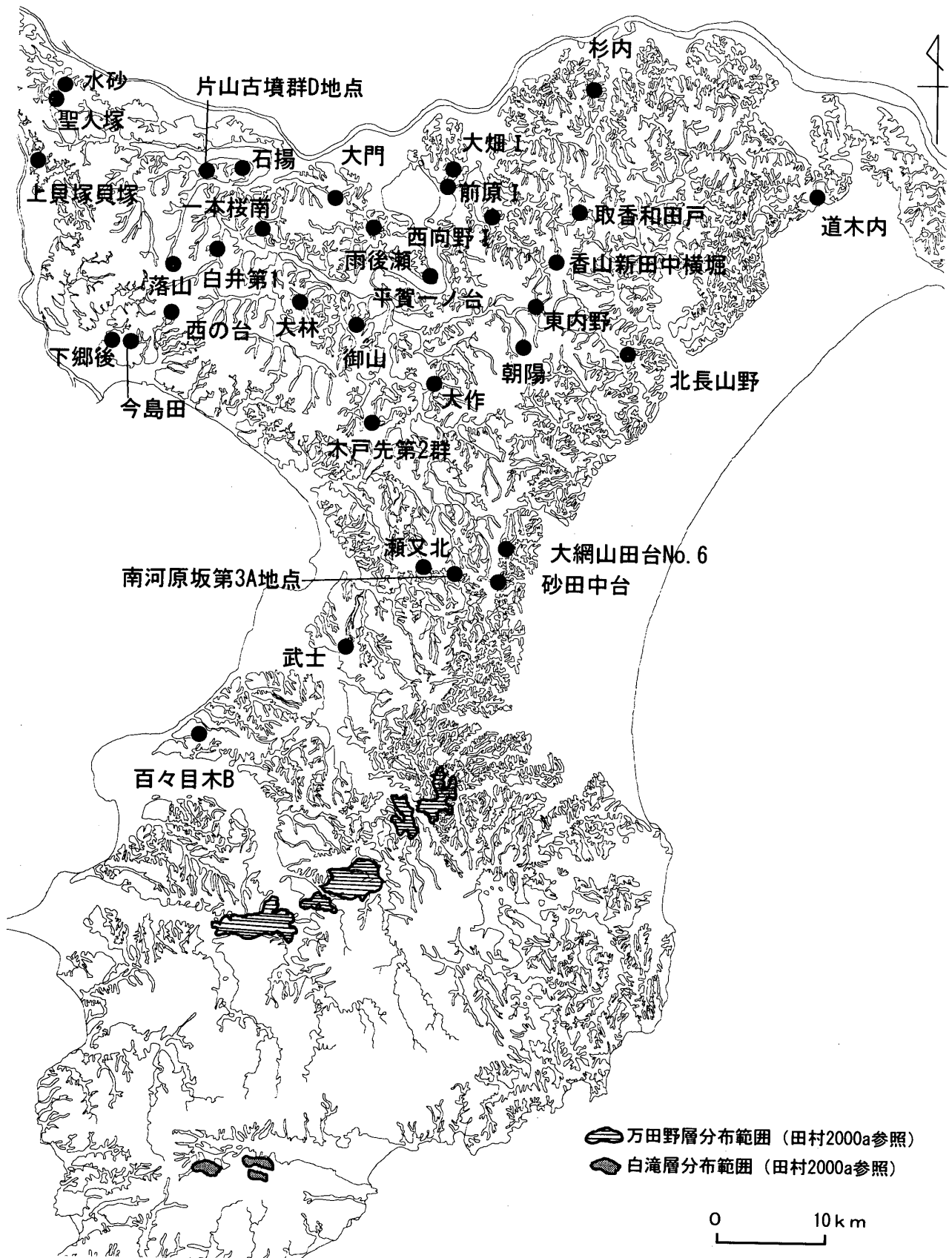
前置きが長くなってしまったが、小稿では下総台地の東内野型尖頭器を含む石器群をこの視点から分析する。すなわち、「特定共時における戦略束」を基礎的な操作概念とする。東内野型尖頭器を含む石器群では、両面体石器生産の他にも石刃生産や一般的な剥片生産が、地点をかえて行なわれている。そこで、これらの異なる石器生産を支える石材の消費戦略の組み合わせが、まず第一の検討課題となる。また、当該石器群は、武蔵野Ⅱb期と相模野Ⅳ期の中でも前半を中心にして後半にかけての所産とみなされ（田村・橋本1984）、同時期の南関東地方西部の石器群とは、biface reductionに強く依存している点で違いが大きい。検討した石材の消費戦略の組み合わせの異同を検討するなかから、相互の地域の関係性を考えたい。これが第二の検討課題である。

ところで、領域内における local group の行動や循環（角張前掲）を理解するには、各石器生産を支える石材の消費過程を明らかにするとともに、その獲得方法と連動させて、初めて可能となる（田村1998など）。当該石器群は、石材の供給条件の制約に対応したリダクション型の石器群（田村1992b；佐藤1995）として理解されているが、領域内の行動は、その消費石材が residential な移動によって獲得されたのかあるいは否かによって、大きく評価が分かれてくる。この点もより分析的なレベルで検討することにする。

したがって、当該石器群を分析するにあたっては、石材獲得方法を具体的に検討することが出来るように、各石器生産を石材ごとに抜き出して、その消費過程を追跡することにする。各石器生産とは小稿では、まず第一に石刃生産および一般的な剥片生産についてであり、第二に両面体石器生産を扱う。本来ならば、さらに小規模で副次的な石器生産が、遺跡の機能的な多様性に応じて付随したはずである（田村1998）。石刃生産と剥片生産とを一括して取り扱っている点も含めて小稿の分析の限界を露呈しているが、とりあえずは両面体石器生産を大きく相対化させて位置付けるためにこの2つの区分を採用する。個別の遺跡のより細かい性格付けは今後の課題として残されることになる。

2. 下総台地の石材環境

分析に入る前に、検討対象地域の石材環境を確認しておきたい。下総台地において用いられる石器石材の原産地については、田村隆と澤野弘によって次のように推定されたことがある（田村、澤野1987）。1）黒曜石は信州、箱根産のもの、と高原山産のもの、2）鬼怒川や久慈川産の各種珪



第1図 小稿で検討対象とする遺跡分布図

化岩と黒色頁岩、3) 日本海沿岸の珪質頁岩(小稿では硬質頁岩)、4) 銚子産チャート、5) 万田野層産の黒色緻密質安山岩、細粒凝灰岩、チャート、玉髓、粘板岩、黒色頁岩他、である。このうち、2) には(ひたちなか市教育委員会1998)を参考にすると、黄玉石、赤玉石などのジャスパー、玉髓、などが含まれるものと思われる。これらをまとめると、信州、箱根、高原山産の黒曜石、東北地方産の硬質頁岩、鬼怒川流域の黒色頁岩や黒色緻密質安山岩、茨城県北部産の玉髓、ジャスパー、と房総半島で採取される銚子産チャートと万田野砂礫層の各種石材ということになる。

その後これに加えて、房総半島南部の嶺岡層群白滝層に産出する珪質頁岩(白滝頁岩)が旧石器時代の石器石材として多用されていることが公表され(田村1992a, 1994など)、この産地の石材を主体的に用いた遺跡が、下総台地南部の上総丘陵と接する範囲においてとりわけ多数確認された(山武郡市文化財センター1994)。また、下総台地北東部に分布する下総層群中の藪・地藏堂層中の礫層(岡崎1997)からも、万田野層と同様にチャートや玉髓など多様な石材が採取された可能性が高い¹⁾。以上から、下総台地の石器石材は、台地内小河川では採取されず南北を中心にした外縁部、すなわち鬼怒川上流地域の栃木方面および久慈川、那珂川流域の茨城方面、そして房総半島南部において採取されるということになる。

そして、これら外縁の石材産地は消費地からの距離や採取可能な石材の量や質などに産地間において、様々な差があるということはいうまでもない。

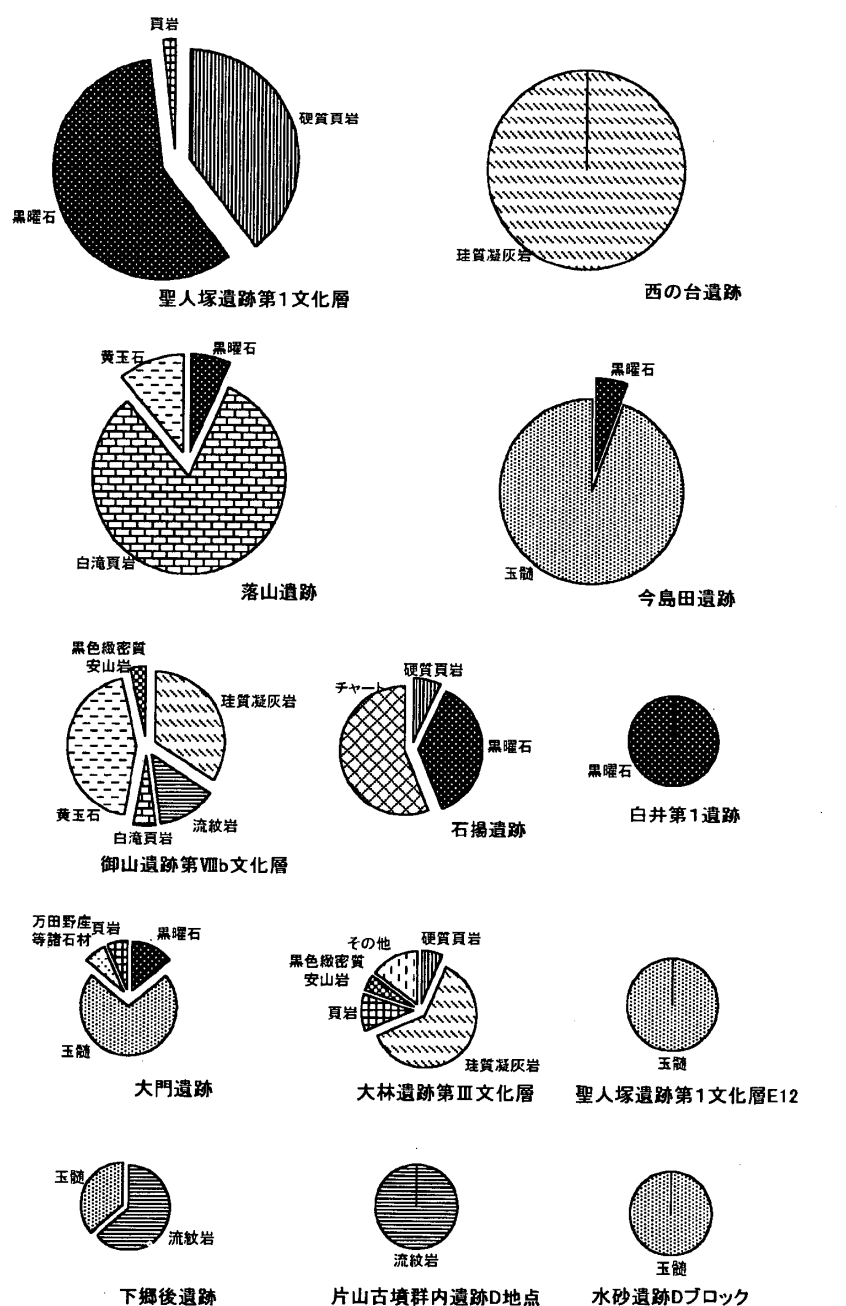
これらの石材が各地域において、如何なる組み合わせで用いられ、石器の生産に給せられているのか。また、その運用のされ方に秩序は認められるのであろうか。東内野型尖頭器と、石刃、剥片生産のための補給と消費の過程、をとりあえずは切り離して検討し、その上で両者の関係をみていくことにする。

3. 石刃、剥片生産による石材消費

1) 地域ごとの消費石材の特徴

はじめに石刃もしくは剥片剥離に用いられている石材の消費傾向について検討する。下総台地の諸遺跡は、房総半島を南北に走る大きな分水嶺に沿った分布を示し、南北に位置する石材産地との関係から、この分水嶺を主な移動経路としていたことが推定されている(田村2000a)。この分水嶺は、村田川や鹿島川上流付近で大きく東西に分かれてY字形を呈する(永塚2001; 第1図参照)。そこで、とりあえずは大まかにこの分岐点以南とそれより以北の北西部、北東部に大きく3区分して、それぞれの地域で石刃、剥片剥離に用いられた石材の組成を概観することにする。

その前に第2図から第4図に示した石材組成について、注意しなくてはならないことがある。グラフに集計されているものは、石刃、剥片生産によって消費されたと考えられた石材についての集計である²⁾。したがって、遺跡内への単独搬入石器については計上されていない。当地域においては遺跡内で生産されないで遺跡外から搬入されたと考えられる石器が比較的多く認められるが、遺跡内で消費される石材に限定した方が、より明確に地域間の違いや特徴が抽出できると考えたから



大きさは点数に概ね比例

第2図 下総台地北西部の石刃，剥片生産による消費石材

である。単独石器の動向は，その傾向を踏まえた上で個別の遺跡の脈絡の中で検討する方がよいと考えられる。

①下総台地北西部

まず，北西部の該期の遺跡について検討することにする。検討の対象とする遺跡は，概ね印旛沼以西であるが，より細かくいうならば，印旛沼の北側では，印旛沼から現在の江戸川までの全ての

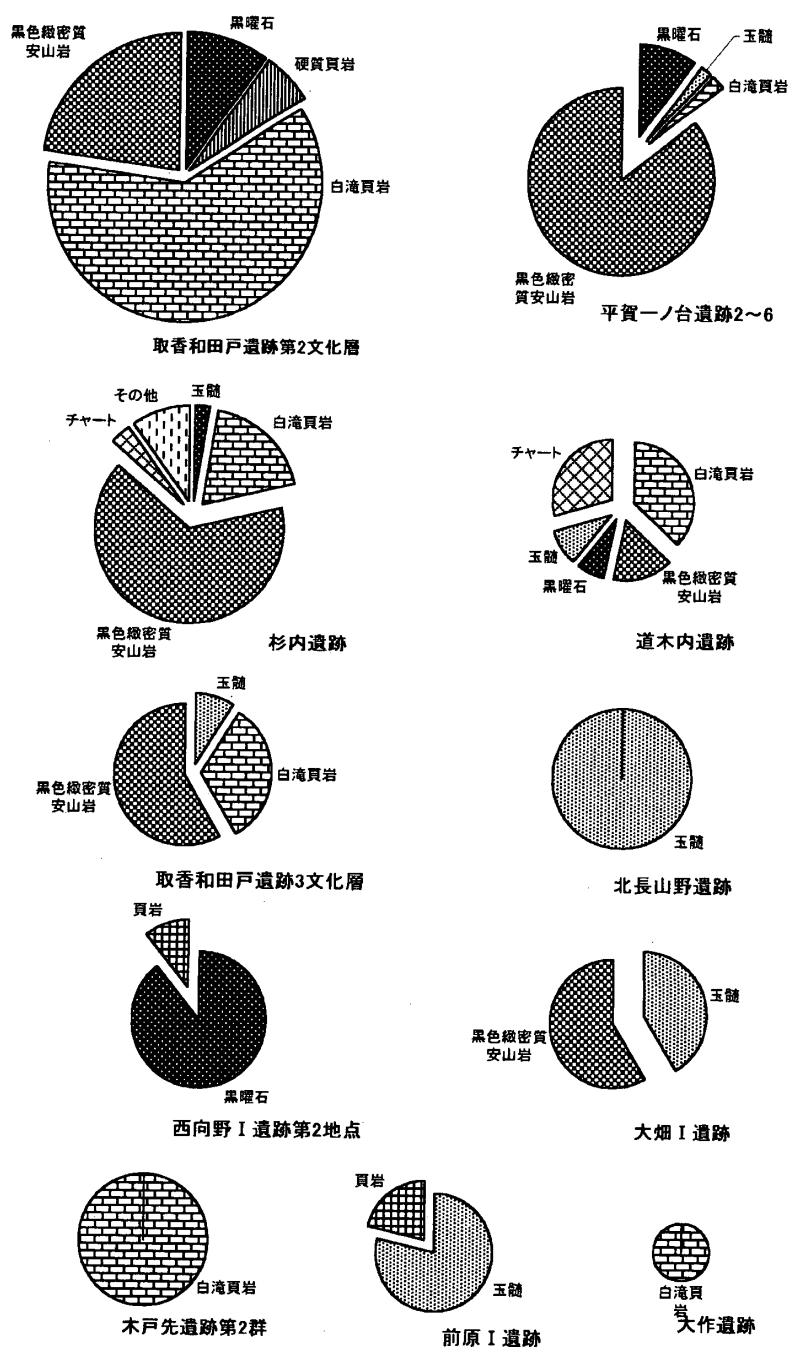
遺跡、印旛沼の南側では北流して印旛沼に注ぎ込む鹿島川を大まかな境として、それより西の一部の遺跡、南限は村田川流域とする（第1図）。12遺跡13石器群が対象となる。

第2図を見ると、非常に多くの石材が消費されていることが理解できる。具体的には、黒曜石、硬質頁岩、流紋岩、珪質凝灰岩、黄玉石、玉髄、白滝頁岩、黒色緻密質安山岩、凝灰岩などが認められる。さらに、遺跡によってこれらの石材が占める割合は様々であり、多くの石材が多様な組み合わせで消費されているといえる。そのなかで、とりわけ黒曜石、硬質頁岩、流紋岩、珪質凝灰岩、玉髄、白滝頁岩が目立っている。これらは、どの遺跡でも一定して用いられているわけではないが、その出現頻度は比較的高い。また、もうひとつ注意すべき点がある。それは、これらの石材のうち、とりわけ玉髄と、それに加えて白滝頁岩についてみると、特定の遺跡において、非常に集約的に消費されており、他の遺跡との格差が大変に大きいという点である。玉髄では今島田遺跡（杉原1971）が、白滝頁岩では落山遺跡（落合1988）がその大規模な消費遺跡に該当する。このような遺跡間での消費規模の偏りは、他の石材でも程度の差はあれ認められるものであり、この点がこの地域の石材消費の特徴とみることもできる。そして異なる地点（遺跡）において消費の小さなピークをもつ複数の石材が、多様に組み合わせることで、各遺跡の消費石材を担っているといえる。

②下総台地北東部

次に北東部の遺跡について検討する。その範囲は、先に検討した北西部の地域よりも東の範囲となる。具体的には、印旛沼および鹿島川以東で、南限は村田川流域である（第1図）。10遺跡11石器群が対象となる。

第3図を見ると、当地域の石材消費の傾向は明らかである。白滝頁岩と黒色緻密質安山岩が安定的にその大部分を占めている。この点が先にみた北西部の消費石材の組成と大きく異なる点である。白滝頁岩はとりわけ取香和田戸遺跡第2文化層（新田1994）において非常に大規模に消費されていることがわかる。また、第3図には示していないが、この地域に含まれる東内野遺跡（戸田・篠原・並木1977、篠原1980）は黒色緻密質安山岩の一大消費遺跡である。第1次調査において出土した石器6634点（このうち石核が140点）のうち大半は黒色緻密質安山岩の円礫からの剥片剥離に伴う剥片、碎片であったとされている（田村2000a、宇田川2000）。このように、白滝頁岩と黒色緻密質安山岩はともに、点数の上で他を隔絶する非常に大規模な消費遺跡が認められる点は注意すべき特徴である。この2種類の石材のほかに、玉髄も認められる。玉髄は先の2種類の石材ほどには出現頻度は高くないが、少量ずつ消費されており、遺跡によっては高い比率を占めることもある。この他に、道木内遺跡（安井1997）にみられるチャートも特徴的である。第38図には示していないが、銚子市三崎3丁目遺跡第2文化層（道澤1994、2000）は銚子産チャートの一大消費遺跡とされている。他に、北西部において認められた、硬質頁岩や黒曜石もわずかに認められる。以上から、当地域では、白滝頁岩、黒色緻密質安山岩を主体とし、これに玉髄が従属的に用いられ、さらに硬質頁岩や黒曜石がわずかに加わる消費石材の構成であると理解される。



大きさは点数に概ね比例

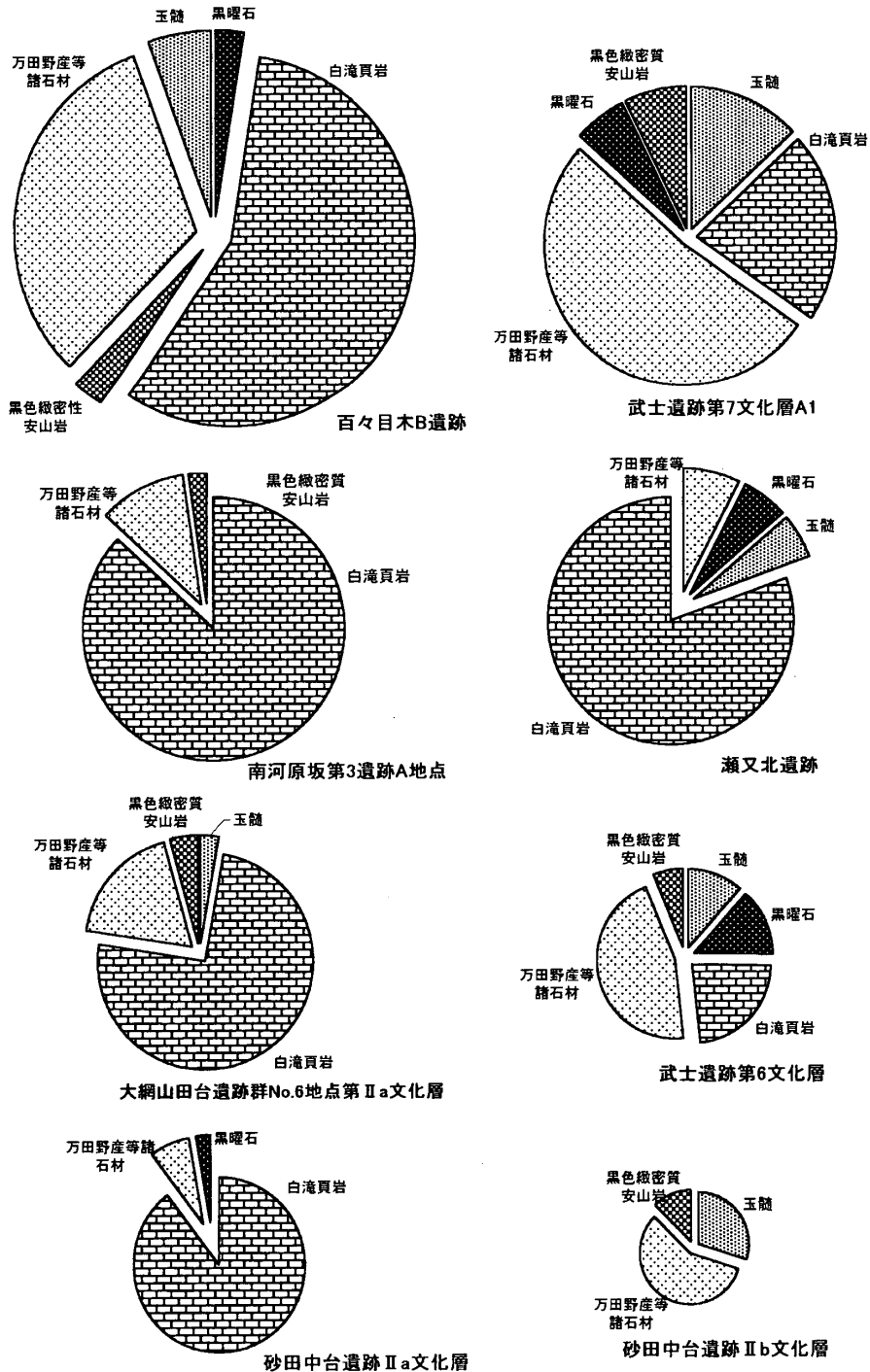
第 3 図 下総台地北東部の石刃，剥片生産による消費石材

③下総台地南部

最後に下総台地南部について検討する。その範囲は，房総半島の中ほどの村田川以南で上総丘陵に挟まれた地域である。この地域は南から南東の方向に，万田野層や嶺岡層群などの石器石材の原産地である上総丘陵を控えており，北部とは石材環境が異なっている。対象とする遺跡は 6 遺跡 8 石器群である。

旧石器時代の領域分析
—特定共時における‘戦略束’—

第4図をみると、北部の遺跡と異なり、どの遺跡も点数が非常に多いことが注意される。また、その石材構成は白滝頁岩がかなりの比率を占めており、この石材が非常に大規模に各遺跡で消費されていることがわかる。このように、白滝頁岩はたいていの遺跡で認められるのであるが、その他に、万田野産諸石材とした石材が高い比率で認められる遺跡もある。これは、それぞれの遺跡の



大きさは点数に概ね比例

第4図 下総台地南部の石刃，剥片生産による消費石材

報告書の中で凝灰岩、粘板岩、ホルンフェルスなどと記載されている石材をさしており、多様な石材を一括した。これらの石材は管見の限りでは、10種類以上が確認されているのだが、それでも遺跡間で共通した特徴と組み合わせを示す。その多くの部分は現在万田野層で採取される石材と共通するとされ、万田野層等の由来の石材と推定される³⁾。他に、黒色緻密質安山岩や玉髄も多くの遺跡で認められるが、その量は多くはない。また、黒曜石が消費される遺跡も認められるが、やはり量は多くはない。以上から、当地域では、白滝頁岩と万田野層等諸石材、及び黒色緻密質安山岩と玉髄を主体とする消費石材の構成であると理解することができる。ここで黒色緻密質安山岩と玉髄もやはり万田野層で現在採取可能であるから、当地域の消費石材は白滝頁岩と「万田野層で現在採取可能な諸石材」で大部分が構成されているということになる。

以上から分かるように、下総台地の該期の石器群は、消費石材の構成から3つの地域に区分することができる(第5図)。まず第1は、北西部を中心に分布する遺跡に認められる構成であり、この地域では、石器石材の原産地に接していないためか⁴⁾、非常に多くの石材が様々に組み合わせるのが第1の特徴である。とりわけ硬質頁岩、珪質凝灰岩、流紋岩、玉髄、黒曜石が中心となっている。これに黄玉石と白滝頁岩が従属的に加わっている。これを消費石材構成1とする。信州産の黒曜石と白滝頁岩を除くと、古鬼怒川上流地域に採取地が推定される構成である。

第2は北東部を中心に分布する遺跡に認められる構成であり、北西部の消費石材構成1とは大きく異なる。白滝頁岩と黒色緻密質安山岩が主体となり、これに硬質頁岩と玉髄が加わる構成である。これを消費石材構成2とする。この地域で特筆すべき特徴は白滝頁岩と黒色緻密質安山岩の非常に大規模な消費遺跡が認められることである。北西部との境界は概ね印旛沼とそれに注ぎ込む鹿島川の流域に求められるが、印旛沼の南側においてはその境を相前後する遺跡が認められる。そして、これら両地域と村田川流域を境に、それよりも南部の地域に分布する遺跡に認められる構成が第3の構成である。この地域では、上総丘陵という石材原産地に近接する性格を反映して、白滝頁岩と万田野層由来と推定される諸石材が消費石材の大部分を占める。これを消費石材構成3とする。

次項では、これらの消費石材の構成の違いから区分された各地域において、石材ごとに抜き出して、消費状況を検討する。

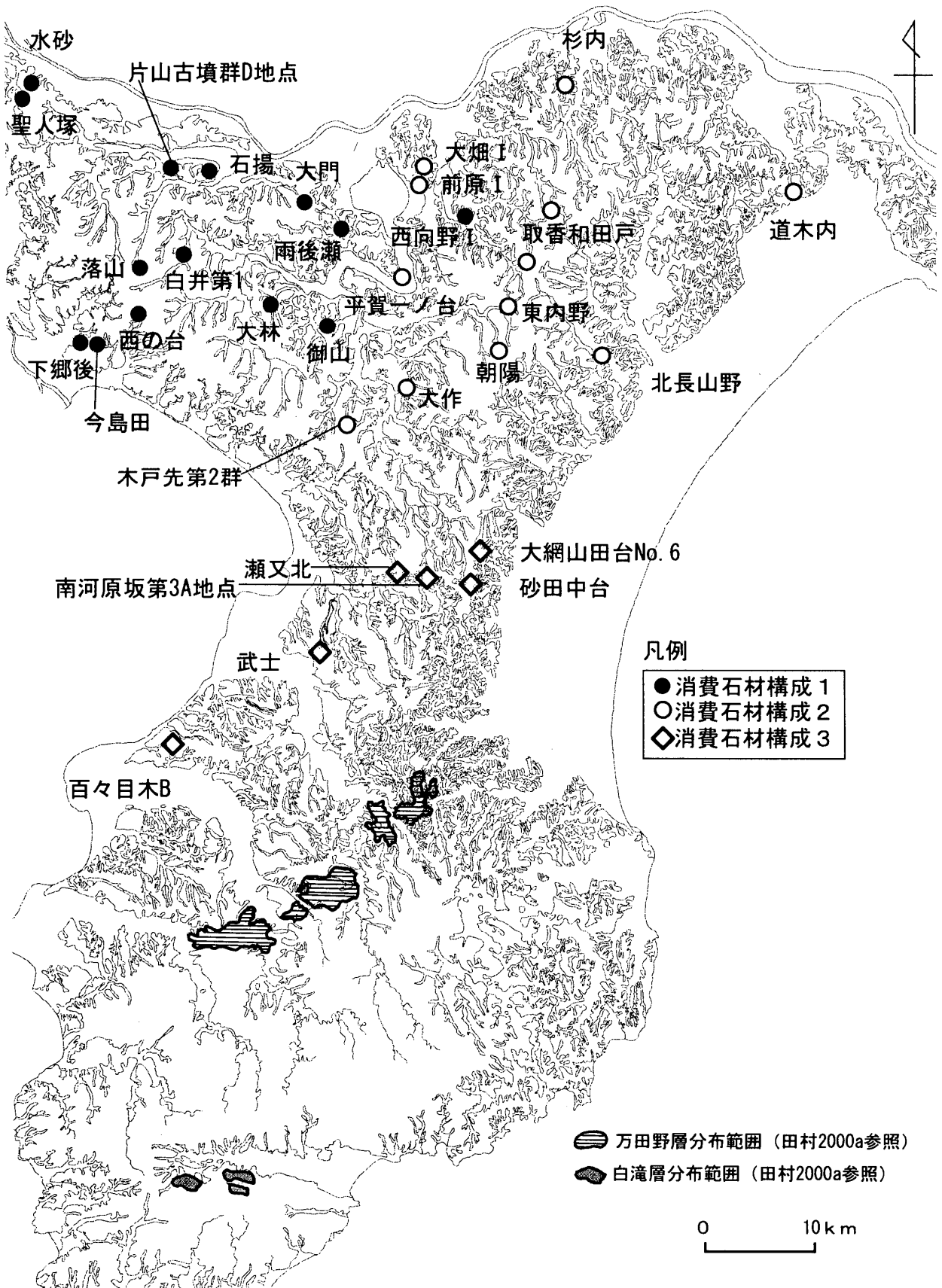
2) 各石材の消費状況

①硬質頁岩(第6図)、流紋岩(第7図)、珪質凝灰岩(第8図)、黄玉(第9図)

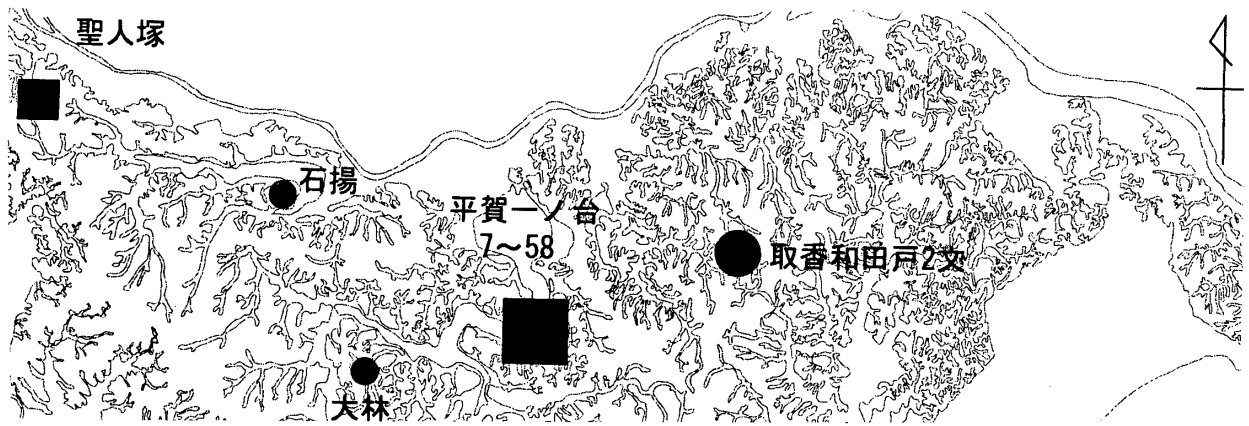
これらの石材は、先にみたように、北西部の主要な消費石材であった。第6図～第9図を見ると、やはり北西部の遺跡で主に消費されていることが確認できる。先にも述べたが、北西部ではこれらの石材がどの遺跡でもおしなべて認められる訳ではなくて、遺跡ごとに消費されたり、消費されなかったりする。これは次に見るようにそれぞれの地点での消費規模が小さいことと関係する。

消費される規模(点数)を見てみると、聖人塚遺跡(田村1986)で硬質頁岩を、石核を廃棄する比較的量の多い消費が認められるが、他はせいぜい20点以下の石核を廃棄しない小規模な消費であ

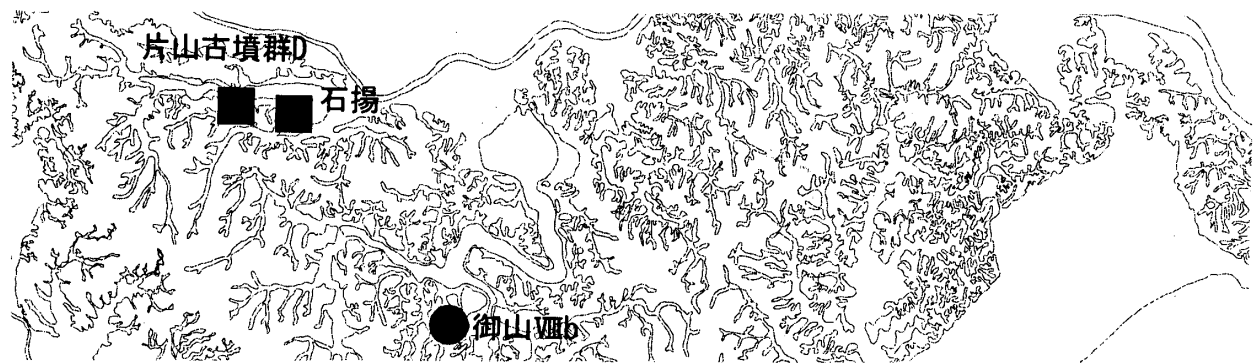
旧石器時代の領域分析
—特定共時における‘戦略束’—



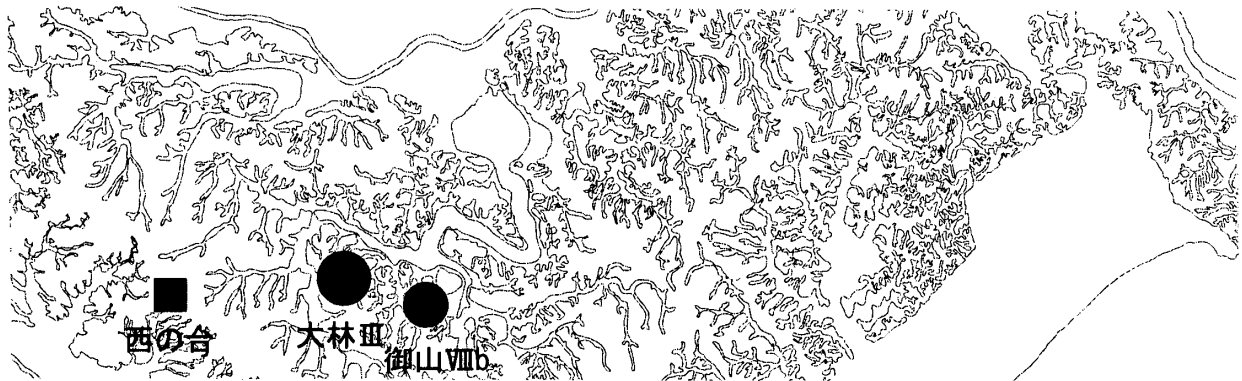
第5図 消費石材構成による地域区分



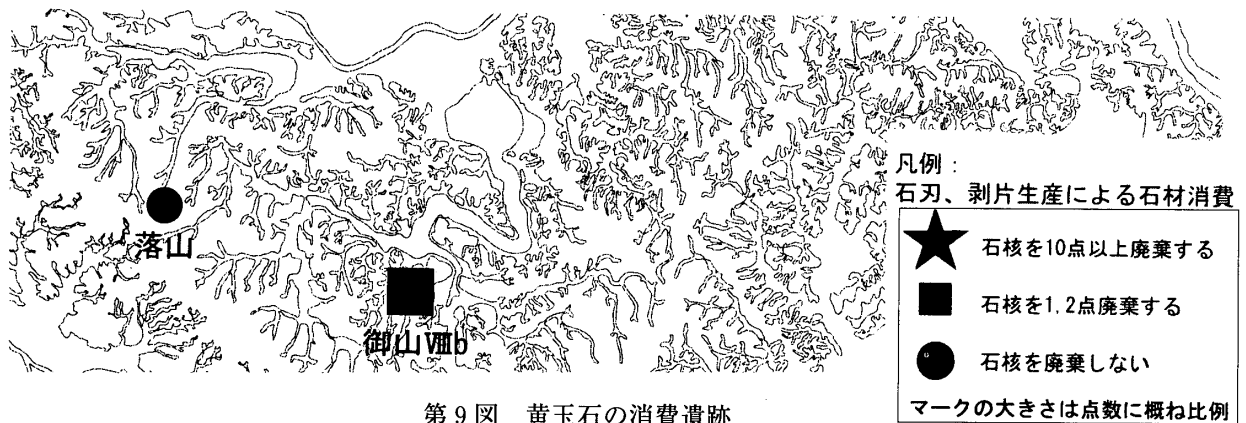
第 6 図 硬質頁岩の消費遺跡



第 7 図 流紋岩の消費遺跡



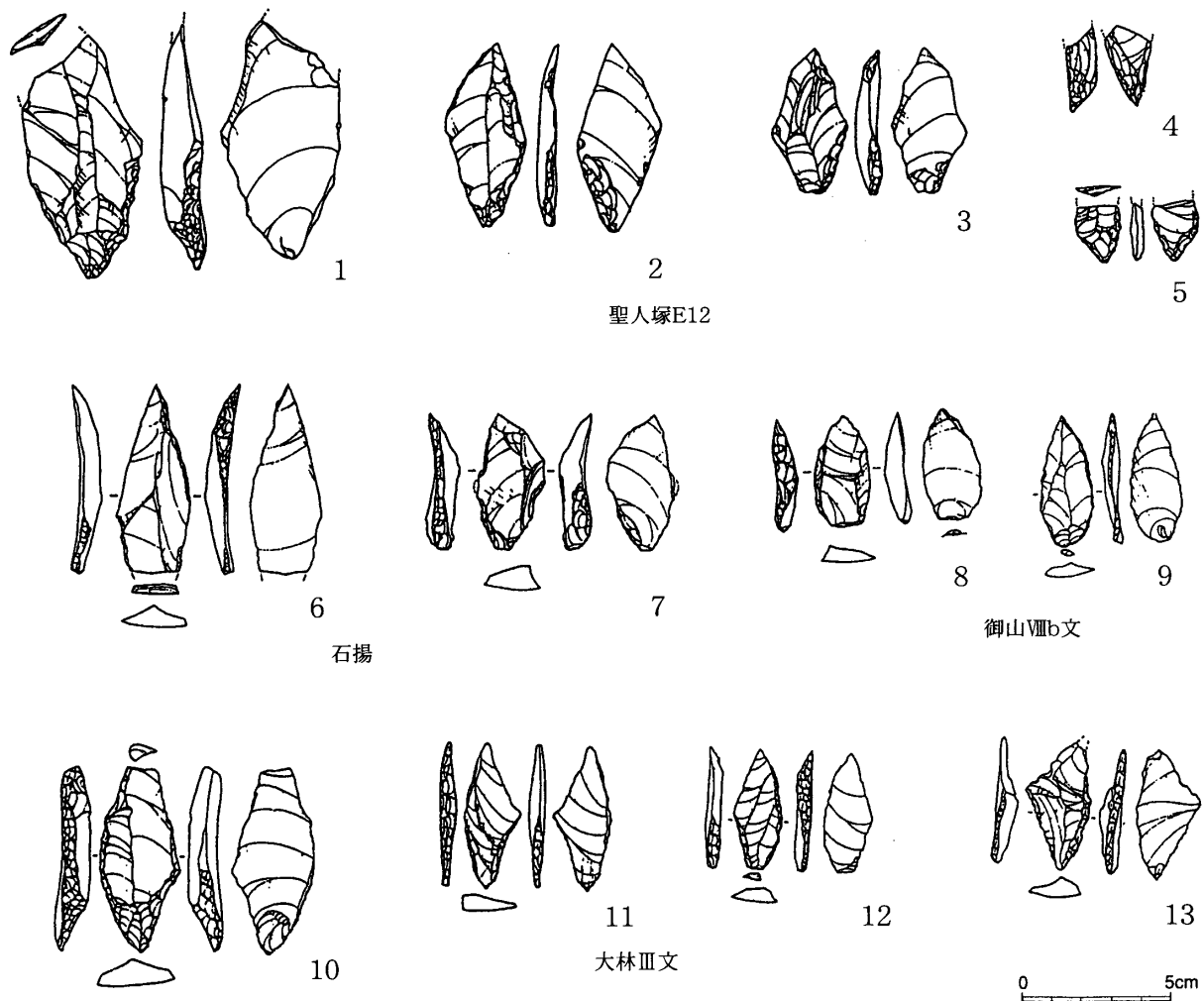
第 8 図 珪質凝灰岩の消費遺跡



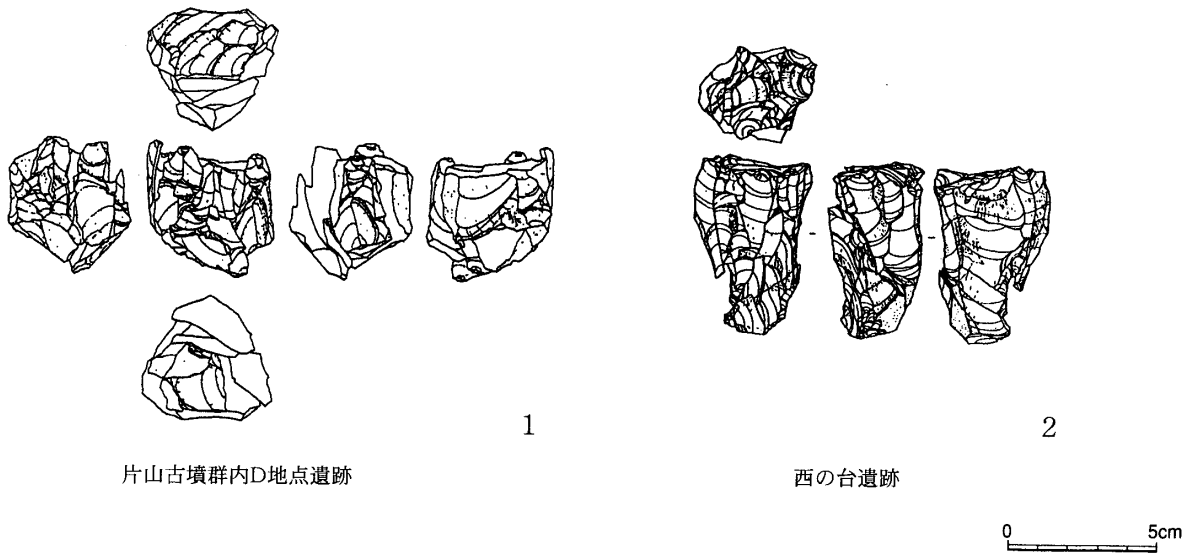
第 9 図 黄玉石の消費遺跡

る。石刃の集約的な生産は認められないようである。聖人塚遺跡第1文化層や石揚遺跡（安井1994）、御山遺跡第Ⅷb文化層（矢本1994）、大林遺跡Ⅲ文化層（田村1989b）などにみられるような（第10図）、大型のナイフ形石器の素材になるような石刃生産は認められないが、しかし片山古墳群内D地点遺跡（落合1988）や西の台遺跡（道澤1985）など見られるように（第11図）、やや小形の石核からの石刃生産は認められる。聖人塚遺跡のやや多い消費は一般的な剥片生産によるもので、残された剥片素材の石核からもそれを確認することが出来る。従って集約的な消費地点などは認められない。これらの石材は北西部では、石刃製の大型のナイフ形石器や石刃とともに、比較的剥離の進んだ石核が持ち込まれて消費されたとみることができる。

田村隆はこれらの石材の産地について、珪質凝灰岩（ただしオパールのこと）と珪質頁岩（小稿では硬質頁岩）が対になって検出されることが多いことを指摘した上で、「このことは、両者の原産地が一致もしくは近接するものであることを暗示している。仮にそうであれば、新第三紀初頭のグリータフ火山活動と、それに後続する女川期の珪質頁岩の形成域と関連する可能性が最も高いだ

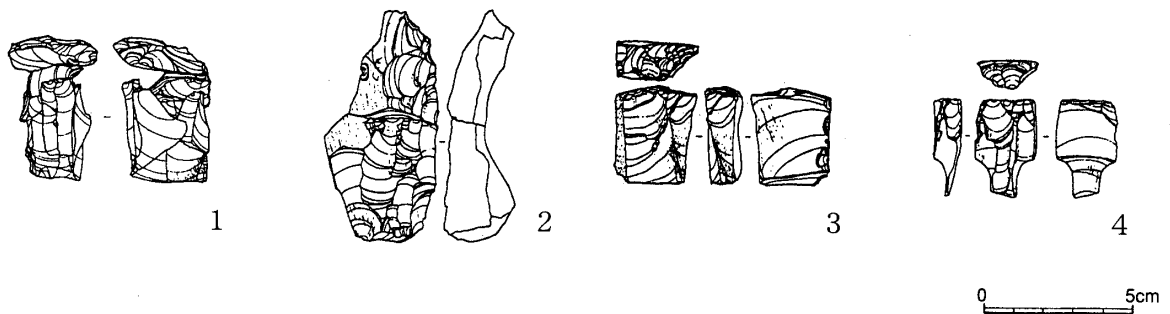


第10図 硬質頁岩、流紋岩、珪質凝灰岩によるナイフ形石器

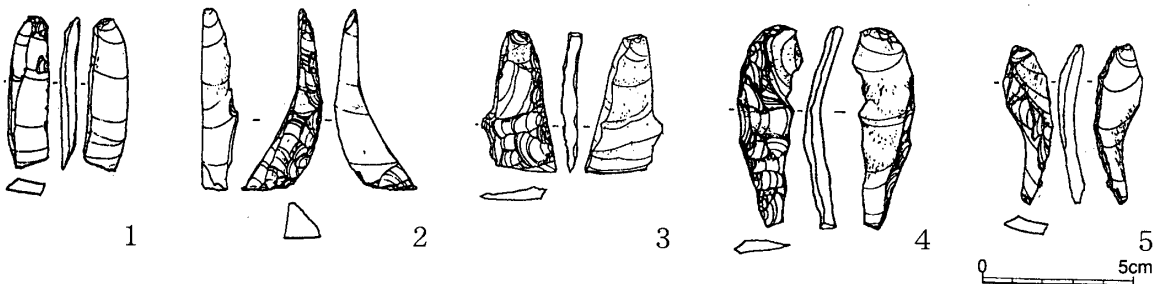


第11図 流紋岩，珪質凝灰岩による接合資料

ろう。両者は福島県中通り以西で共存しており，この地域から，奥日光にかけての山間部が今後問題となるであろう。」（田村前掲；231頁）と述べている。各遺跡での出現頻度の低さと小規模な消費から考えて，下総台地とこれらの地域を周回する過程に獲得活動が埋め込まれて，その一端が北西部において表れていると考えられる。

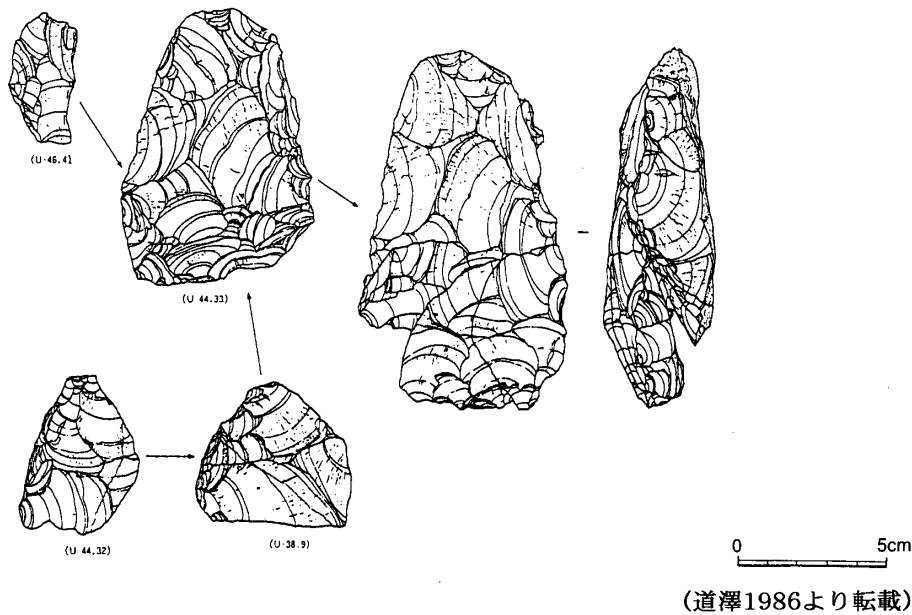


第12図 平賀一ノ台遺跡の石刃素材石核



第13図 平賀一ノ台遺跡の大型削片

旧石器時代の領域分析
—特定共時における‘戦略束’—



第14図 平賀一ノ台遺跡の石英岩接合資料

北東部については、硬質頁岩の小規模な消費が一部で見られるが、その内容は北西部とやや異なるようである。平賀一ノ台遺跡（7～58ユニット）⁵⁾（道澤1986）は硬質頁岩による集約的な東内野型尖頭器の製作址であるが、この遺跡では、厚手の石刃を石核にした石刃生産が認められる（第12図2～4）。また、ウートラパッセになった石刃の上半部を素材とし、折れ面に打面調整を施して、小形の石刃を生産している接合資料も得られている（第12図1）。

他に多数の大形の石刃が認められるが、これらは遺跡外から持ち込まれたとみられる。その中には大形の「削片」も多数認められる（第13図）。裏面に石核の素材の主要剥離面を取り込むものは（1～3）、上でみた大形石刃素材の石核から剥離されたと考えられる。これに対して、平坦剥離による調整面を取り込むものは（4、5）、両面にわたって平坦な調整が施された薄手の両面体の石核から剥離されたと考えられる。後者は永塚俊司によって「削片石核」と指摘された（永塚前掲）。類例は一本桜南遺跡（落合1998）でも認められることから、当該石器群においては、硬質頁岩による面取り尖頭器の製作址に共通する特徴として理解できる。これは、明らかに石刃石核としての biface reduction である。同じ平賀一ノ台遺跡（7～58ユニット）の石英岩による接合資料も同様に理解できる（第14図）。遺跡での搬入形態の相違から、尖頭器製作としての biface reduction とは別立てで運用されていたことが推定されるものの、両者が連続的なものであった可能性（Kelly1988）も含めて検討を要する課題である⁶⁾。

また「削片石核」は、やはり面取り尖頭器の製作址である取香和田戸遺跡第2文化層において白滝頁岩でも認められる（永塚前掲）。先にみた Nitta effect（田村1992b）の範疇で理解される石刃素材の石核消費と併せて、「削片石核」は面取り尖頭器の製作址に顕著に見ることができる。北東部の硬質頁岩による剥片、石刃生産はこの脈絡で行なわれるのであるから、単純に出土量からみる

ならば、平賀一ノ台遺跡のような硬質頁岩による面取り尖頭器の集約的な製作址において一括して搬入されていると考えられる（ただし石刃や大形削片など単品のかたちが多い）。したがって、北西部にみられたような、硬質頁岩もひとつの選択肢とする石材産地との周回による埋め込みによる獲得とは、入手方法も異なる可能性がある。

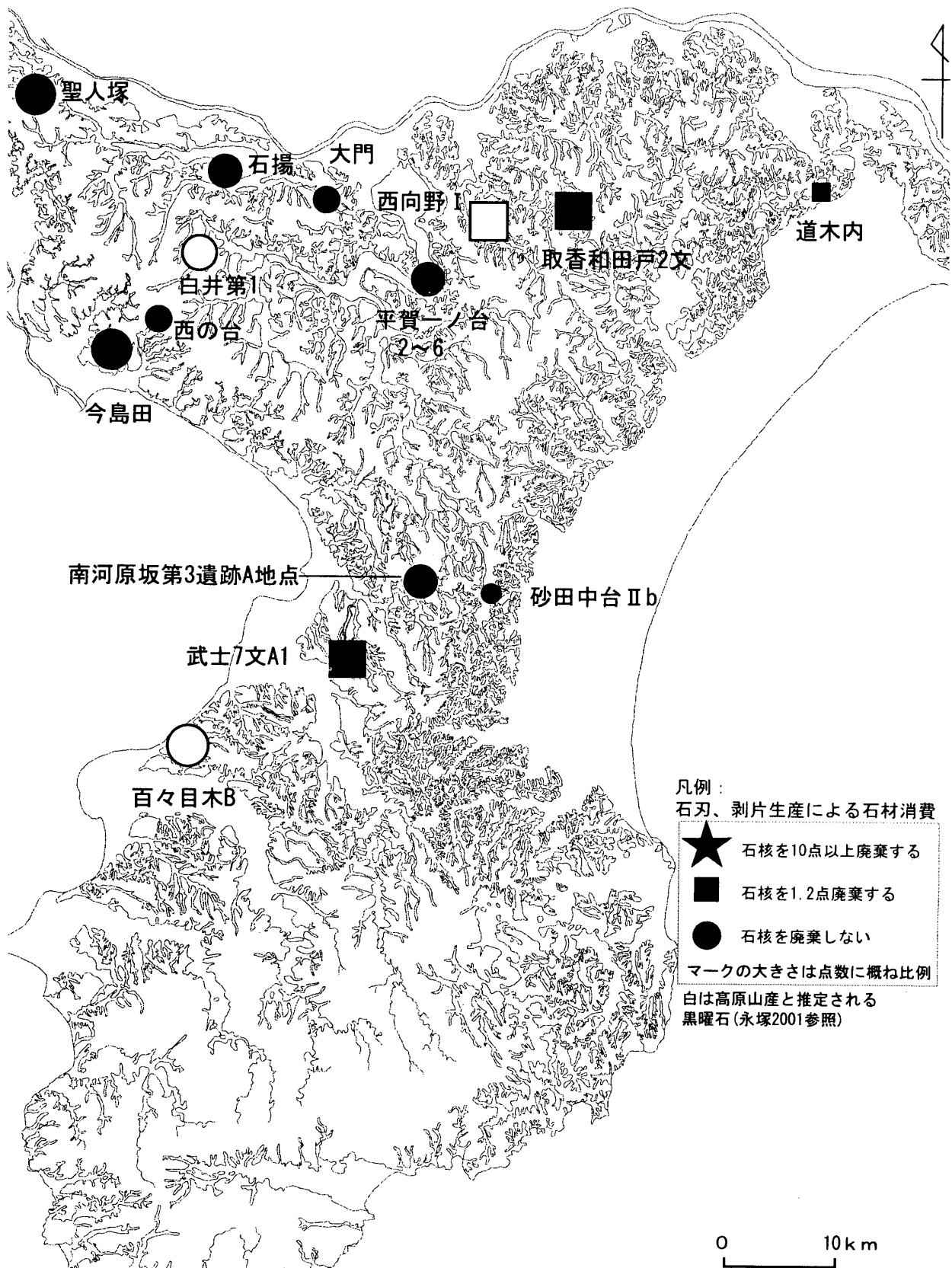
②黒曜石（第15図）

黒曜石は信州産のものと高原山産と考えられる2種が認められる。北西部において主要な消費石材であり、北東部や南部においてはわずかに消費されていた。第15図をみると、北西部に多くの小規模な消費遺跡が認められる。北東部にはそれほど多くはなく、南部は比較的遺跡数は多い。この図から下総台地全体の黒曜石の消費の傾向を見わたすと興味深い事実が読み取れる。北西部においてはあまり石核を廃棄しない消費が行われ、北東部や南部の諸遺跡では、少数ながら石核を廃棄する消費遺跡が認められることである。もちろん、信州産と高原山産の両者で同様の消費過程は想定できないのは言うまでもないことである。しかしそれを考慮したとしても、初めに黒曜石を受け入れる北西部においては石核を廃棄しないで、異なる地域にまたがって消費され⁷⁾、最終段階に至って石核を廃棄する消費過程が読み取ることができ、これまでみてきた下総台地の硬質頁岩や黄玉石と比べて長い消費過程が推定される。これは、武蔵野台地北東部においてみられた、硬質頁岩や黒色頁岩の消費過程と類似している（国武2000a 参照）。地域と石材を違って共通した傾向を読み取ることができる。

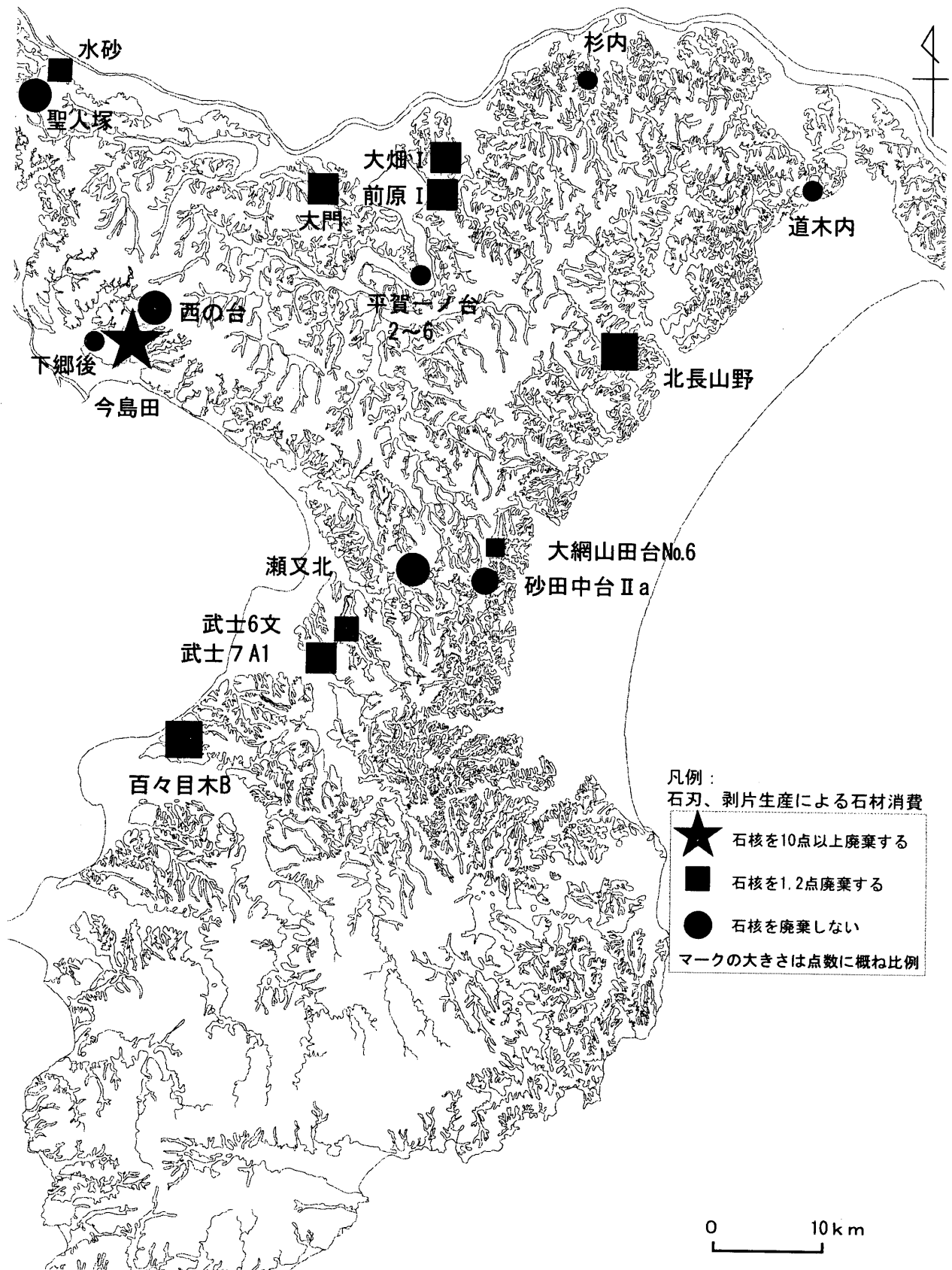
③玉髄（第16図）

玉髄は関東地方では茨城県北部の山方町諸沢、北富田、上総丘陵の万田野礫層中（田村、澤野1987）に産地が求められる。他に、下総台地東部に分布する藪・地藏堂層からも採取された可能性があることは先に述べた。玉髄は下総台地全体で用いられており、しかも地域ごとにその重要度は異なっていた。まず、北西部では硬質頁岩や黒曜石とともに、主要な消費石材として用いられている（第2図）。第16図をみてみると、北西部では、多くの遺跡で剥片剥離が行われているのが分かるが、その消費状況は一定ではない。石核が確認されている遺跡は少なく、今島田遺跡、大門遺跡（榊原1997）を挙げることができる。そのうえこれら石核を持つ遺跡の中でも、その点数には著しく差があり、大門遺跡、大林遺跡ではそれぞれ1点ずつであるが、今島田遺跡では10点の石核が検出され、さらに4点の原石を組成している。その他に打面再生剥片をはじめとして石核調整剥片が少なくとも10点検出されている（杉原1971）。170点という石器点数とならんで石核の突出した保有や、複数の原石、多数の石核調整剥片の存在から、北西部では玉髄を特定もしくは少数の遺跡に一括して搬入し、まずその遺跡で集約的に消費した在り方を想定できる。今島田遺跡に石器点数の上で次いでいるのは75点の大門遺跡であり（ただしこの点数にはオパールが含まれている）、その他の多くの遺跡は10点以下である。石器の製作をみてみると、ナイフ形石器が今島田遺跡と大門遺跡でそれぞれ3点と4点製作されており、他の遺跡では1点組成するしかないかである。他に今島田遺跡ではスクレイパーが6点製作されており、やはり他を大きく上回っている。このように、大門

旧石器時代の領域分析
—特定共時における‘戦略束’—



第15図 黒曜石の消費遺跡



第16図 玉髓の消費遺跡

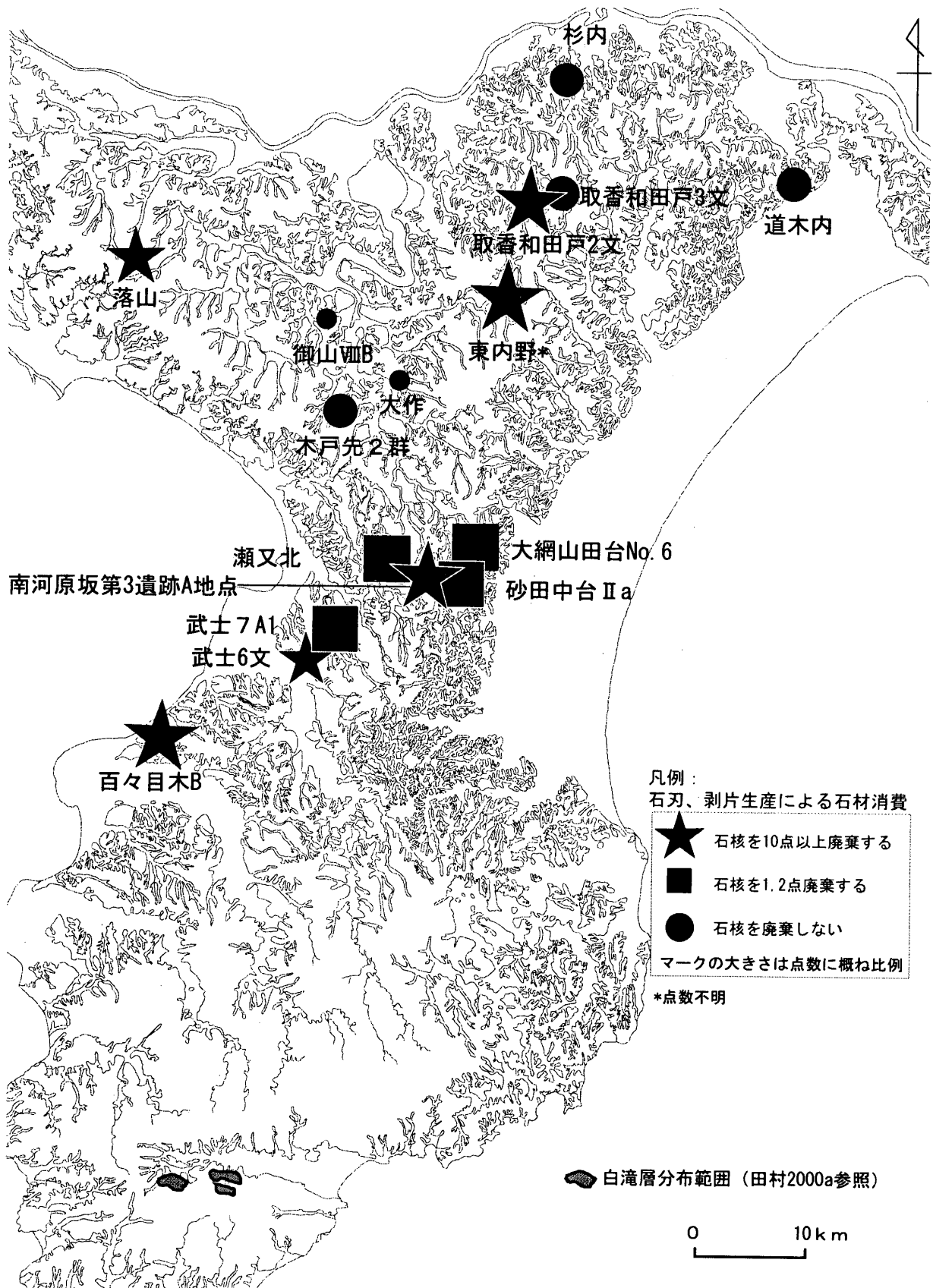
遺跡とならんでこの石材の消費の比較的初期の段階に、製品をまとめて製作する傾向があることを推定できる。以上から、当地域では玉髄は、特定もしくは少数の遺跡に一括搬入され、まずその遺跡で多量に消費されるとともに、消費の初期の段階に、製品が多量に製作される特徴を指摘することができる。これは、武蔵野台地において細粒凝灰岩が一括搬入された消費状況と同様である（国武前掲参照）。ここにおいても、地域と石材を違えて、消費傾向に共通した傾向が認められる。

次に北東部についてみる。北東部においては玉髄は副次的な消費石材であった（第3図）。第16図をみると、消費遺跡はそれほど多くはなく、その消費規模も目立って大きくはないが、ほとんどの遺跡において石核が廃棄されているのがわかる。この点が北西部と異なる特徴である。また、北東部の玉髄の消費遺跡の特徴として、小規模遺跡において、高い比率で玉髄を利用する傾向を指摘することができる（第3図）。すなわち、前原Ⅰ遺跡（石田1985）や大畑Ⅰ遺跡（石田前掲）、北長山野遺跡（道澤1990）のように、消費石材の全体量が小さい遺跡ほど、玉髄が高い比率を占めている。これは、後にみるこの地域の主要な消費石材である、白滝頁岩や黒色緻密質安山岩が消費されない遺跡ほど、玉髄が用いられることを示しており、両者の相補的な関係を想定させる。すなわち白滝頁岩や黒色緻密質安山岩の欠乏時に玉髄が補完的に採取されたという想定であるが、この想定の裏付けとして、先述したような当地域に分布する藪・地藏堂層を挙げることができる。このように北東部の玉髄の消費は、近傍の採取可能な地域を背景に、当地域の主要石材である白滝頁岩や黒色緻密質安山岩を補完し、かつ各遺跡で石核を廃棄し得る補給と消費の過程を想定することができる。

最後に南部をみると、ほとんどの遺跡において消費されている。これらの遺跡の消費規模からみると、玉髄の消費の比率は低いが、たいていの遺跡で安定的に消費されている。北東部の遺跡にみられたような、白滝頁岩などの主要な石材との補完的な対応関係は認められない。また、たいていの遺跡で石核が廃棄されているのは、玉髄の採取が可能な万田野層と接しているためと考えられる。したがって、当地域の玉髄の消費は北東部と同様に、近傍の採取可能な地域を背景にした、各遺跡で石核を廃棄し得る消費の過程を想定することができる。

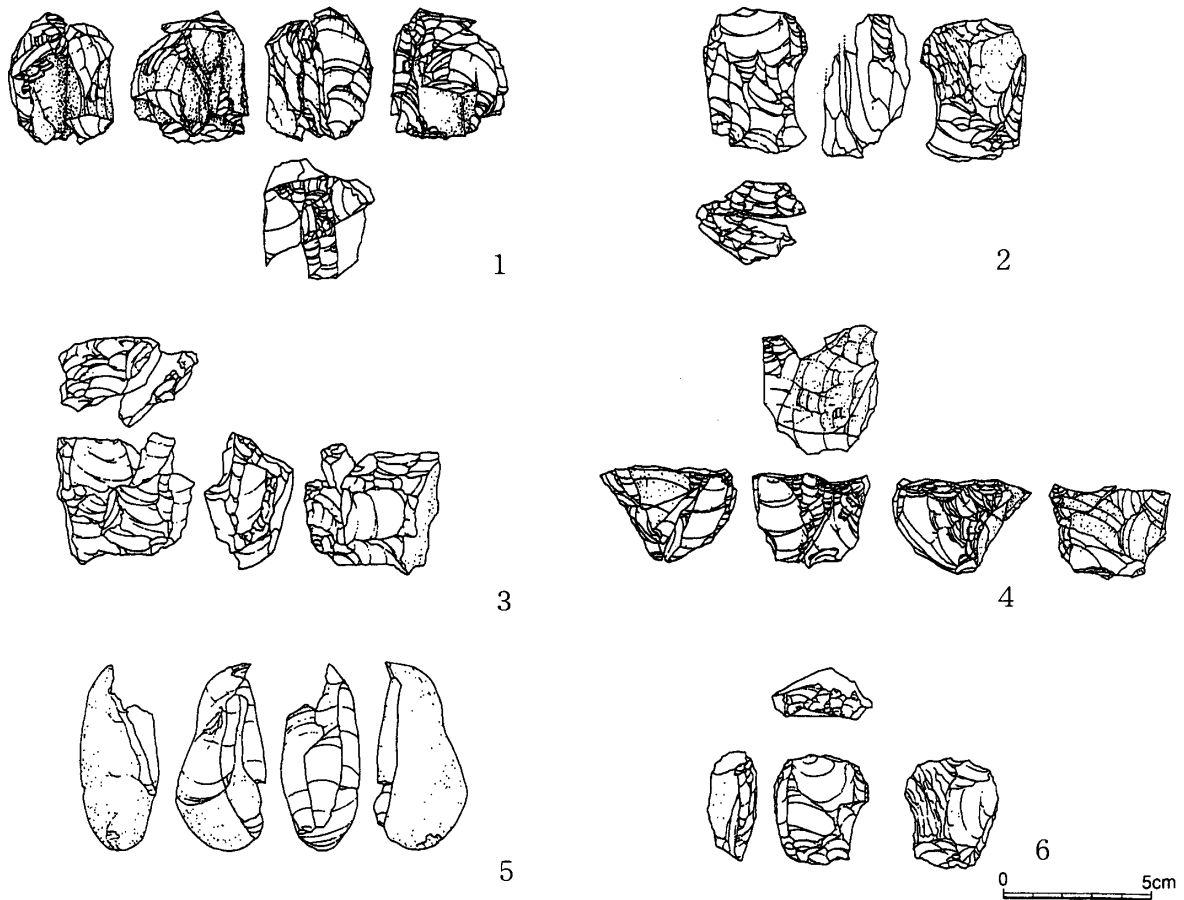
④白滝頁岩（第17図）

白滝頁岩は上総丘陵南部の加茂川の南岸に位置する嶺岡山地に原産地が求められる（田村1992a, 1994）。第三紀層の嶺岡層群中の白滝層に産するとされる良質な珪質頁岩である。小稿でいうこの石材には、他に嶺岡層群に産するノジュールも含んでいる。白滝頁岩の消費は下総台地全体にわたって認められる（第17図）。この石材の消費過程は当地域の領域を考える上で非常に重要である。まず北西部の遺跡から見てみることにする。北西部では、落山遺跡において集約的に消費されている。170点という点数は北西部の他の遺跡をはるかにしのぐ点数である。また、石核の保有量が他と比べて著しく多く12点検出され、さらにかなり原石に近い段階から剥離が始められたことを示す接合資料も多数得られている（第18図）。他に顕著な消費遺跡は認められないが、ナイフ形石器や石刃など単品のかたちでは多くの遺跡で認められる。また、落山遺跡ではナイフ形石器が6点、彫器が



第17図 白滝頁岩の消費遺跡

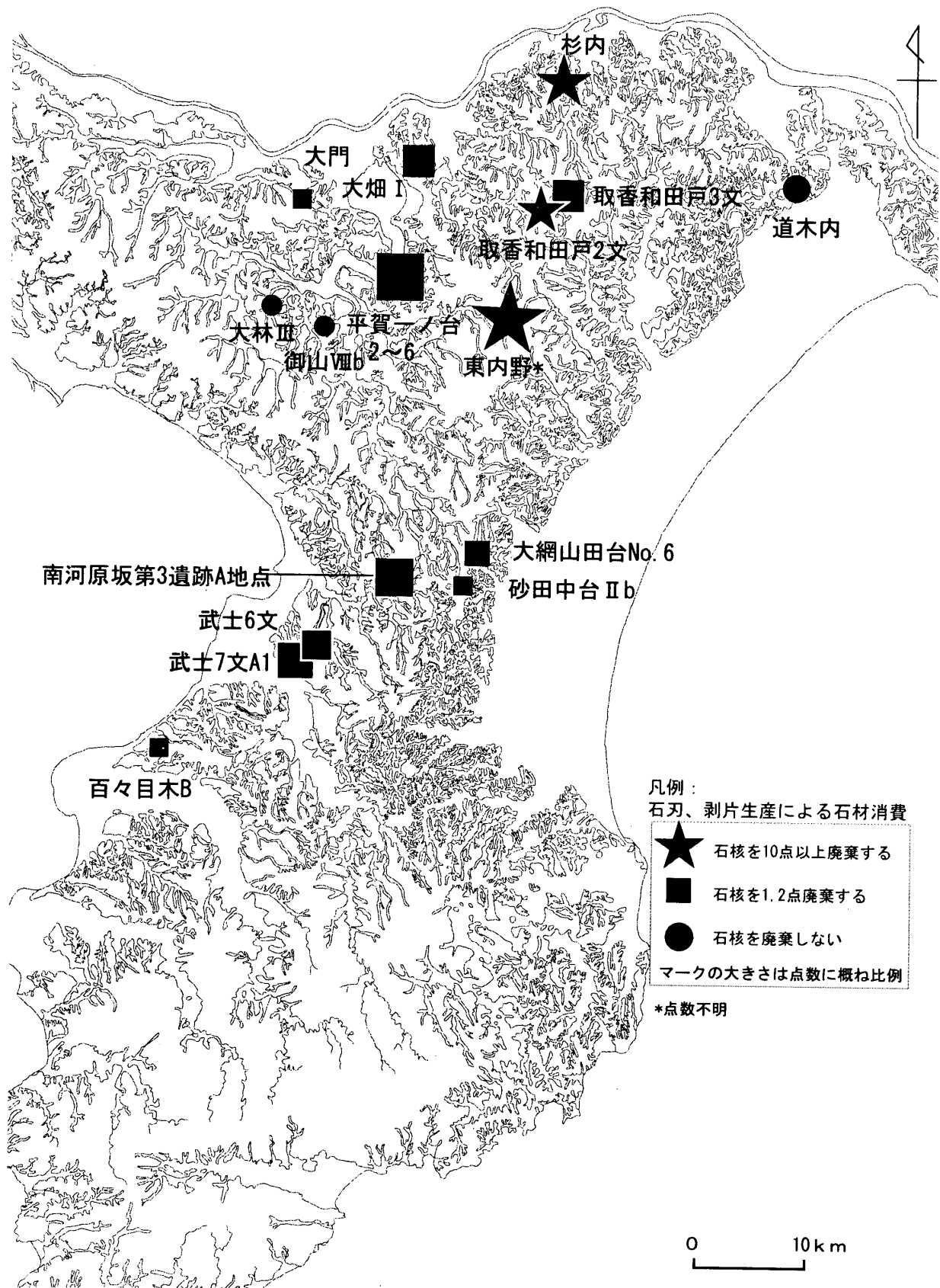
旧石器時代の領域分析
—特定共時における‘戦略束’—



第18図 落山遺跡の白滝頁岩による接合資料

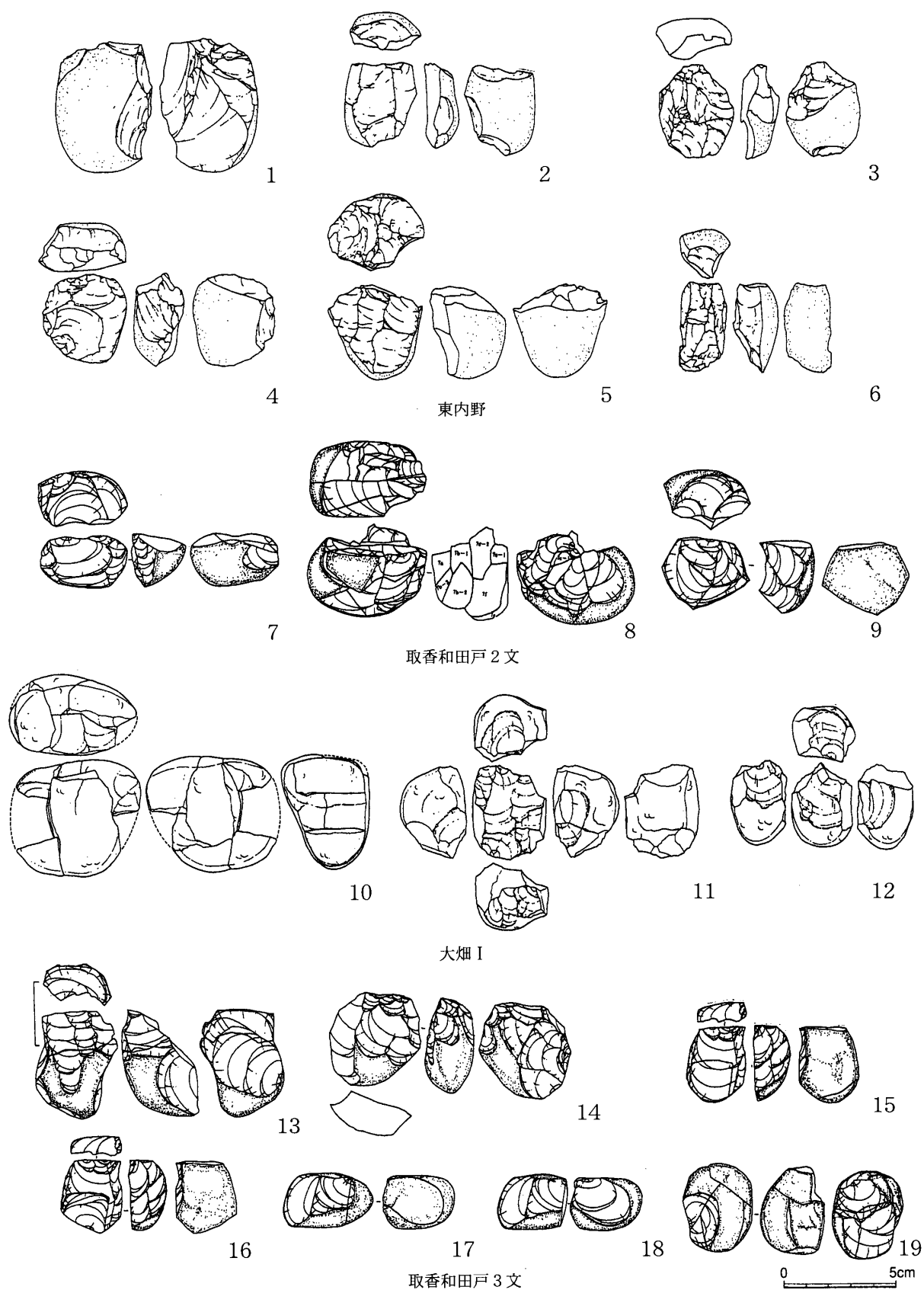
2点製作され、石器の製作も集約的に行われている。以上から、北西部における白滝頁岩の補給と消費は、特定もしくは少数の遺跡において一括搬入されて、まずはそこで集約的に消費されるとともに、石器もその遺跡において集約的に製作されるということが理解できる。このような補給と消費の在り方は、当地域の玉髄と同様であり、また武蔵野台地の細粒凝灰岩の補給と消費の在り方も共通する。ただし、北西部においては白滝頁岩のこのような形での供給量に限界があったのか、玉髄のように主体的な消費石材にはならず従属的な役割である（第2図）。

次に北東部の遺跡をみてみることにする。北東部では白滝頁岩は主要な消費石材であった（第3図）。第17図をみると、北西部の遺跡と同様に、取香和田戸遺跡第2文化層に集約的に消費されていることが理解できる。この遺跡では、365点検出され他を圧倒している。また石核も14点検出され、木戸先遺跡第2群（林田1994, 2000）の2点をはるかに凌いでいる。また製品についてもナイフ形石器が9点製作され、他の遺跡と比べても、集約的な製作が行われている。以上から北東部における白滝頁岩の消費も、北西部と同様に特定もしくは少数の遺跡において一括搬入されて、そこで集約的に消費されることが理解できる。他に、東内野遺跡と朝陽遺跡もまた白滝頁岩の石核の廃棄を伴う消費地であったとされている（篠原前掲, 田村2000a）。

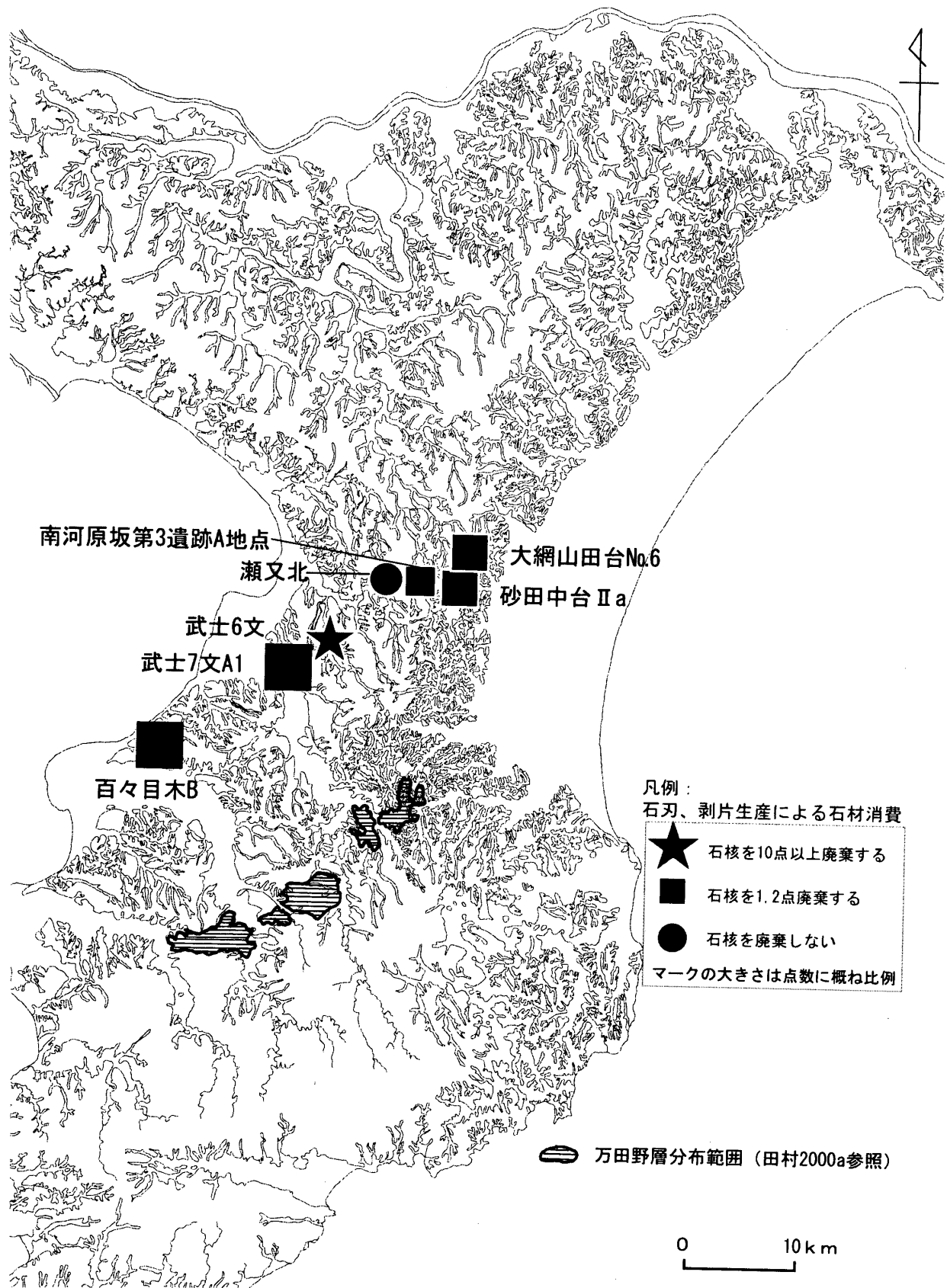


第19図 黒色緻密質安山岩の消費遺跡

旧石器時代の領域分析
—特定共時における‘戦略東’—



第20図 黒色緻密質安山岩の石核



第21図 万田野層等諸石材の消費遺跡

最後に南部の遺跡をみてみることにする。南部の遺跡では、白滝頁岩が最も主要な消費石材であった。第4図をみると、全ての遺跡で多量に消費されている。ただし、石器点数はほとんどの遺跡で200点を越え、遺跡間で余り顕著な差は認めがたい。またこれらの石器点数の多い遺跡の中でも、百々目木B遺跡（稲葉1998）のように1000点を越えても石核の点数が23点であるのに対して、武士遺跡第6文化層（田村1996）のように、100点にも満たない遺跡⁸⁾においても石核を14点と多量に保有していることから、南部においては石核の保有量による区分はあまり意味をなさない可能性がある。そのため、南部における白滝頁岩の消費は、各遺跡で比較的多量の石核を廃棄し得る消費の在り方を想定すべきである⁹⁾。

以上から白滝頁岩は北西部と北東部においては、特定もしくは少数の遺跡に一括搬入されて集約的に消費され、南部においては各遺跡において石核の廃棄を伴う集約的な消費が想定される。

⑤黒色緻密質安山岩（第19図）

黒色緻密質安山岩は北東部において主要な消費石材であった。第19図をみると、北東部においては非常に多くの遺跡で消費されていることが分かる。そのなかでも東内野遺跡と取香和田戸遺跡第2文化層において集約的に消費されていることが理解できる。東内野遺跡では第1次調査において出土した石器6634点（このうち石核が140点）の大半は黒色緻密質安山岩の円礫からの剥片剥離に伴う剥片、碎片であったとされている（篠原前掲，田村前掲，宇田川前掲）。他に取香和田戸遺跡第3文化層において136点の消費が認められ、石核が12点検出されており、やはり点数の上でも¹⁰⁾、石核の保有量の上でも、他を凌いでいる。また、両面体調整によるものと点数の上で区別がつけられないが、杉内遺跡では、13点の石核を含む149点が検出されている。このように、北東部においては黒色緻密質安山岩は白滝頁岩と同様に特定もしくは少数の遺跡において一括搬入され、集約的に消費されることが理解できる。しかしながら、白滝頁岩と異なる点は、集約的な消費が行われている遺跡以外の消費遺跡においてもまた、ほとんど例外なく石核が検出されていることである。さらにこれらの遺跡から検出される石核のほとんどは、石核の礫面の残り方や接合資料を観察すると、円礫から剥離を開始したと考えられる状態で消費され、遺跡内に残されている（第20図）。このことから、多くの遺跡には原石の形で搬入された可能性が高い。東内野遺跡第1次調査における突出した出土量や、それ以外の遺跡でもまた原石からの消費が可能であったことから考えて、白滝頁岩と同様に少数の遺跡への一括搬入が行われていたとしても、その量は、白滝頁岩と比べて、かなり多量に供給されたものと推察される。

北西部においては北東部との境付近に小規模な消費遺跡が認められる。大門遺跡で1点の石核が認められる他は、石核は認められない。

南部においても、各遺跡において消費が行われている。各遺跡において石核を廃棄し得る補給と消費の在り方が推定されるが、この地域の遺跡規模のなかでは小さなものである。

⑥万田野層等諸石材（第21図）

最後に万田野層に由来すると考えられる諸石材についてみる。これは南部において白滝頁岩

とともに主要な消費石材を構成したのであるが、その消費遺跡は南部に限られていることがわかる¹¹⁾。南部においては、各遺跡において消費され、たいていの遺跡において石核が認められる。武士遺跡第6文化層にはこの石材の石核が18点検出されているが、その消費規模はあまり大きくない。この石材のカテゴリーは多様な石材を一括しているため、細かい補給と消費の在り方は議論することはできない。しかし、各遺跡で石核を廃棄し得るだけの潤沢な補給が行われたことは理解できる。

3) 石材の補給と消費過程の一般的な類型化

以上のように、石材ごとに補給と消費の過程を見てきたが、そのなかで、地域や石材を違えて、しばしば同様の補給と消費の過程が現れるのを経験した。例えば、北西部の玉髓の消費（第16図）と北西部や北東部の白滝頁岩の消費（第17図）である。これは前項とともに、石器点数や石核保有量及び製品製作の格差からみて、「少数もしくは特定遺跡への一括搬入と集約的な消費」として考えた。これは、この石材を獲得する視点から見れば、「獲得する機会が少ないこと」と「獲得したときはその量が多いこと」を意味している。つまりこの地域にとっては、この石材は「供給される頻度は低い」が、「一度に供給される量が多い」ということを示している。

また、他の共通する例としては、北西部の硬質頁岩などの消費（第6～9図）と南部の黒色緻密質安山岩の消費（第19図）を挙げることができる。この場合は同様に前項において、「石核を各遺跡で廃棄し得る補給と消費の在り方」を想定した。石核を廃棄してしまえば、当然その先はその母岩では剥片は得られないのであるから、廃棄する以上は新たな母岩が補給される見込みがあると考えることができる¹²⁾。したがって、各遺跡で石核を廃棄してしまうということは、各遺跡でその石材を補給することが可能であるということになる。また、逆に各遺跡でこの石材を補給しなくてはならないということは、補給される量はそれほど多くはないということにもなる。実際上記の石材の分析においても、遺跡間の格差はそれほど認められなかった。よって、この場合は、「供給される頻度は高い」が、「一度に供給される量は少ない」ということになる。

以上のことから導き出されることは、石材の補給と消費の在り方は、ある石材がその地域に「供給される頻度」と「一度に供給される量」によって、規定されているのではないかという帰納的な推論である。したがって、地域や石材を超えて、石材の補給と消費の在り方を「供給される頻度（以下では供給頻度と略す）」と「一度に供給される量（以下では一度の供給量と略す）」の多寡によって類型化することができるのではないかと考えられる。そして、これを基盤とする分析を通じて、領域内での居住形態や、石器製作をめぐる行動への理解の解像度を高めることができるのではないかと考えられる。

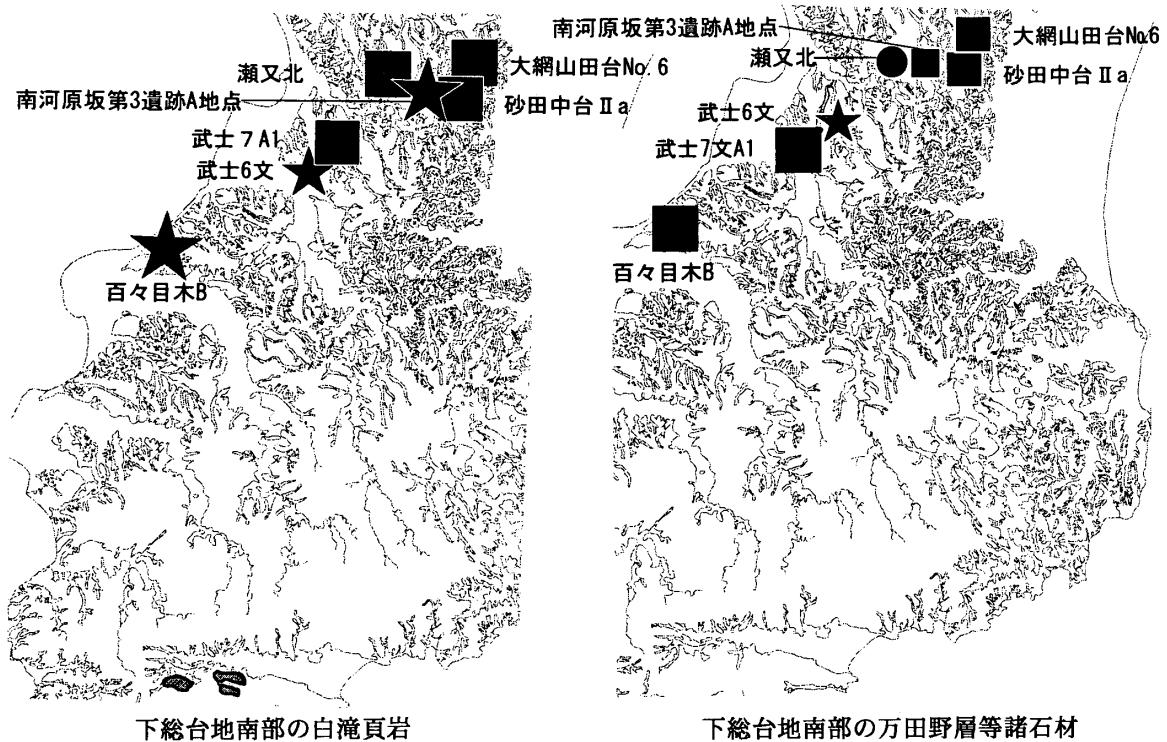
第2表は、小稿で取り上げた地域の各石材の補給と消費の過程を、供給頻度と一度の供給量によって類型区分したものである。まず第1は、供給頻度も高く、一度の供給量も多い石材の補給と消費の過程である。この補給と消費の過程を「量・頻度依存型」とする。下総台地南部の白滝頁岩と万田野層等の諸石材の補給と消費の過程が挙げられるであろう（第22図）。多くの遺跡で多量の石核

旧石器時代の領域分析
—特定共時における‘戦略束’—

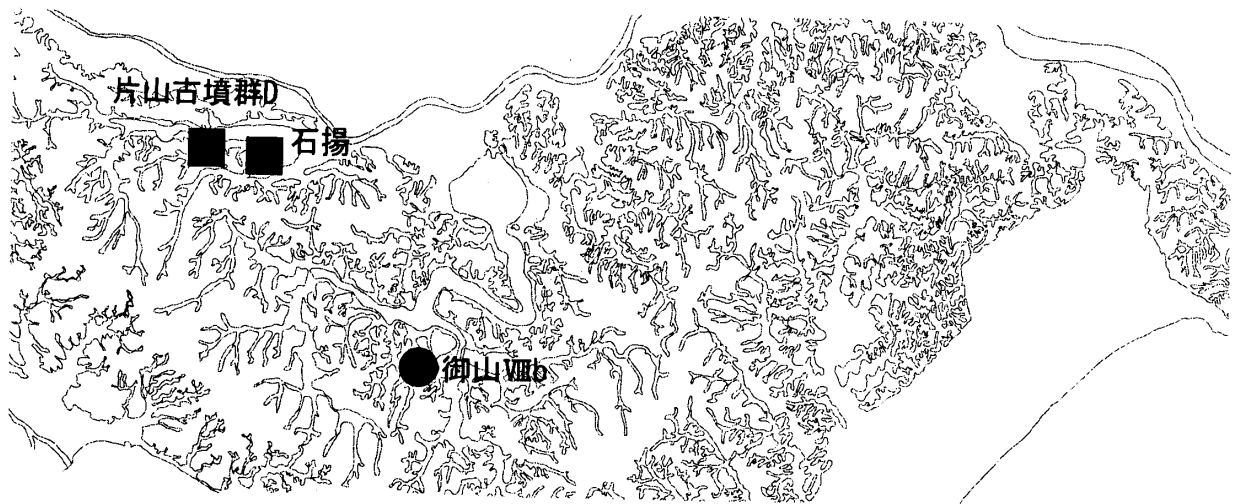
第2表 石材の補給と消費の類型化

← 供給頻度 →

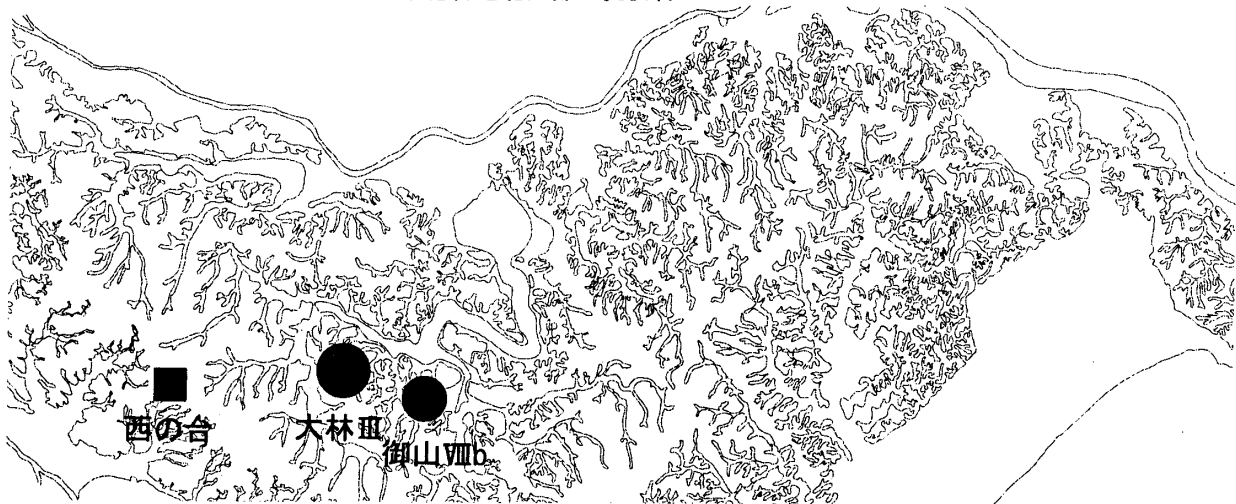
	↑ 一度の供給量 ↓	高い	低い
		多い	少ない
	多い	①量・頻度依存型 ・下総台地南部の白滝頁岩 ・下総台地南部の万田野層産	③量依存型（一括搬入型） ・ <u>下総台地北東部の安山岩</u> ・ <u>下総台地北東部の白滝頁岩</u> ・ <u>下総台地北西部の白滝頁岩</u> ・ <u>下総台地北西部の玉髄</u> ・武蔵野台地の細粒凝灰岩
	少ない	②頻度依存型 ・下総台地南部の安山岩 ・下総台地南部の玉髄 ・相模野台地の細粒凝灰岩 ・武蔵野台地北部のチャート ・ <u>下総台地北東部の玉髄</u> ・ <u>下総台地北西部の硬質頁岩</u> ・ <u>下総台地北西部の黄玉石</u>	④欠乏耐久型 ・ <u>下総台地北西部の黒曜石</u> ・武蔵野台地の硬質頁岩 ・武蔵野台地の黒色頁岩



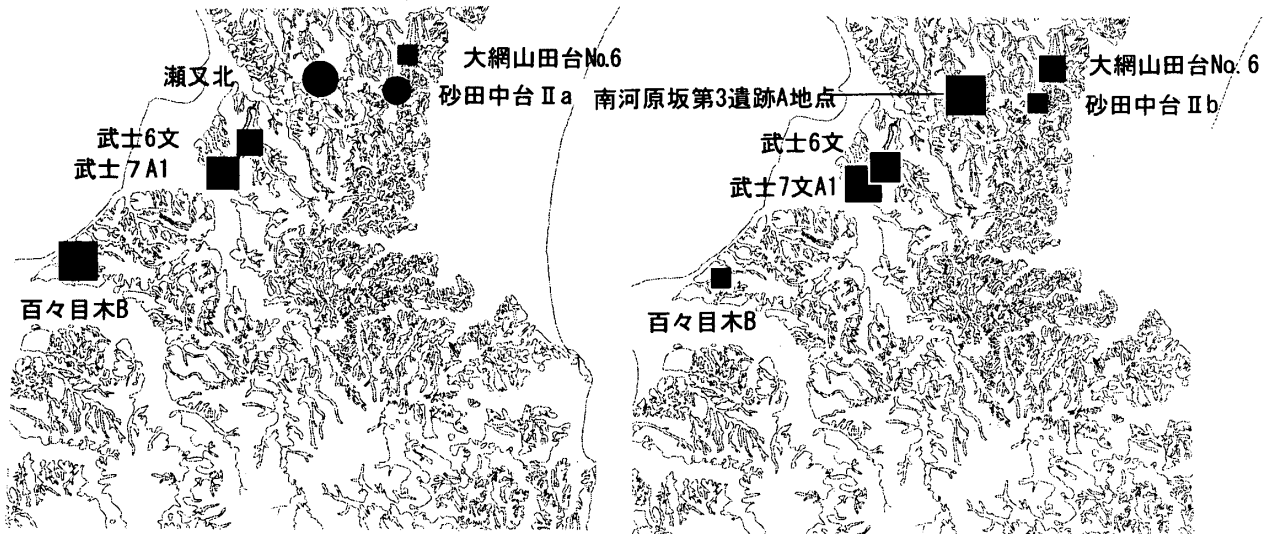
第22図 ① 量・頻度依存の石材の補給と消費



下総台地北西部の流紋岩



下総台地北西部の珪質凝灰岩



下総台地南部の黒色緻密質安山岩

下総台地南部の玉髄

第23図 ② 頻度依存型の石材の補給と消費

が廃棄されている点、各遺跡の消費規模の大きさから、量・頻度依存型の消費と評価することができる。

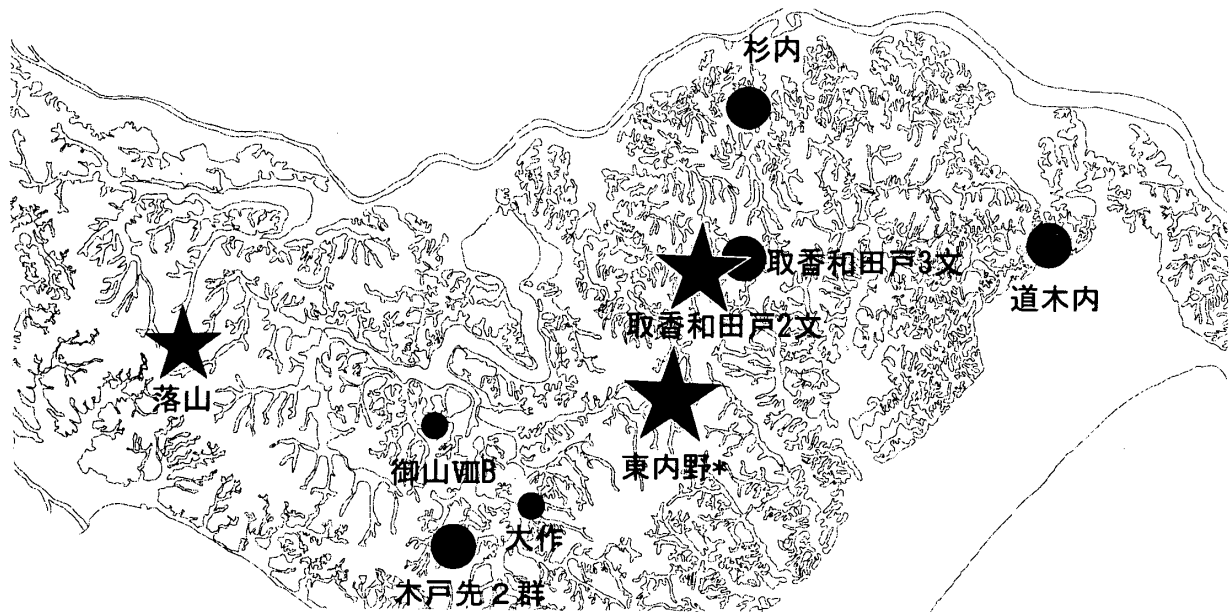
第2は、供給頻度は高いが、一度の供給量は少ない石材の補給と消費の過程である。この補給と消費の過程を「頻度依存型」とする（第23図）。この類型は、一度の供給量は多くはないが、各遺跡で補給され得るという石材補給の在り方であり、西南関東地方の該期の遺跡で在地の石材を用いた消費過程の多くはこの類型にあてはまる。砂川遺跡の分析を通じて指摘され、その後の遺跡構造論研究の基幹となった、いわゆる「原料の二重構成と時差消費」（安蒜1992）のことである。この考え方も、これらの分析を通じて見通された石材の補給と消費の過程の変異のうちの、レパートリーのひとつとしての位置付けが与えられることになる。また、遺跡間で石器点数や石核の点数などに変異が少なく、在地の石材を多用する相模野台地や武蔵野台地北部の地域は、この類型に当てはまるであろう。

さらに供給頻度が落ちる例としては、下総台地の北西部の硬質頁岩、流紋岩、珪質凝灰岩が該当するであろう。これとは反対に、供給頻度が高い例としては下総台地南部の黒色緻密質安山岩や玉髓の補給と消費もこの類型に近いのではないかと考えられる。しかしながら、これらはそれぞれの地域において、副次的な消費石材であるからこの類型に区分することが適切かどうかはやや問題であろう¹³⁾。

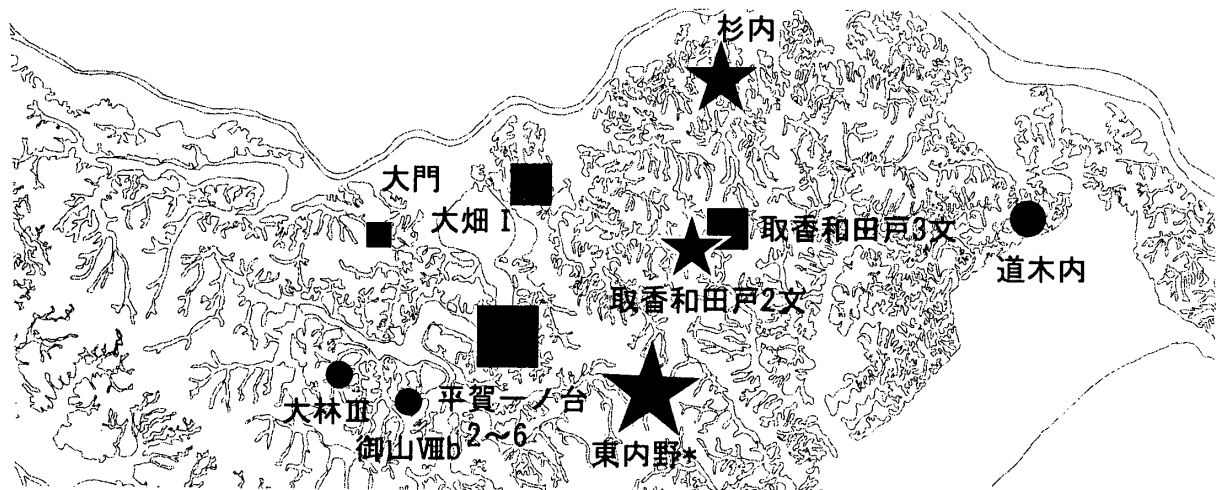
第3は供給頻度は少ないが、一度の供給量は多い石材の補給と消費の過程である。この補給と消費の過程を「量依存型」もしくは「一括搬入型」とする（第24図）。一括して少数の遺跡に多量に搬入して、集約的に消費されたと考えられる補給と消費の過程である。しかしながら、その供給頻度は大変に低い。下総台地北西部と北東部における白滝頁岩や、北西部における玉髓などに顕著にみることができる。他には、武蔵野台地の細粒凝灰岩も同様に理解できる。このように、産地近傍では頻度に依存して補給される石材が、ある程度地理的に離れた地域においてこの類型で消費されたと理解することもできる。したがって、先にも述べたがこの類型は、石材の獲得方法を強く反映している可能性が高い。

第4は、供給頻度も低く、一度の供給量も少ない石材の補給と消費の過程である。この補給と消費の過程を「欠乏耐久型」とする。これには下総台地の黒曜石や武蔵野台地北東部の硬質頁岩や黒色頁岩が該当する（第25図）。この類型は一度の供給量は少ないということであるが、それほど少ないわけではなくむしろ「頻度依存型」と比べると多いくらいである。一度の供給量が少ないとは、この石材の消費期間の割には供給量が少ないということである。すなわち、石材を補給してから石核を廃棄するまでの期間がかなり長いと推定され、他の類型と比べてとりわけ長い消費過程が考えられるのである。

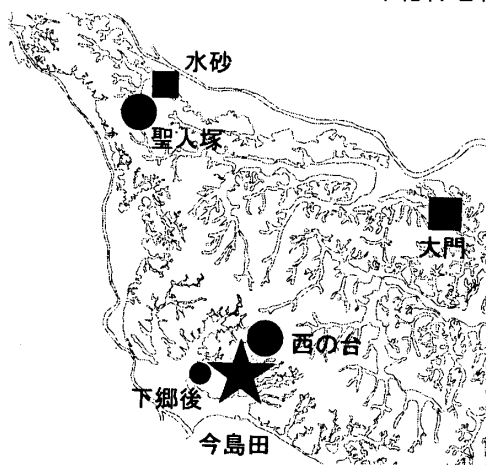
武蔵野台地の黒色頁岩や硬質頁岩をみると、まず始めに受け入れる石神井川の中、下流の遺跡においては、石核が廃棄されずに、井の頭池周辺やそれ以南の遺跡において、石核や製品が多量に廃棄されているのである（第25図下段）。この過程で、製作されるナイフ形石器が明確に小型化



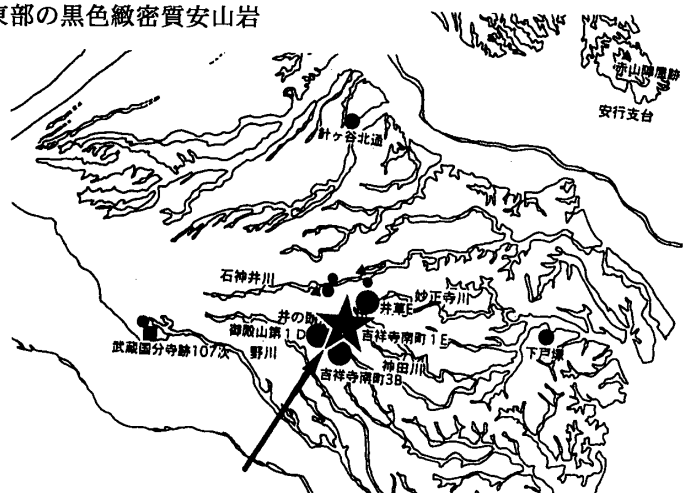
下総台地北部の白滝頁岩



下総台地北東部の黒色緻密質安山岩



下総台地北西部の玉髓



武蔵野台地の細粒凝灰岩

第24図 ③ 量依存型の石材の補給と消費

していき、搬入品のナイフ形石器の割合が増えていくが（国武前掲）、この点にも消費し得る石材が遺跡を経るごとに欠乏していくことが表れている。

下総台地の黒曜石をみると、まず始めに受け入れると考えられる北西部ではほとんどの遺跡において、石核が廃棄されていない。そして、北東部や南部などで、石核は最終的にそれらの地域において廃棄されている。これまでみてきた下総台地の他の石材と比べてもとりわけ長い消費過程をみてとることができる。また、製品製作については、武蔵野台地の硬質頁岩や黒色頁岩では、ナイフ形石器の製作が消費の初期段階に集中し、消費の最終段階に多量に廃棄されるという現象が認められたが、下総台地の黒曜石はそれほど、製品の製作や廃棄に偏りは認められない。これは、武蔵野台地北東部における基本的な移動が大型湧水池を経由して行われており、比較的限定されていたために同じ地点に消費傾向が重複していったと考えられるのに対して、下総台地では武蔵野台地ほどには移動経路が限定されず、むしろ反対に先に述べた地形的特徴から拡散していったためと考えられる。

4) 石刃・剥片生産を支える戦略束

以上のような石材の補給と消費の過程全体の類型化は、供給頻度と一度の供給量という一般的な行動に基づく基準によって規定されているために、当該石器群に限られる問題ではないと考えられる。むしろ、石材を獲得して、それを消費しながら移動生活を行う狩猟採集民の居住に対して、ある程度一般的に適用可能な視点ではないだろうか。筆者は旧石器時代の移動戦略や居住形態の研究は、石材の補給と消費の在り方を特定していく方向性をまず第一に基盤とすべきと考えている。この基盤を先に述べたような一般的な行動に基づく基準によって類型化し得たことは、その先に展望される様々な問題関心にまで、具体的な分析を広げることが可能となる。

上で見たそれぞれの類型は、石材環境の違いとともに、それに対応した獲得方法の違いを反映しているとみられる。たとえば、量・頻度依存型と頻度依存型は一度の供給量の多寡に基く相対的な違いである。共に供給頻度が高い点で、埋め込み戦略（Binford 前掲：田村1992a）による獲得と推定され、一度の供給量の多寡は原産地との距離の遠近を主に反映していると考えられる。

これに対して、量依存型は供給頻度の低さと、それを補う供給量の多さからまた異なる獲得方法が推定される。しかしながら、白滝頁岩と黒色緻密質安山岩についてみると、北東部では主要な石材であることから（消費石材構成2）、そのような主要な石材を交換に頼ると考えるのは現実的な想定ではない（田村1989a：角張前掲）。やはり直接採取ということになるが、そうすると、residential な移動の過程での獲得（埋め込み戦略）を示すと考えられる頻度依存型とは、かなり異なるので、local group の一部が特別に採取に赴いた可能性も考慮する必要がある。次項での、東内野型尖頭器の運用を検討した上で考察したい。

最後に、欠乏耐久型であるが、これは単純に石材獲得方法と結び付けて理解するのは難しい。供給頻度も供給量も低いという点から、限定的な交換による入手もその可能性として考えられる。下

総台地の信州系の黒曜石については、そのような推定も可能かもしれない。これに対して、武蔵野台地北東部の硬質頁岩や黒色頁岩もこの類型であるが、この地域での比率の高さを考慮すると、量依存型と同様に、直接採取の2通りの方法のなかから考えたほうがよいかもしれない。

以上のように、類別した石材の補給と消費過程は、必ずしも単純に石材獲得方法と一対一で対応させることはできない。それは、同じ類型でも、地域によって石材産地との間に自然的、社会的な違いがあるからで、いわば当然の帰結である。しかしながら、ひとたび各地域に視点を移すならば、それぞれの石材に向けられた各類型は、上述した条件に応じて個別に発揮された、戦略のひとつとみなすことができる。これまで見てきたように、各地域においては、それぞれに異なる補給と消費過程が複数重なって認められる。したがって、各地域の石刃、剥片の生産を支える石材の補給と消費過程を比較するには、個別の戦略を統合させたいわば「戦略束」(田村1998)をもって分析単位とするのが有効である。ところで当該石器群の場合、各地域における東内野型尖頭器の運用と併せて、戦略束というべきである。したがって、ここでは、全体の戦略束の一部を扱うことになる。

その戦略束の比較を通じて、これまで暫定的に区分してきた各地域が、固有の local group の活動領域であったか否かを検討する材料とすることができると考えられる。

まず第一に北西部は、頻度依存型の硬質頁岩、珪質凝灰岩、流紋岩と、量依存型(一括搬入型)の白滝頁岩、玉髄、および欠乏耐久型の黒曜石である。硬質頁岩、珪質凝灰岩、流紋岩は頻度依存型といっても非常に供給頻度が低く、消費も小規模なものであったことは先に見たとおりである。

このように北西部では、産地の異なる多様な台地外石材に対して、それぞれ異なる補給と消費の類型を適用することにより、消費石材に組み込む構成を採っている。これが当地域の大きな特徴である。このようにみていくと、これらの多様な補給と消費の類型を同時に併用しているように見えるかもしれない。この現象については、いくつかの原因が考えられる。

まずひとつは、これらの組み合わせを、同一の local group によって残された戦略束として理解する場合である。その場合、当地域は、どの石材産地にも近接していないゆえに、資源地への接近可能性が不安定となり、あらかじめ多様な戦略を保有していて、それを状況に応じて(すなわち、ある資源地へのアクセスが困難になるような状況に直面したときに)代替的にもしくは選択的に複数の戦略を用いたために、多様性が生じたと考えることができる。それを他の地域と同様のタイムスケールで切り取って分析したときに、全てが重なってみえるということになる。したがって、必ずしもこれらの多様な石材獲得戦略が同時に発揮されていたわけではないということになる。

もうひとつは、複数の local group によって残された戦略が重複しているということである。具体的には、次に述べる北東部を中心に遺跡を残した local group の活動領域と重複している可能性を考慮することができる。

次に北東部であるが、はじめにみたように、白滝頁岩と黒色緻密質安山岩がその主要な消費石材であった。これに玉髄とチャートが副次的に加わっていた(消費石材構成2)。これらの補給と消費の在り方は、白滝頁岩及び黒色緻密質安山岩がともに量依存型(一括搬入型)であり(第2表)、

玉髄はこれらを補完する役割が想定される。チャートは三崎3丁目遺跡第2文化層で銚子産のものが多量に消費され（道澤2000）、道木内遺跡などにも認められることから、少なくとも産地周辺では供給頻度に依存できる消費類型である可能性が高い。しかし、消費遺跡が少ないため細かい検討はできない。ともあれ、北東部では北西部とは異なり、白滝頁岩や黒色緻密質安山岩という比較的単純な消費石材組成が、ともに量依存型（一括搬入型）の補給と消費の傾向を示すことが大きな特徴である。北西部と比較すると、消費石材が定まっており、それに対して適用される補給と消費の類型が単純であることから、やや安定的な石材獲得活動が想定される。しかし、西南関東地方や後に述べる下総台地南部と比べると、石材の供給頻度に依存できない点で不安定であり、その点を克服するために、石材の一度の供給量に依存する戦略に特殊化した地域であると評価される。

最後に南部は、白滝頁岩と万田野層等に由来すると考えられる諸石材がそのほとんどを占めていた（消費石材構成3）。これらは原産地に近接するためか、量・頻度依存型の補給と消費が認められた。これもまた、北西部や北東部とは異なる補給と消費の構成である。ただし、これらの消費戦略は、必ずしも同一の local group による戦略束に限定できない可能性もある。具体的には北西部、北東部を主な活動領域とする local group によって残された可能性も考慮すべきである。

以上をまとめると、下総台地の石刃、剥片剥離に用いられる石材の補給と消費からみると、供給頻度と量に依存できる南部と、少なくとも供給頻度に依存できない北部に分けて考えることができる。そして、供給頻度に依存できる南部については、南関東地方西部に近い石材消費すなわち、「原料の二重構成と時差消費」（安藤1992）が可能であったと考えられるが、そうでない北部についてはまた異なる補給と消費の類型によって対応していた。その対応の仕方が北西部と北東部で異なることはすで述べたが、両者に共通している点は、ともに供給頻度に依存できない点を、それ以外の量依存型（一括搬入型）や欠乏耐久型の補給と消費、とりわけ量依存型（一括搬入型）を採用することで克服していたということになる。

4. 東内野型尖頭器の運用

石刃、剥片生産支える石材の補給と消費の過程を検討してきたが、各地域においてそれぞれに特有の組み合わせが認められた。これらに、東内野型尖頭器の運用を重ね合わせて、はじめて当該石器群の各地域の戦略束が見出される。

槍先形尖頭器の製作を分析するのに重要な視点は、加工量が多いためにロスが大きく、そのために素材の獲得をめぐる、段階的な製作過程を採るということである（Binford1979：田村1998）。したがって、各遺跡において、どの段階から製作、調整を行っているのかを特定していくことが、槍先形尖頭器の運用をめぐる行動を検討する際に重要な視点となる（国武2000b）。

以前に、男女倉型の面取り尖頭器について、各遺跡での製作、調整段階を明らかにする目的のために、調整加工の手順を特定していく分析法を試みたことがある（国武2000c）。これを基盤にして、消費地内での間地域的なつながりが展望された（国武2001）。東内野型尖頭器についてもこの

検討を行ったが、結論からいうと男女倉型の面取り尖頭器ほどには厳密に調整加工手順を特定することができなかった。その原因を考えてみると、そもそもこの石器は、再生加工によって特徴付けられるために、遺跡に残された段階での形態や調整加工のバラエティーが大きい点が挙げられる。また男女倉型の面取り尖頭器のように必ずしも表裏両面にわたって調整加工を施すわけではないという点もその理由にあたるようである。そこで、本章では各製作遺跡の個別の観察を通して、様々な状況証拠から調整加工段階を特定あるいは推定していくことにする。

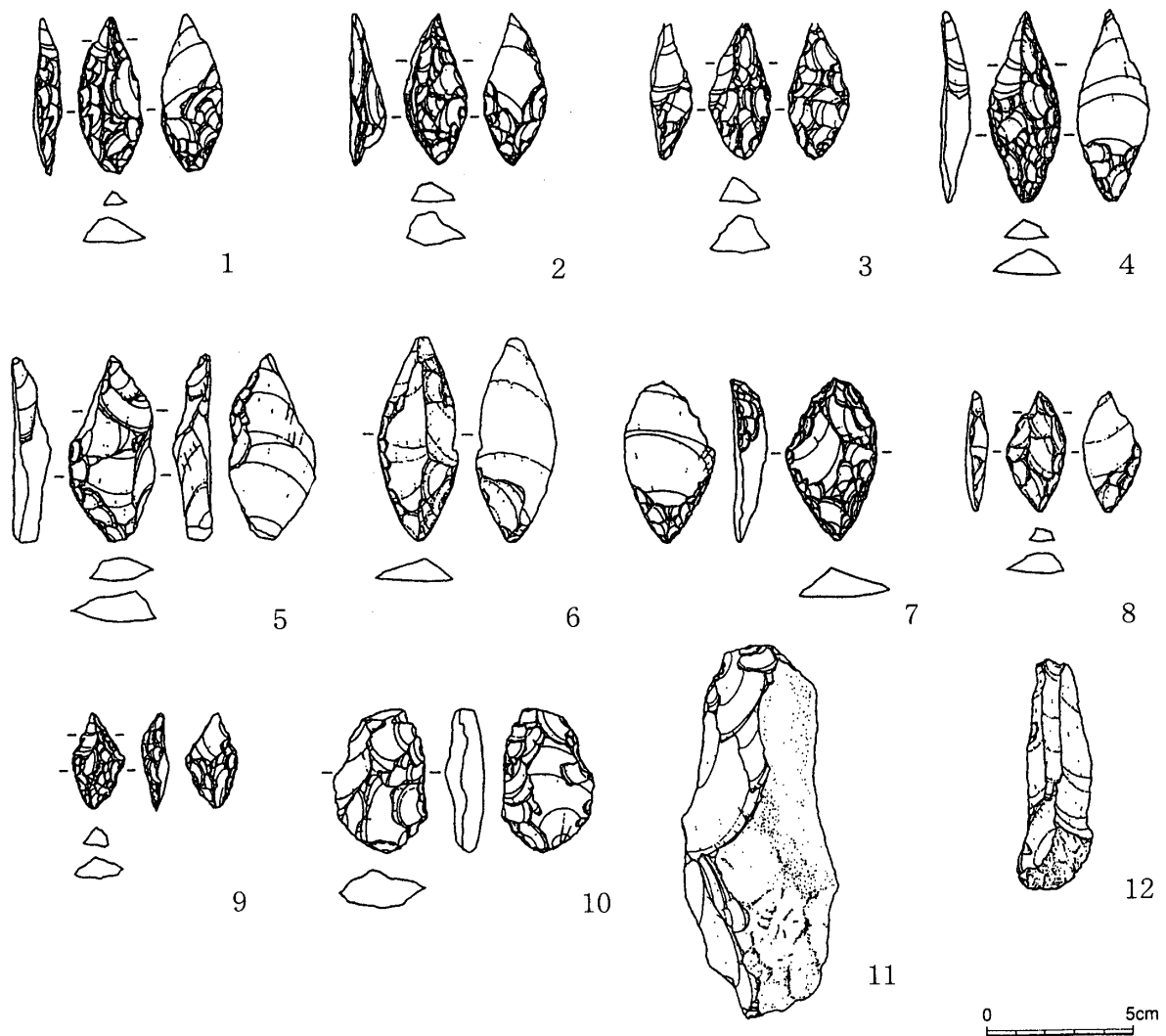
1) 各地域の製作遺跡

①北西部

北西部の東内野型尖頭器の製作遺跡として6遺跡をとりあげる。

・上貝塚貝塚（落合1994）（第26図）（位置は第1図参照，以下同じ）

総点数は496点で、平面分布は6～7箇所のまとまりをもつ。全体の90%以上にあたる453点が白



第26図 上貝塚貝塚

滝頁岩であり、白滝頁岩とオパールによる東内野型尖頭器の製作址である。東内野型尖頭器は10点検出されており、うち2点（6，8）がホルンフェルスで、他は全て白滝頁岩である。白滝頁岩の分厚い縦長剥片も搬入されており（11）、尖頭器の素材となり得るかとも考えられるが、縁辺には、微細な剥離痕とともに磨耗痕が顕著に認められ、かなり長期間にわたって刃器として用いられたことを推察させる。他には12に示した石刃が単品で搬入されているが、これは黒色緻密質安山岩である。白滝頁岩製で東内野型尖頭器の素材になり得る大きさの剥片は1点も認められない。石核は検出されていない。

東内野型尖頭器をみると、未製品¹⁴⁾が数点認められる。2は左先端部付近に素材剥片時からの折れ面を残置している。7は左側縁上部に、急角度の調整によって、直線状に加工された縁辺が認められるが、この部分の調整が他のどの調整よりも新しいため、槌状剥離を施す前段階を表していると考えられる。10は分厚い白滝頁岩の剥片の表裏に荒い両面調整を施した未製品である。裏面に面取りが2度施されているが、2度ともヒンジフラクチャーとなって途中で止まっている。

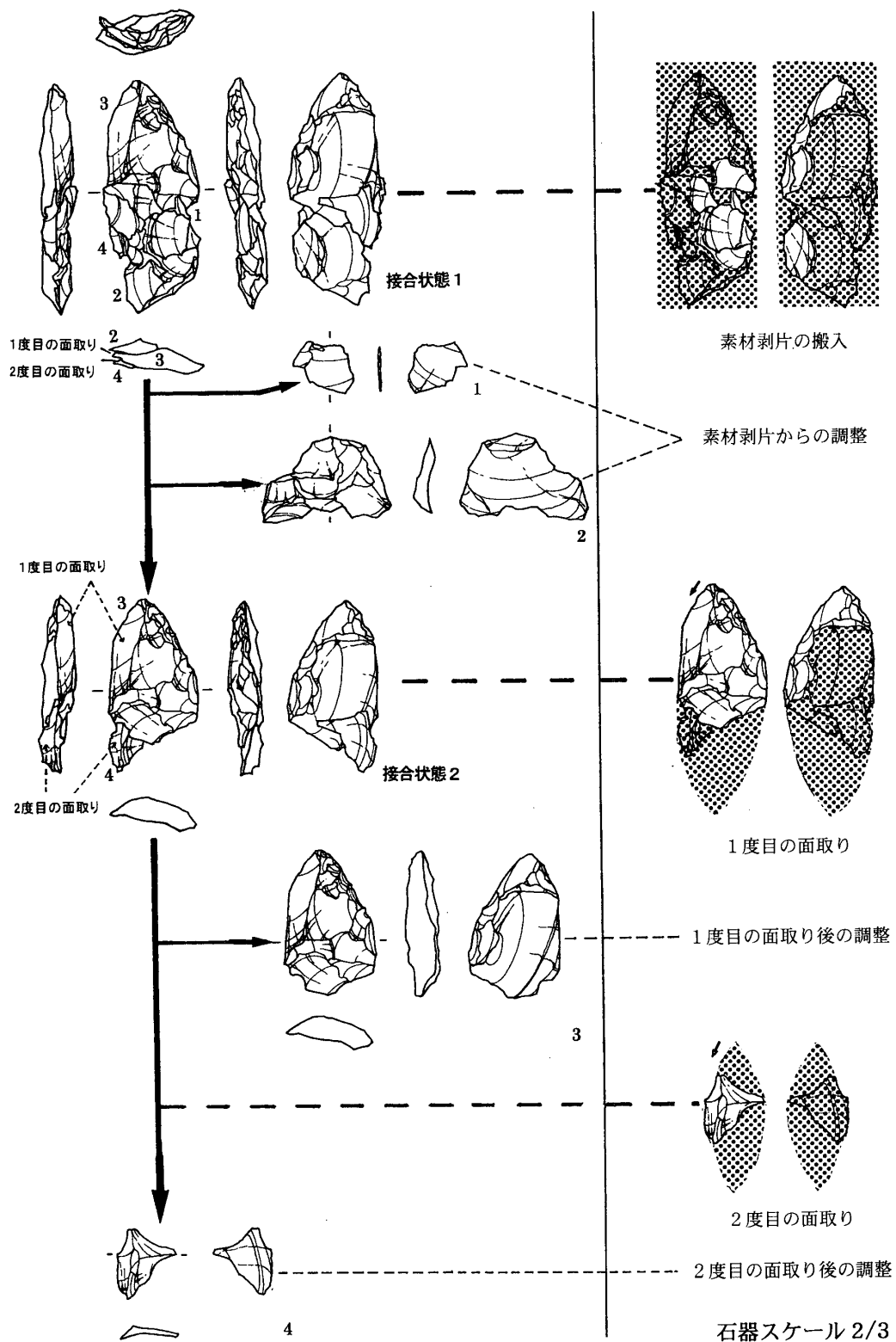
また白滝頁岩の尖頭器調整剥片を観察すると、分厚くて背面に素材剥片の稜線を取り込んでいる例が多い。とりわけ厚みの多いものが多く、検出されている東内野型尖頭器に匹敵するほどの厚さをもつ尖頭器調整剥片も多数認められる。

以上から、上貝塚貝塚では素材剥片の生産は行われていないが、調整段階としては、未製品からの最終的な調整ではなく、素材剥片からの製作、調整が主に行われていたことが推察される。この推察を裏付ける接合資料が得られたため第27図に示す¹⁵⁾。

第27図はオパール製の面取り尖頭器の調整剥片同士が接合した資料である。4点の接合であるが、うち2点の末端部分に面取りが認められ（3，4）、これらの調整剥片の剥離順序を観察することで、この遺跡における東内野型尖頭器の製作段階が読み取れる資料である。調整剥片は1，2，3，4の順に剥離されている。接合状態1として示した図が、これらがすべて接合した状態である。裏面の先端部には素材剥片の主要剥離面が一部残っている。

まず、1，2が剥離される。とりわけ2は、やや厚みあり、背面の剥離面には、素材剥片時の先行剥離面も一部観察され、稜線は全体的に鋭く立っている。つまり、素材剥片の形状を大きく残しており、初期段階の調整を示している。注目すべきは、この2が、面取りを末端部に取り込んでいる3以前に剥離されていることである（接合状態1の断面図を参照）。これから読み取れることは、2が剥離されて、そのあとに3の左側縁先端部付近に調整が加えられ、その後、3に見られる面取りが施されたことになる。すなわち2は面取り以前の調整剥片であり、またその形状により、素材剥片からの製作、調整に際して残された可能性が高い。したがってこの個体は、この遺跡において素材剥片から製作された可能性が高いということになる。3に見られる面取りの後に、右側縁先端部から調整が加えられ、その内のひとつとして、3自体が剥離されている。3はもとの尖頭器の先端部を大きく取り込んでおり、器長が大きく損なわれたものと考えられる。この剥離が意図したものか否かは断定できないが、この剥離の原因となったのは、裏面に認められる分厚い打面に、素材

旧石器時代の領域分析
—特定共時における‘戦略束’—



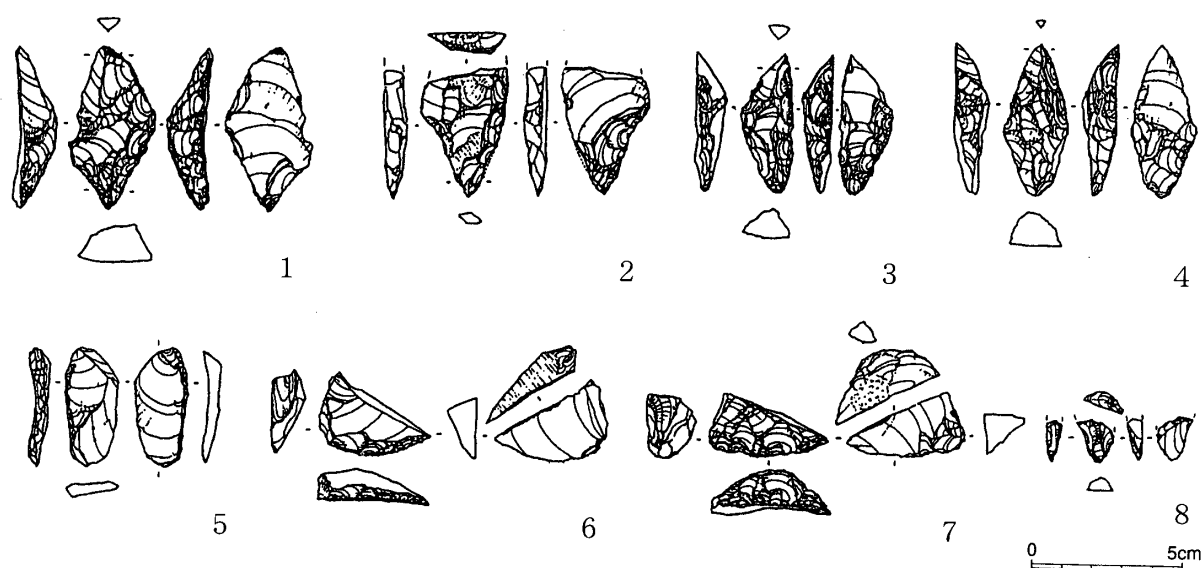
第27図 上貝塚貝塚の調整剥片接合資料から読み取れる製作段階

剥片時の先行剥離と推定される剥離面を大きく取り込んでしまったためと考えられ、それによって分厚く剥離されてしまった可能性が高い。したがってアクシデントの可能性が高いと考えられるがもちろん断定はできない。その後、右側縁を中心に剥離が進められ、かなり小形になった段階で再び面取りが施されている。4はそれを末端部に一部取り込んでいる。そして、この面取り後、右側縁からの調整により、4が剥離されている。3に見られる面取りと4に見られる面取りは同一のものではなく、そのことは接合資料1の断面図や接合状態2の左側面図において、やはり上下の関係になっていることから確認できる。

以上が、この接合資料から読み取れるこの個体の製作段階である。2の剥離以前に面取りが施されていなかったかという疑問には、さらに先端部分の調整剥片が接合していないため、否定するための直接的な根拠を示し得ないが、次の2点から間接的に否定できる。まず第一点は、2の末端部のうち、尖頭器の先端部方向の部分が分厚く反り返っている点であり、これは2の剥離以前はこの個体がかなり分厚かったことを示している。第二点は、先にも述べたが2の背面の剥離面の構成から考えて、面的な調整はほとんど施されていない点である。やはり素材剥片に近い状態であったと考えられる。先にも述べたように、この遺跡には、2に示したような調整剥片が多数認められるため、この個体のように、素材剥片に近い状態からの製作、調整が行なわれた可能性が高いのである¹⁶⁾。

・水砂遺跡 D ブロック (織笠1982) (第28図)

平面分布は3箇所のもつ。総点数388点のうち278点が硬質頁岩とみられ、硬質頁岩による東内野型尖頭器製作址である。東内野型尖頭器は4点検出されており、全て硬質頁岩である。1と2は未製品の可能性が高い。どちらも、周縁をブランディングに近い急角度の剥離によって形状を整えており、とりわけ2は器体中央には未加工の面を残す。2の先端部は面取りが施された後



第28図 水砂遺跡 D ブロック

に右側縁から調整され、先端部加工の途中で破損している。他の器種として、硬質頁岩の搔器が2点搬入されている（6，7）。石核は凝灰岩と玉髓の2点が検出されており、前者は遺跡内において消費された痕跡は残さないが、後者は同母岩の剥片、碎片が数点認められ、わずかに消費された痕跡を示す。しかし、この中に、槍先形尖頭器の素材剥片になりうるような剥片は認められない。また硬質頁岩の石核も認められず、素材剥片になり得るような大きさの剥片も認められない。

硬質頁岩のほとんど全てが槍先形尖頭器の調整に伴う調整剥片である。様々な大きさのものがあがるが、全体としては遺跡に残された東内野型尖頭器の器体に認められる剥離面よりは、はるかに大きいものが多く、分厚くて、背面に素材剥片の稜線と考えられる切り立った稜線を残すものも多い。したがって素材剥片からの調整を推定させる。

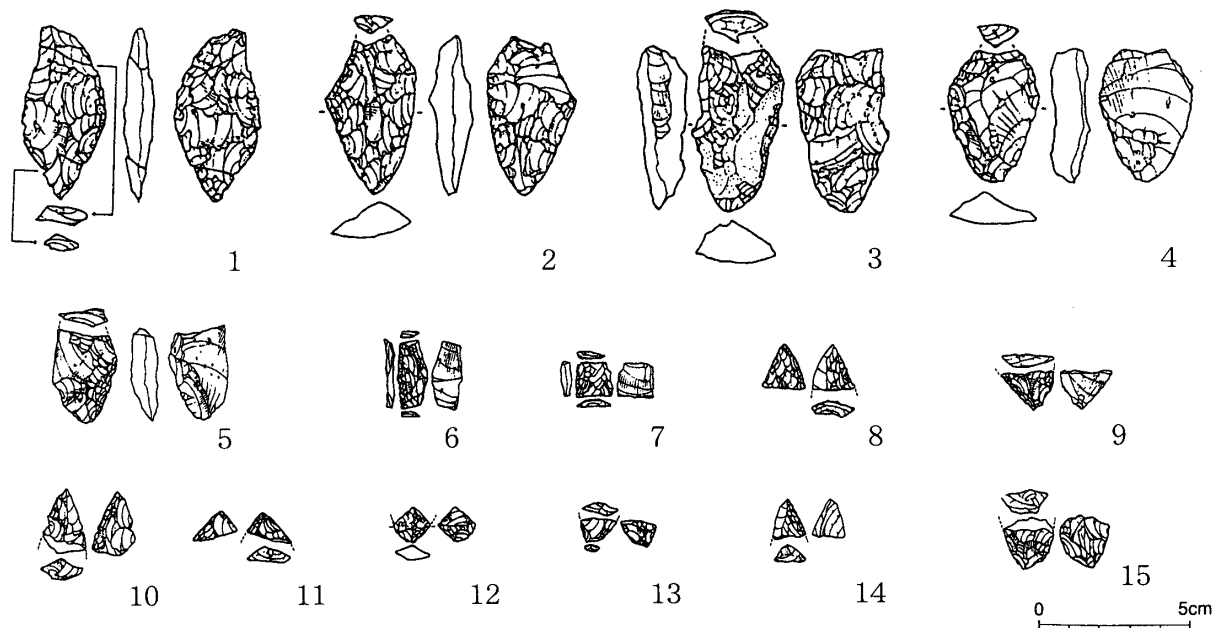
削片は少なくとも4点検出されており、硬質頁岩、黒色緻密質安山岩、凝灰岩、チャートなど遺跡で検出されている東内野型尖頭器とは異なる石材のものが含まれている。

このうち黒色緻密質安山岩の削片（5）は、検出されている東内野型尖頭器と比べてもやや大型である。また背面には面的な調整は認められず、上下と左斜め方向のやや大きな剥離の一部が取り込まれており、その上稜線が立っていることから、素材剥片時の先行剥離面と推定される。したがって、この削片は素材剥片に近い段階に剥離されたものと推定できる。黒色緻密質安山岩の両面体調整剥片も数点検出されている。

以上から水砂遺跡では、素材剥片の生産は遺跡において行われていないが、その調整加工は素材剥片に近い段階から行われていた可能性が高い。

・御山遺跡第Ⅷa文化層（第29図）

2ブロック検出され、総点数は379点である。このうち92%にあたる350点が黒曜石であり、黒曜



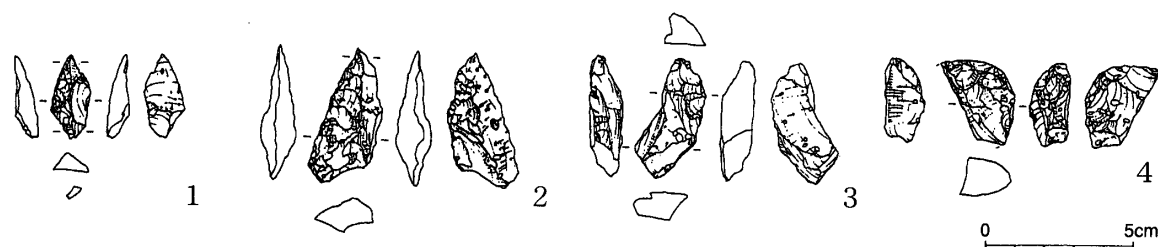
第29図 御山遺跡Ⅷa文化層

石による東内野型尖頭器の製作址である。黒曜石は高原山産と推定されている（永塚前掲）。東内野型尖頭器を含む槍先形尖頭器は13点検出されており、全て黒曜石製である。このうち、基部もしくは先端部のみのものが8点あり（8～15）、残りの5点は全て未製品と考えられるものである（1～5）。これらの未製品のうち、厚さが各部位で不揃いであることから器体を薄くする調整の途中と考えられるものが2点あり（3，4）、残りの3点は先端部の調整が未了のものである（1，2，5）。削片は7点検出されている。石核は検出されておらず、遺跡内には剥片生産による剥片は残されていない。また、硬質頁岩の石刃製の搔器や彫器、削器が搬入されている。

以上から、明確に製作段階を特定できる資料は認められないものの、調整の初期の段階で破損した例（3，4）や調整剥片の集約的な点数から推測して、少なくとも素材剥片からの調整が行われた可能性が考えられる。

・西向野Ⅰ遺跡（第2地点）（高花1993）（第30図）

総点数は397点でそのうちの383点が黒曜石である。このうちの約70%が東内野型尖頭器の製作に伴うものである。黒曜石は高原山産と推定されている（永塚前掲）。東内野型尖頭器に関連する石器は3点検出されており、これらは全て未製品である（1～3）。調整剥片も極めて不揃いな大きさで、分厚いものが多い。石核（4）が検出されており、剥片生産も認められるが、薄手の寸詰まりの縦長剥片が剥離されており、槍先形尖頭器の素材剥片の生産は行われていない。以上から、素材剥片からの調整が行われたと考えられる。

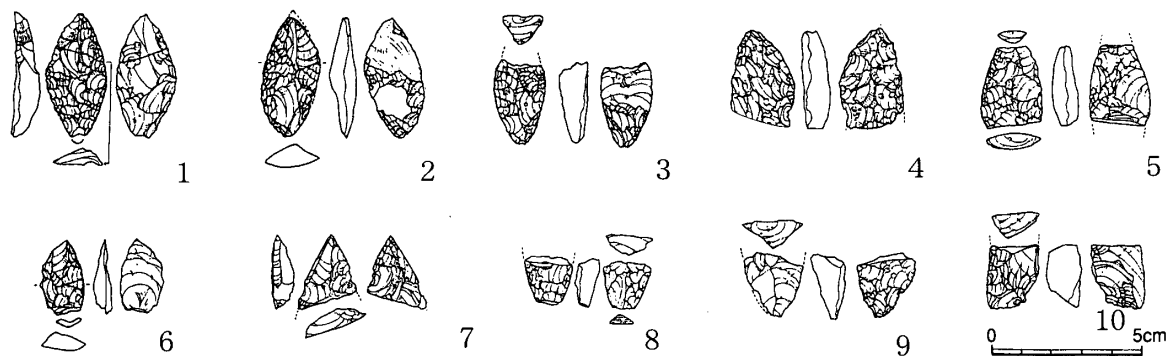


第30図 西向野Ⅰ遺跡（第2地点）

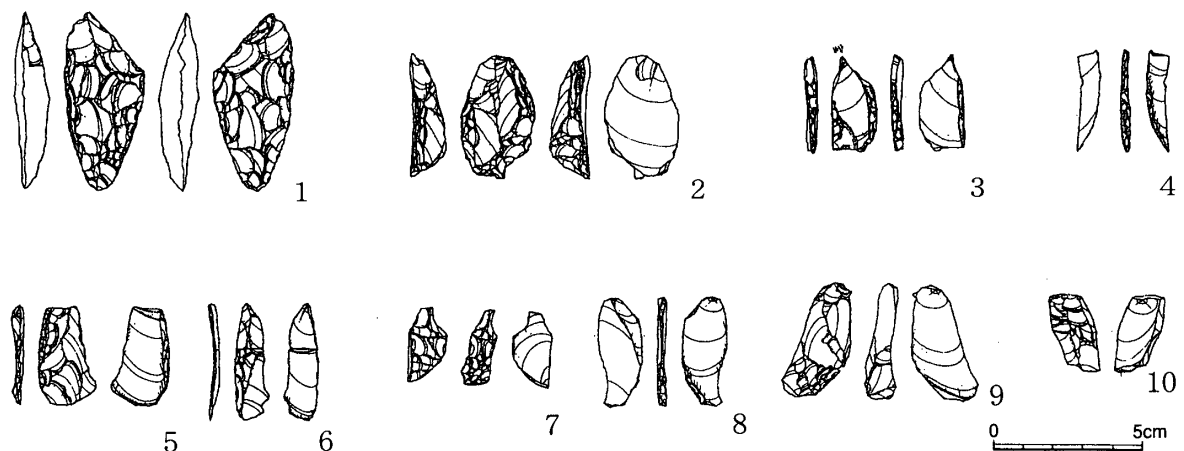
・大林遺跡Ⅱ文化層b（9，10ブロック）（第31図）

総点数254点で、そのうちの98%以上の248点が黒曜石である。黒曜石は高原山産と推定されている（永塚前掲）。黒曜石以外では凝灰岩の削片が2点検出されており、この石材でも小規模な調整が施されていた可能性がある。東内野型尖頭器は破損品も含めて16点検出されており、うち15点が黒曜石製であり、1点が安山岩製である。黒曜石の東内野型尖頭器は、製作途上の破損品が最も多いが、単品で遺跡に搬入されたものもある。黒曜石のなかには、一般的な剥片生産に給された母岩も認められる。調整段階を明確に特定できる資料は認められないが、調整剥片の点数から素材剥片からの調整が想定されるものの、断定はできない。

旧石器時代の領域分析
—特定共時における‘戦略束’—



第31図 大林遺跡Ⅱ文化層b



第32図 一本桜南遺跡

・一本桜南遺跡 8 文化層（第32図）

石器は98点で、東内野型尖頭器は1点検出されている。黒曜石の碎片2点を除くと全て硬質頁岩である。他に彫器と搔器が1点ずつ検出されているが、他は全て両面体の調整剥片とみられる。調整剥片はやや大形のものや、背面の剥離から両面調整の初期の段階のものも含まれるとみられる。その点数からみても少なくとも、素材剥片からの調整は行なわれている可能性はあるが、断定はできない。

以上から、北西部の東内野型尖頭器の製作遺跡の特徴は次のようにまとめられる。石材は白滝頁岩、硬質頁岩、高原山産黒曜石の3種にほぼ限定される。そして、どの遺跡でも単一の石材が多くの割合を占める点は共通している。石器集中は3～7箇所、5箇所前後の遺跡が多く、点数も200～500点ほどであり、遺跡規模も共通する。東内野型尖頭器の出土点数は1点～15点とややばらつきがあるが、どの遺跡でも共通して素材剥片からの調整が推定される点は重要な特徴である。

②北東部

北東部の東内野型尖頭器の製作遺跡は7遺跡認められる。これらは遺跡規模或使用石材からみると違いはあるが、東内野型尖頭器の未製品¹⁷⁾の有無やその割合、および東内野型尖頭器に対する、

削片や調整剥片の出土量の割合から見て大きく2通りのグループに区分される。

まず一つは、製作途上の未製品の割合が比較的高く、同じ石材の調整剥片が多量に、具体的には少なくとも10点の東内野型尖頭器に対して、調整剥片が400点以上は検出されている遺跡である。これらの遺跡では、それぞれの調整剥片や未製品の観察によらなくてはならないが、素材剥片からの調整が行われた可能性が高いと考えられる。

もうひとつのグループは、遺跡において検出されている東内野型尖頭器の点数は、先のグループと差はないものの、同一の石材による調整剥片がほとんどないか、あっても5点前後しか認められない遺跡である。調査精度の問題ではないことの証拠に、調整剥片や削片のみ少量（たいてい10点以下）だけ認められて、その石材の槍先形尖頭器が認められないものもある。そして多くの場合、この両方、すなわち製品だけかあるいは調整剥片だけの両パターンが組み合わされている場合が多い。このような遺跡は、素材剥片からの調整ではなく、むしろ完成品に近い状態での最終的な調整や、破損品の再加工などが想定される。

(a) 素材剥片からの調整が認められる遺跡

・平賀一ノ台遺跡 7～58ユニット（第33図）

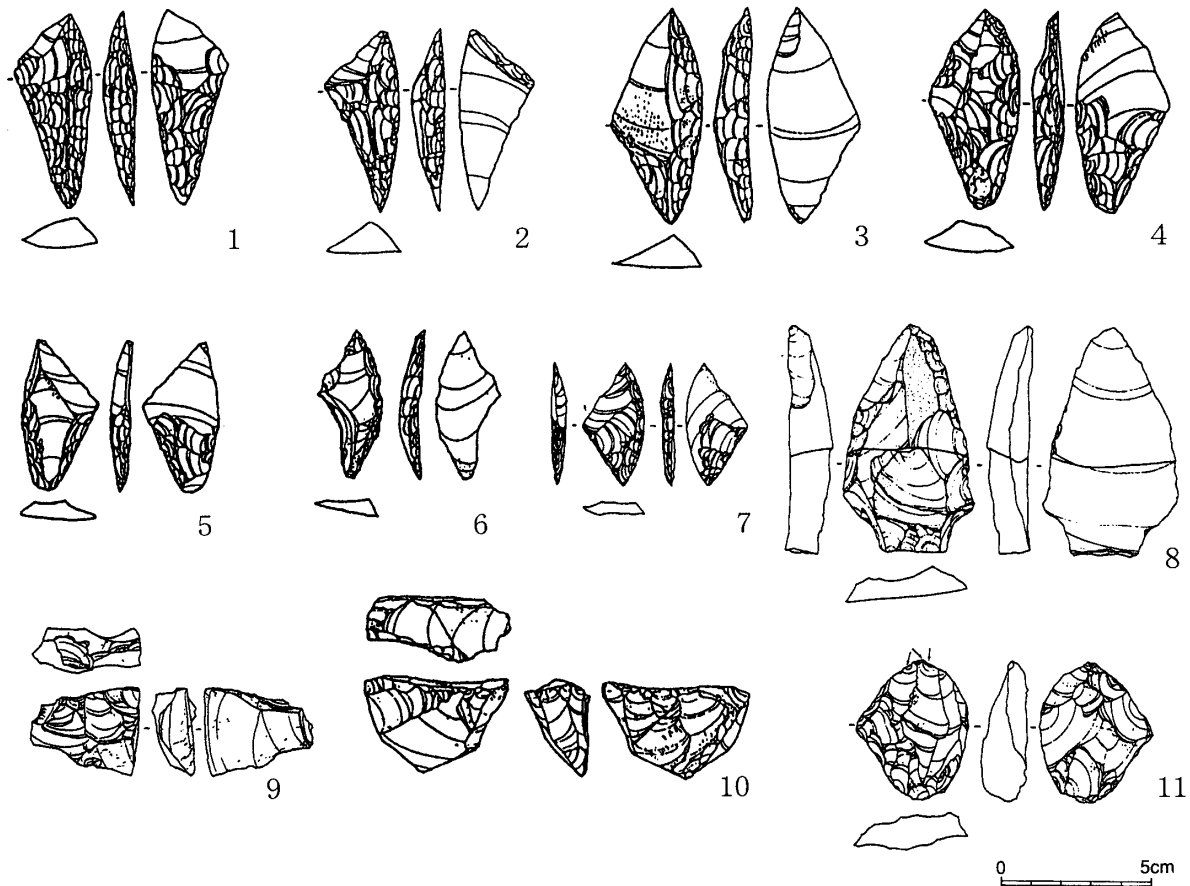
全体で58ユニット検出されているが、そのうち7～58ユニットを検討する。石器点数は3674点で、90%以上が硬質頁岩であり、硬質頁岩による集約的な東内野型尖頭器製作址である。東内野型尖頭器も含めて槍先形尖頭器は、71点検出され、他に搔器が52点、彫器が102点検出されている。これらの器種もほとんどが硬質頁岩で製作されている。石核は14点検出されているが、全石器点数からみると少なく、その多くは剥片素材の石核で、小形で不定形の剥片を剥離したものである（9，10）。他には、先に指摘したように Nitta effect の範疇で理解できる石刃素材の石核があるが（第12図）、東内野型尖頭器の素材を生産し得るものではない。石刃や大形削片が多量に搬入されていることは先に指摘した。これらは多くの母岩に分かれており、遺跡内において、剥離されたものとは考えにくい。尖頭器の未製品は多数検出されており、その中にはとりわけ製作段階の初期に槌状剥離が施された資料が多い（第33図8）。削片は大形のものも含めて、88点検出されている。

槍先形尖頭器の調整剥片は全体の50%を超える2000点以上検出されている。これらは様々な大きさのものがあるが、先の上貝塚貝塚や水砂遺跡と同様に、素材剥片の背面を残していると考えられる分厚い調整剥片も数多く認められる。以上より、素材剥片からの調整が主体的に行われていたと考えられる。

・平賀一ノ台遺跡 2～6ユニット（第34図）

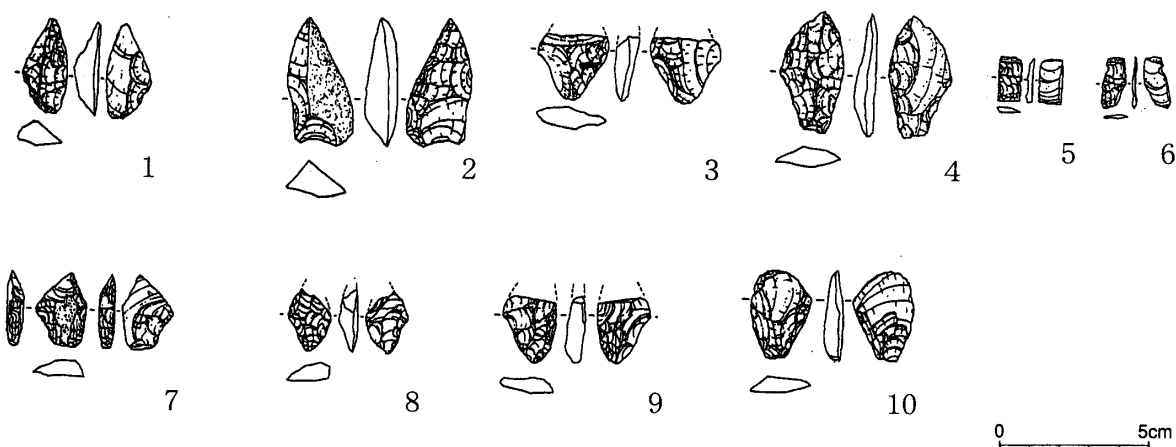
平賀一ノ台遺跡は先に、7～58ユニットを検討したが、それらとは平面分布を違えて、2～6ユニットが検出されている。これらのユニットでは、黒色緻密質安山岩を中心とする東内野型尖頭器の製作が行われており、先の硬質頁岩による7～58ユニットと対照的である。搔器や彫器もまた黒色緻密質安山岩で製作されており、先の7～58ユニットで全ての器種が硬質頁岩で賄われていたのと同様である。総点数は370点で、そのうち65%にあたる241点が黒色緻密質安山岩である。他は黒

旧石器時代の領域分析
—特定共時における‘戦略束’—



第33図 平賀一ノ台遺跡（7～58ユニット）

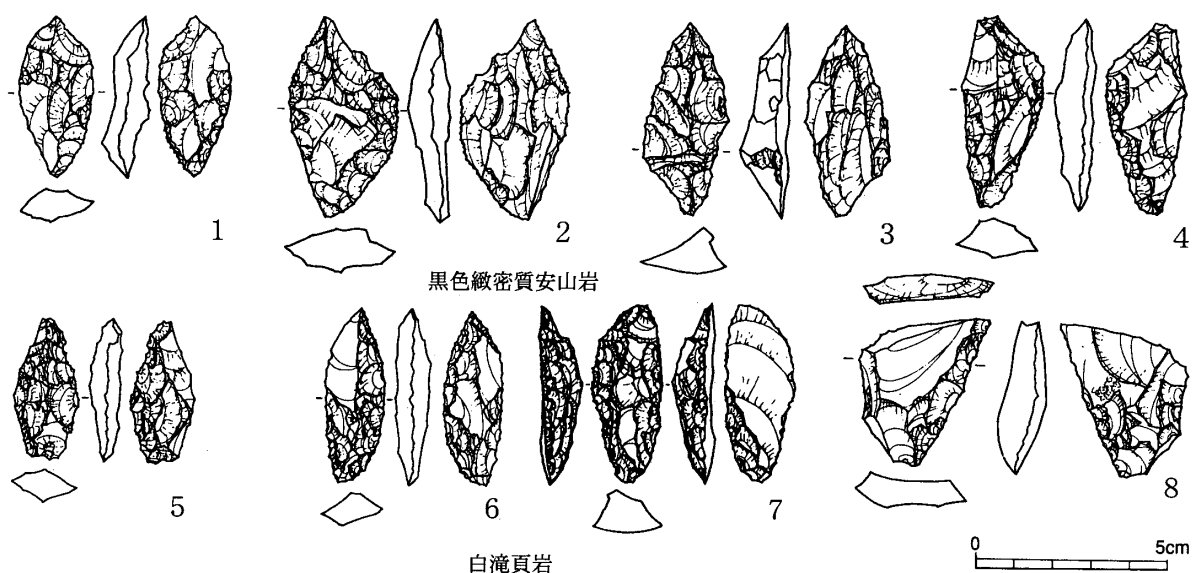
曜石、玉髄、凝灰岩、頁岩などが少量ずつの母岩に分かれて組成されている。東内野型尖頭器は黒色緻密質安山岩と黒曜石によって製作されている。黒曜石は透明度の高いものと、赤茶色の斑が入るものの2種類が認められる。ここで両者の東内野型尖頭器を見てみると、黒色緻密質安山岩によるものは（1～4）、黒曜石のものと比べる（7～10）とやや大形で、表裏に素材剥片の剥離面を残しているものや、未製品や破損品が多いのがわかる。また、調整剥片を見ると黒曜石のものは、黒色緻密質安山岩に比べると微細でそもそも点数が少ない。調整剥片が少ないにもかかわらず、製品は黒色緻密質安山岩よりも多い。以上のことから、黒色緻密質安山岩では、素材剥片からの調整が行われていたと考えられるが、黒曜石ではある程度加工のすすんだ未製品などからの小規模な調整や破損品の再加工の程度であったと考えられる。黒色緻密質安山岩についてはこの遺跡において、石核の廃棄を伴う消費が行われているのであるが、素材剥片が生産されていたのかどうかは不明である。ただし、未製品の大きさと石核の剥離面の大きさを比べてみると、素材剥片が生産された可能性は否定できないといえる。しかしながら、それを積極的に支持する根拠は他に見当たらないため、とりあえずは少なくとも、素材剥片からの調整は行われていたという理解にとどめたい。



第34図 平賀一ノ台遺跡 (2～6ユニット)

・ 杉内遺跡 (今泉1999) (第35図)

石器点数は235点で、東内野型尖頭器や槍先形尖頭器は13点検出されている。石材は黒色緻密質安山岩が149点、白滝頁岩が43点で、これらが8割以上を占めている。他に、玉髄や石英質安山岩などが認められる。尖頭器は5点が白滝頁岩で、8点が黒色緻密質安山岩である。白滝頁岩では両面調整のみが行なわれているが、黒色緻密質安山岩では石核13点を廃棄する集約的な剥片生産が主体的に行なわれている。白滝頁岩では次にみる完成品に近い状態からの小規模な剥離が想定されるが、黒色緻密質安山岩では、素材生産の可能性も含めて、少なくとも素材剥片からの調整は行なわれていたとみられる。



第35図 杉内遺跡

(b) 完成品に近い状態からの小規模な調整が推定される遺跡

・東内野遺跡（第36図）

東内野型尖頭器や槍先形尖頭器は第1次調査において、73点検出され、削片は135点検出されている。東内野型尖頭器の石材は、白滝頁岩によるものが多くを占めるとされ、他に硬質頁岩や黒色緻密質安山岩、黒曜石などが認められるとされる（宇田川前掲）。調査者の篠原正によると「素材となる大形の剥片と石核、そして尖頭器の製作加工時に生じる碎片や石屑が、東内野型尖頭器の出土に比例した量のものが検出されていない」（篠原前掲）という指摘がなされている。また第4次調査では、黒色緻密質安山岩、黒曜石、硬質頁岩、白滝頁岩の東内野型尖頭器が合計7点検出されているが、やはり単独の母岩に属するものが多く、尖頭器の調整剥片は少なかった（橋本1990）。これらのことから、当遺跡では東内野型尖頭器の完成品に近い形での持ち込みや、あるいはその状態からの小規模な調整が想定される。

・取香和田戸遺跡（空港No60遺跡）第2文化層（第37図）

東内野型尖頭器あるいは槍先形尖頭器は9点検出され、削片は7点確認されている。槍先形尖頭器の石材は白滝頁岩、硬質頁岩、黒色緻密質安山岩、黒曜石である。重要なことには、槍先形尖頭器の多くは、単品で、それらを調整したと考えられる同じ石材の調整剥片が認められないのである。また、逆に硬質頁岩、黒色緻密質安山岩、黒曜石の調整剥片や削片が最大でも10点以下ずつ認められるのだが、これによって調整されたと考えられる槍先形尖頭器は遺跡内においては認められない。以上から、当遺跡においては、東内野型尖頭器の完成品に近い形での持ち込みや、あるいはその状態からの小規模な調整などが行われたと考えられる。

・道木内遺跡（第38図）

この遺跡では、東内野型尖頭器が5点検出されており、白滝頁岩が3点で黒曜石と黒色緻密質安山岩が1点ずつである。白滝頁岩によって、最大で10点以下の小点数の調整剥片が検出されているが、残されている製品と同一の母岩のものは認められない。したがって、東内野型尖頭器の完成品に近いかたちでの持ち込みと、その状態からの小規模、および持ち出しが行なわれたと考えられる。

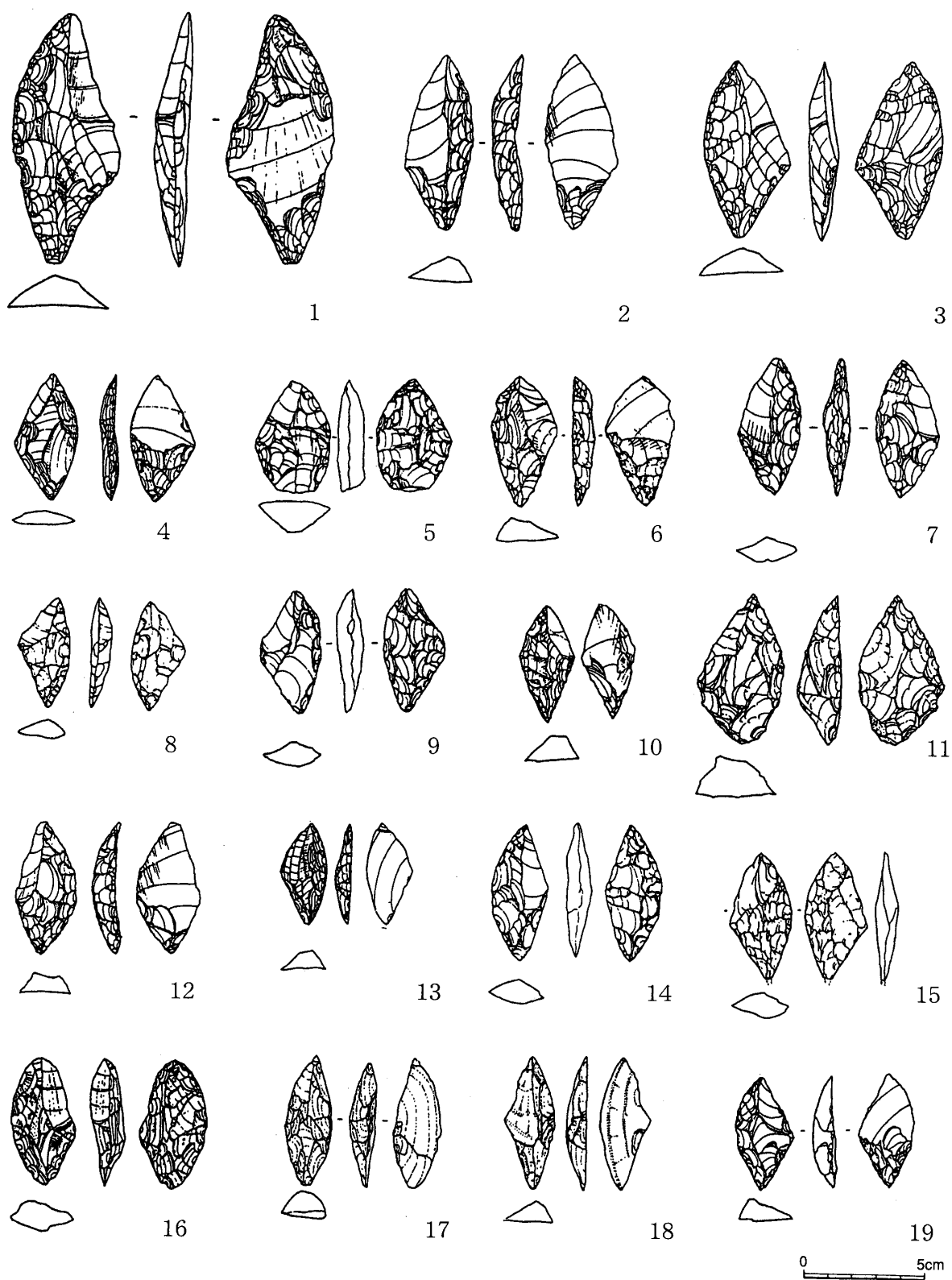
(c) 調整段階を特定できない遺跡

・朝陽遺跡（第39図）

部分的な調査であり、踏み込んだ考察はできないが、公表されている資料から読み取れる範囲で検討したい。朝陽遺跡の東内野型尖頭器は3点でこれらはすべて白滝頁岩であり（田村2000a 参照）、全て未製品とみられる。どの未製品も加工が荒く、器体の厚さも一定していない。調整剥片についての情報がないため、製作段階については判断できない。他に同じ石材による石核も検出されている。

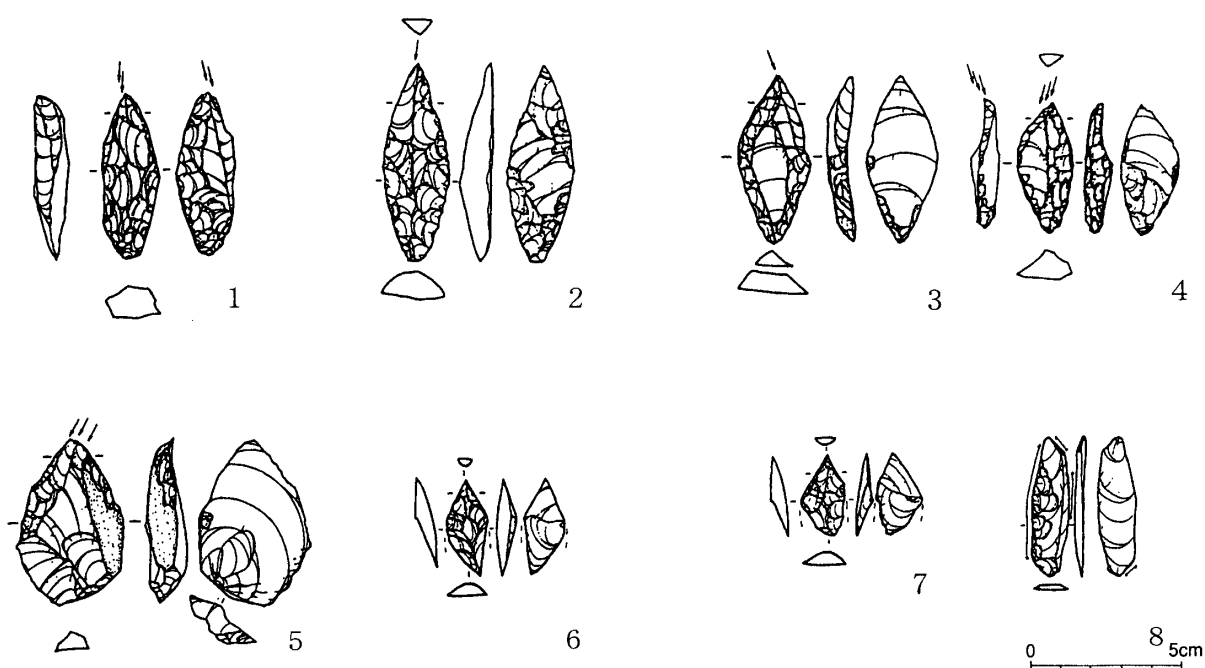
・木戸先遺跡第2群（第40図）

図示した石器は全て白滝頁岩製である。この他に、ホルンフェルスや黒色緻密質安山岩製の東内野型尖頭器ものも少数認められる。調整剥片に関する情報がないため製作段階は特定できない。

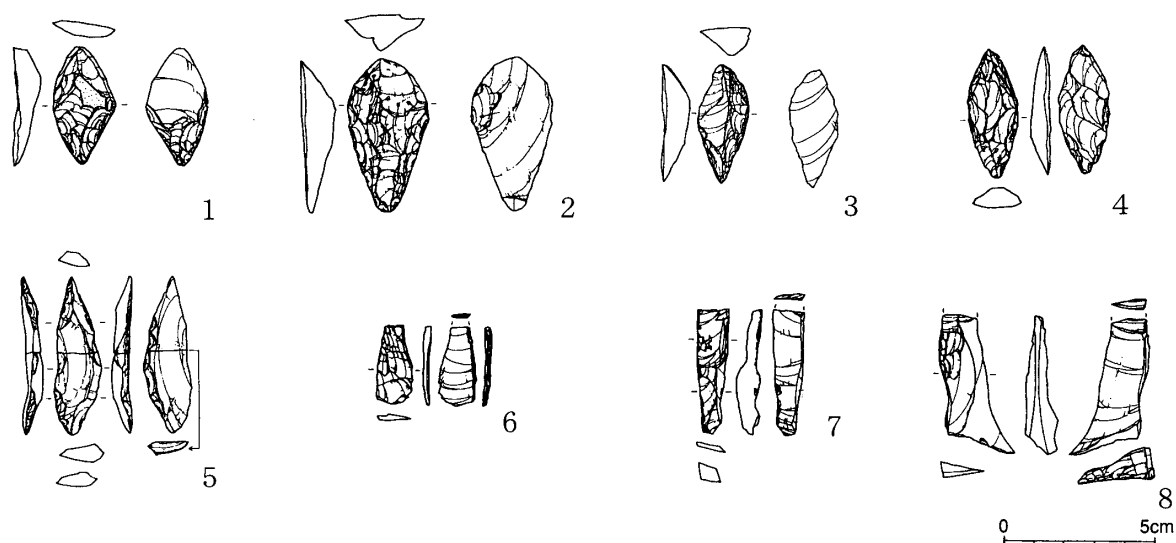


第36図 東内野遺跡

旧石器時代の領域分析
—特定共時における‘戦略’—



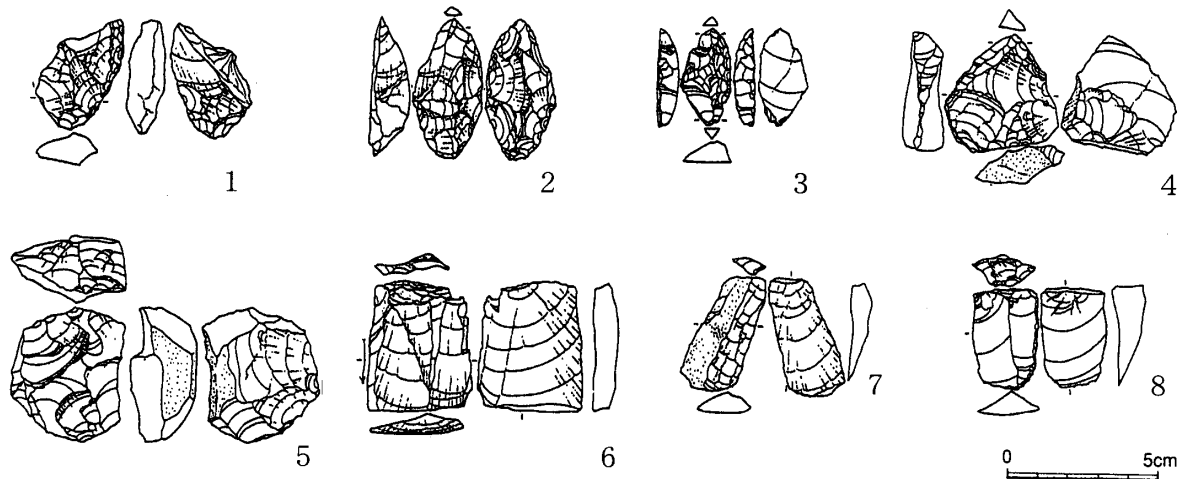
第37図 取香和田戸遺跡第2文化層



第38図 道木内遺跡

また、同じ石材による石刃剥離も盛んに行なわれ、石刃と石刃素材の搔器の接合資料も認められる(14)。また石核も認められる。しかし、東内野型尖頭器の素材に用いられるような、厚みと大きさのある大型の剥片剥離は認められない。したがって、東内野型尖頭器の搬入もしくは調整の他に、同じ石材による石刃製作も同時に行なわれたと考えられる。

以上のように北東部では、調整段階に二様のあり方が認められる。ひとつは素材剥片からの調整が認められる遺跡であり、もうひとつは完成品に近い段階からの小規模な調整が施される遺跡である。この違いは石材の違いと対応しているようである。硬質頁岩と黒色緻密質安山岩では両方の遺



第39図 朝陽遺跡

跡が認められる。これに対して、白滝頁岩については、素材剥片からの調整を示す遺跡は認められないようである。

ところで、北東部の遺跡の特徴としては、単一の石材による大規模な遺跡の存在を挙げることができる。平賀一ノ台遺跡（7～58ユニット）では52箇所の石器集中から硬質頁岩による東内野型尖頭器が71点出土している。東内野遺跡第1次調査では、73点もの東内野型尖頭器や槍先形尖頭器が出土しており、このうち大半が白滝頁岩によるものとされているが（宇田川前掲）、白滝頁岩はこのような大規模な遺跡においても、完成品に近い小規模な調整しか行なわれていないのである。

③南部

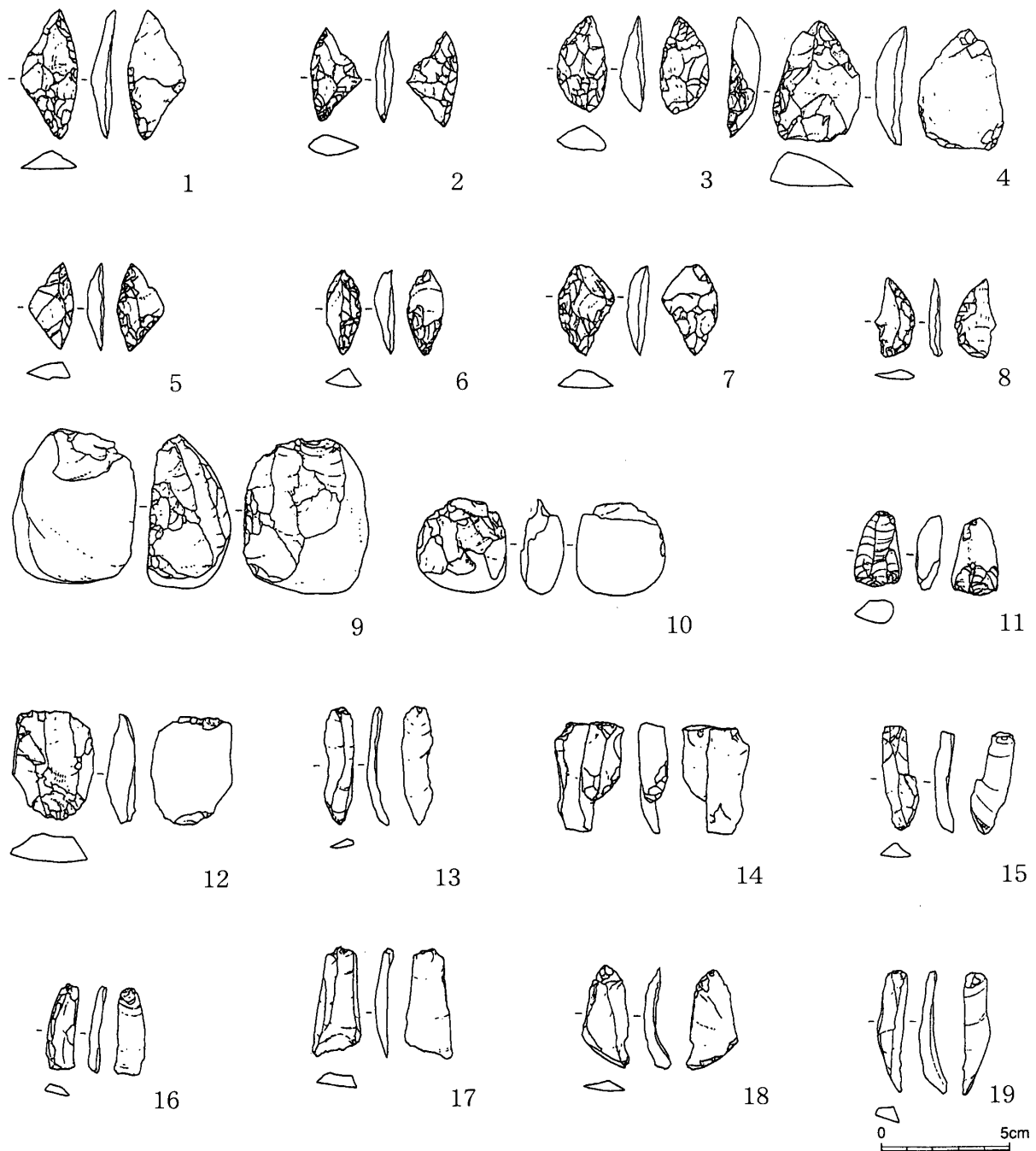
・百々目木B遺跡（第41図）

この遺跡では、黒色緻密質安山岩と黒曜石の東内野型尖頭器および槍先形尖頭器が1点ずつ検出されている。特筆すべきは、黒色緻密質安山岩の槍先形尖頭器に調整剥片が2点接合しており（4）、その調整剥片の背面には素材剥片の剥離面を取り込んでいることから、少なくとも素材剥片からの調整が行われていたことが推察される。また、大形の剥片を素材にして、両面調整の初期段階を示す接合資料も得られている（5）。少なくとも素材剥片からの調整は行なわれている。また、黒曜石については調整剥片が各母岩ごとに最大で10点以下ずつ検出されており、極めて小規模な最終段階の調整が想定される。また、白滝頁岩についても削片が検出されているが、調整剥片が認められないため、ごく小規模な調整が行なわれた可能性がある。

・大綱山田台遺跡群No.6 地点第Ⅱ文化層（16～19ブロック）（田村1993）（第42図）

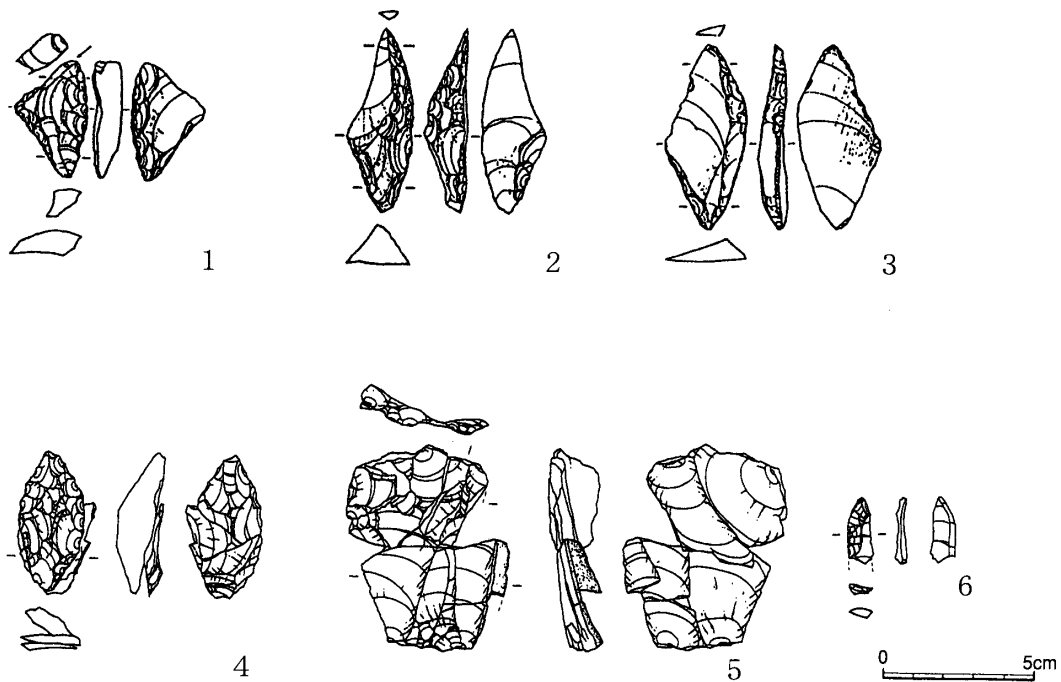
上総丘陵と接する下総台地の南東端に位置し、太平洋に注ぐ丸亀川の支流に立地する。大綱山田台遺跡群No.6 地点第Ⅱ文化層のうち16～19ブロックは他のブロックとは平面分布を違えており、独立している。これらのブロックにおいて、東内野型尖頭器とその未製品がそれぞれ1点ずつ検出されている。石材は黒色緻密質安山岩（1）と軟質な凝灰岩である。遺跡内には黒色緻密質安山岩の

旧石器時代の領域分析
—特定共時における‘戦略束’—



第40図 木戸先遺跡 第2群

調整剥片が3点検出されているが、検出されている東内野型尖頭器とは母岩が異なる。これに対し、軟質の凝灰岩製のものは、未製品であり、その背面に礫面や素材剥片時の先行剥離面を残している。削片が接合しているが、その他に調整剥片が検出されていないため、遺跡内において削片が剥離されたとしても、未製品からの小規模な調整であったと考えられる。以上から、黒色緻密質安山岩と軟質な凝灰岩による完成品に近い形での持ち込みあるいは、未製品からの小規模な調整が行われていたと考えられる。



第41図 百々目木 B 遺跡



第42図 大網山田台遺跡群No.6 遺跡

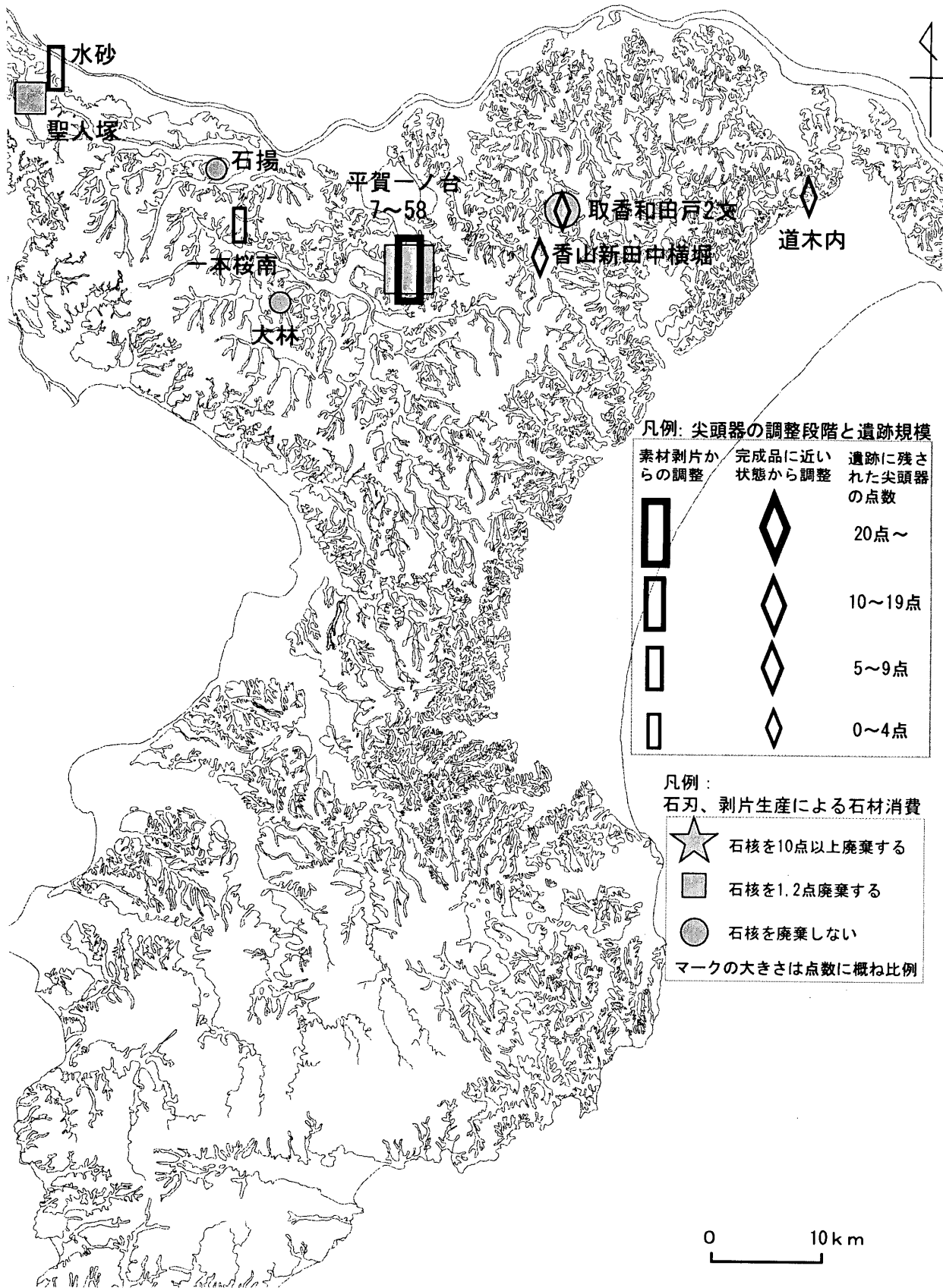
2) 石刃、剥片生産との対応関係

以上のように、製作、調整段階に着目して東内野型尖頭器の製作址をみていくと、北西部と北東部、南部の間で、それぞれに違いが認められた。まず北西部は石材を問わず素材剥片からの製作が行なわれていた。そして、遺跡規模も共通していた。これに対して北東部では、遺跡規模に格差が認められるとともに、硬質頁岩と黒色緻密質安山岩では素材剥片からの製作が行なわれ、白滝頁岩では大規模な遺跡でも、完成品に近い状態からの小規模な調整にとどまっていた。南部は、北西部や北東部と比べると、遺跡数が少なく、生産規模も小さいといえる。

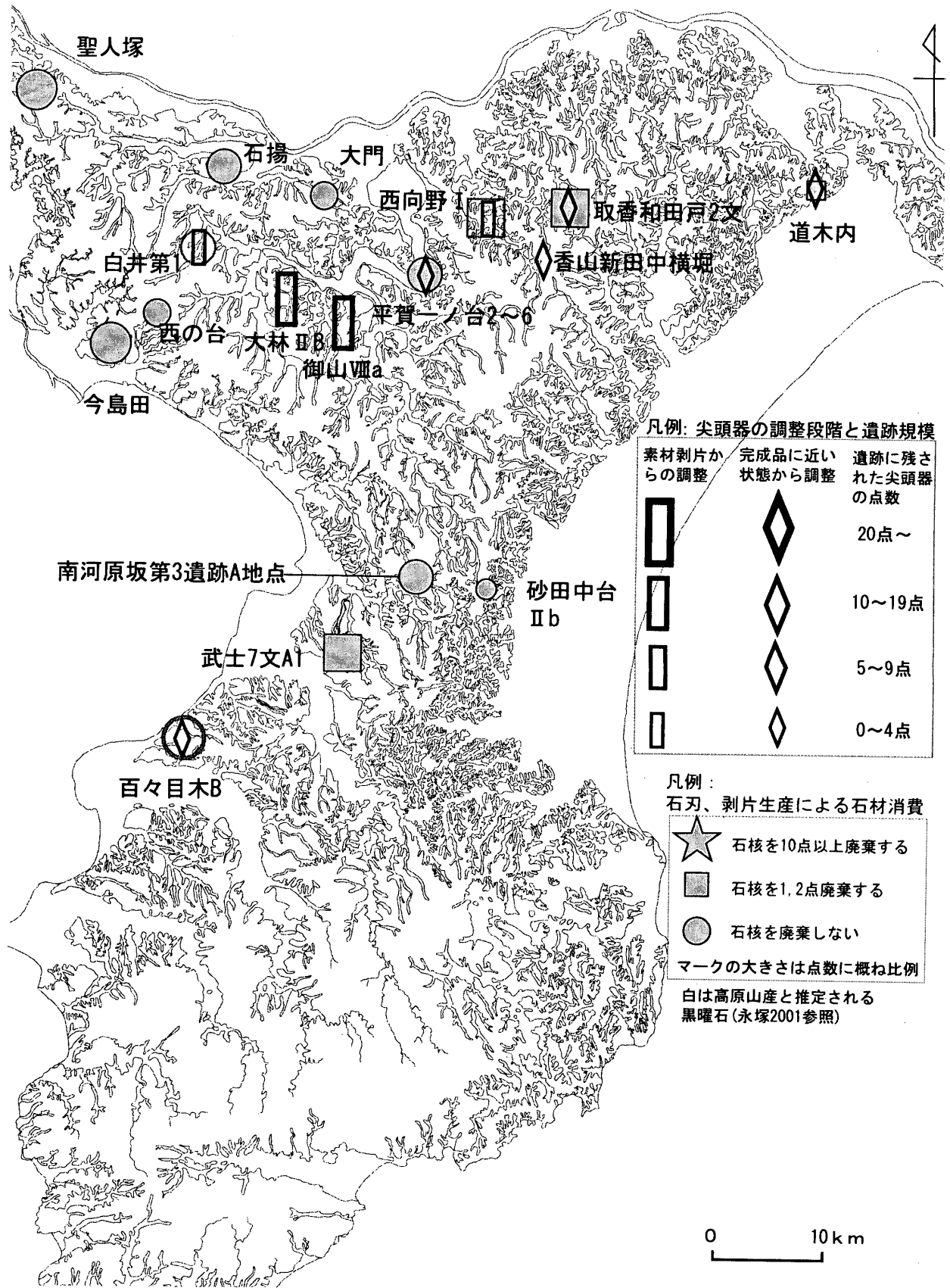
このように、東内野型尖頭器の製作、調整の場を取り出してみたときに、地域的な特徴がみえてきたのであるが、この特徴を、該期のもう一方の石器生産である石刃、剥片生産と対応させて、各地域の戦略束を考察する。

第43～47図は、この問題意識に基づいて、前項でみた各遺跡の東内野型尖頭器の製作、調整作業を石材ごとに分解し、それを先にみた各石材による剥片生産の規模や内容を表す分布図上に重ね合わせたものである。これらから、東内野型尖頭器の製作、調整が、石刃、剥片生産とどのように対応しているのかを検討したい。

旧石器時代の領域分析
—特定共時における‘戦略束’—



第43図 東内野型尖頭器の製作と石刃、剥片生産との対応（硬質頁岩）



第44図 東内野型尖頭器の製作と石刃、剥片生産との対応（黒曜石）

硬質頁岩については（第43図）、石刃、剥片生産による消費遺跡は北部に偏って分布していたが、東内野型尖頭器の製作遺跡も同様である。東内野型尖頭器の製作、調整が行われている遺跡を見ると、北西部と北東部で興味深い違いがみてとれる。北西部で東内野型尖頭器の製作が行なわれている遺跡では、同じ硬質頁岩の剥片剥離作業が行われていない。これに対して、北東部ではほとんどの遺跡で小規模な石刃、剥片生産による消費が行われている。

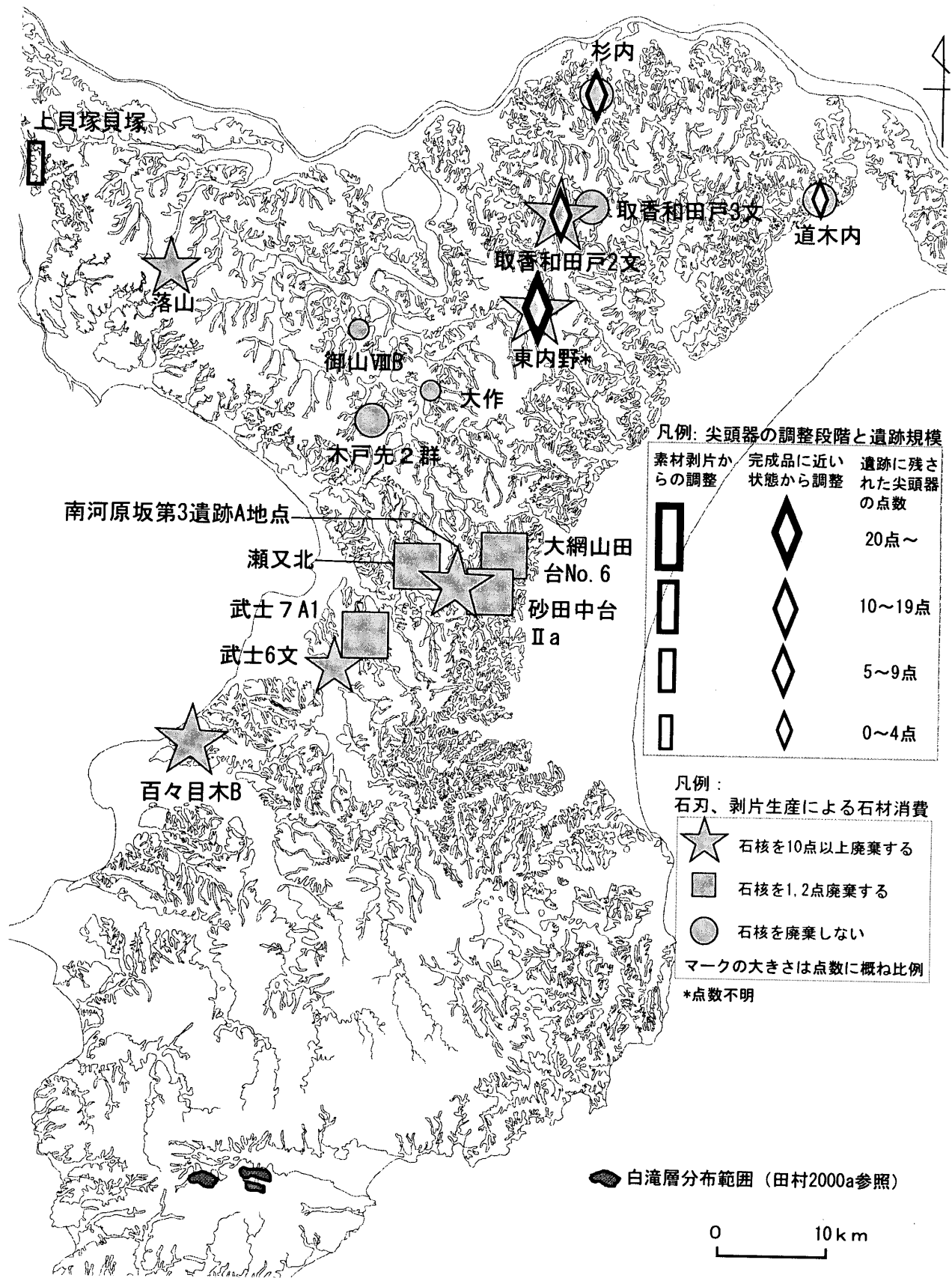
ところで、平賀一ノ台遺跡（7～58ユニット）は先に見たように東内野型尖頭器の素材剥片からの集約的な製作址であった。遺跡内で生産された痕跡がないため、素材剥片は一括して持ち込まれたものと考えられる。これと同様に、石刃や大形削片が多数持ち込まれていることは先に指摘した。一方で、大形削片や削片石核がここで示した硬質頁岩による東内野型尖頭器の製作遺跡に特徴的に認められたのであった。したがって、平賀一ノ台遺跡（7～58ユニット）のような硬質頁岩による東内野型尖頭器の集約的な補給遺跡に石刃、剥片生産の素材となる硬質頁岩の石核や石刃が同時に持ち込まれて、東内野型尖頭器とともにその後の小規模な調整を施す遺跡へ持ち出されたと考えられる。

これは次のように理解するべきである。北東部における石刃、剥片生産のための硬質頁岩の補給は、北西部のように石核で少量ずつ入ってくるのではなく、石刃や大形削片の形で、多量に少数の遺跡に搬入された。石材補給という観点からは先の類型のうち、量依存型（一括搬入型）の範疇で考えるべきである¹⁸⁾。したがって、石刃そのものや剥片生産の素材が量依存型で補給された地点に、東内野型尖頭器の素材が剥片の形で一括して持ち込まれたということになる。

次に黒曜石を検討する（第44図）。北西部と北東部に多くみられる。素材剥片からの調整が行なわれているのは、白井第1遺跡（鈴木1978）、御山遺跡第Ⅷa文化層、大林遺跡第Ⅱ文化層、西向野Ⅰ遺跡第2地点¹⁹⁾である。これらは、石刃、剥片剥離をほとんど行なっていない点で、先の硬質頁岩の北西部の特徴と同様である。これらの黒曜石の産地は高原山産とされている（永塚前掲参照）。したがって、北西部では高原山産の黒曜石による素材剥片からの製作が、やはり剥片剥離を伴わないで行われているということになる。

これに対して、北東部では平賀一ノ台遺跡（2～6ユニット）と取香和田戸遺跡第2文化層で、信州産と推定される透明度の高い黒曜石により、未製品などからの小規模な調整がわずかに行なわれている程度である。したがって、北東部ではあまり積極的な東内野型尖頭器の製作が行われていない。南部では百々目木B遺跡のみで、北西部と同様の黒曜石によって、小規模な調整が行なわれている程度である。

次に白滝頁岩をみしてみる（第45図）。北西部では上貝塚貝塚のみであるが、やはり石刃、剥片生産を伴わない。そして、素材剥片からの製作が行われている。これに対して、北東部では、多くの遺跡で石刃、剥片生産による消費を伴っている。製作段階はすべて、未製品などからの小規模な調整である。また、この石材の東内野型尖頭器は東内野遺跡において集約的に補給されていたが、東内野遺跡は石刃、剥片生産のための同じ石材による量依存型（一括搬入型）の補給遺跡でもあった。



第45図 東内野型尖頭器の製作と石刃、剥片生産との対応 (白滝頁岩)

他に、取香和田戸遺跡第2文化層も石刃、剥片生産のための白滝頁岩の一括搬入遺跡であったが、この石材による東内野型尖頭器は少ない。したがって、東内野遺跡のような、石刃、剥片生産のために白滝頁岩が量依存型で大規模に補給された地点において、同じ石材の東内野型尖頭器もまた一括して補給されているということになる。これは、硬質頁岩と同じ在り方を示している。南部は、この石材を石刃、剥片生産に多量に消費しているのに、東内野型尖頭器の製作は認められない。北東部と非常に対照的である。

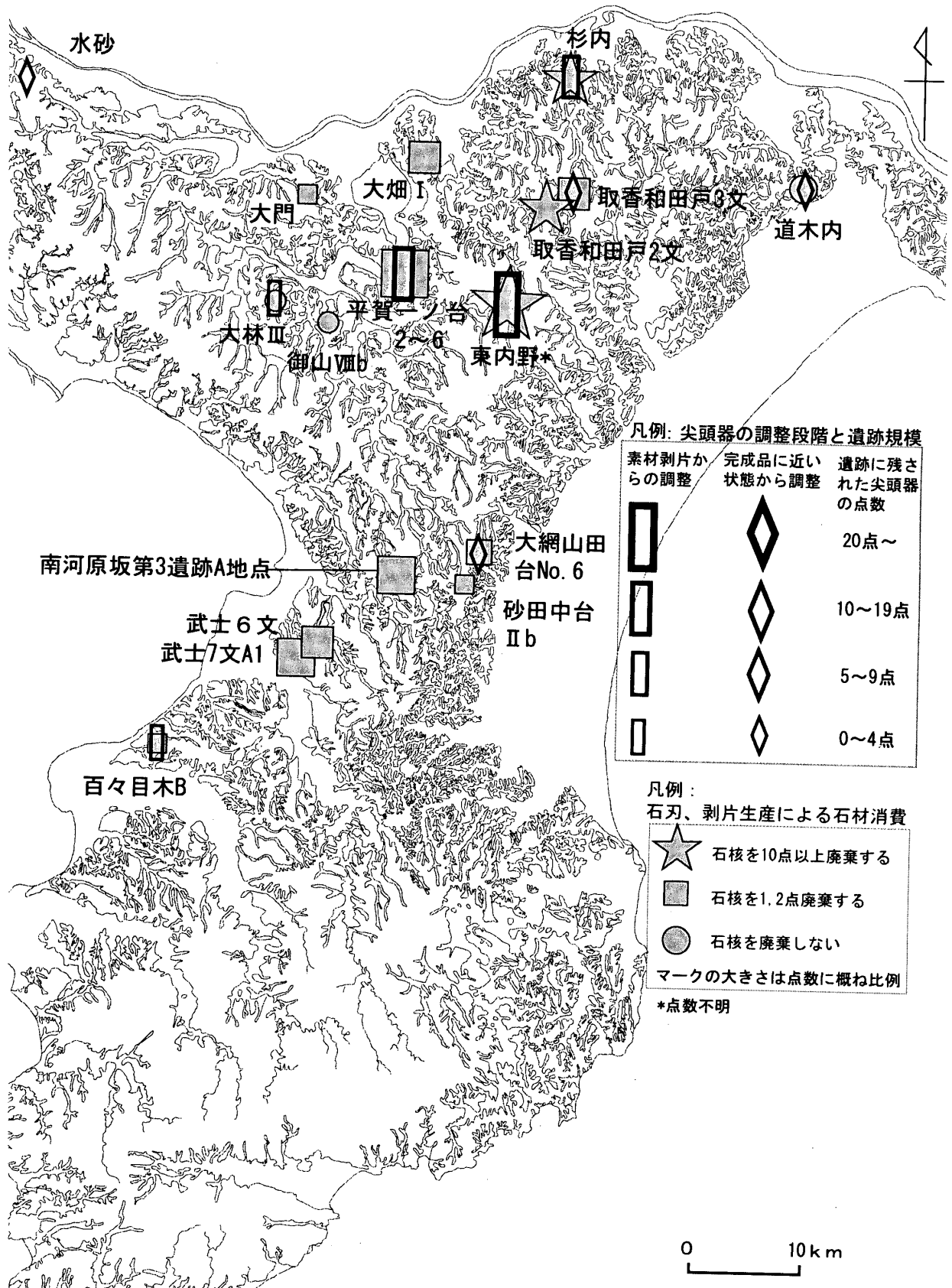
黒色緻密質安山岩（第46図）も、硬質頁岩や、白滝頁岩と同様の在り方を示している。北西部では、水砂遺跡において、製品を残さないで、少数の調整剥片と削片のみを残す小規模な調整が行なわれている。そして、北西部の他の石材の場合と同様に、剥片剥離による消費は認められない。北東部では、まず、東内野遺跡で点数は不明であるが比較的多量の東内野型尖頭器が製作されている（田村前掲：宇田川前掲）。この遺跡では、白滝頁岩とともにこの石材においても剥片生産が集約的に行なわれていた（田村前掲：宇田川前掲）。他に、杉内遺跡や平賀一ノ台遺跡（2～6ユニット）において、東内野型尖頭器が比較的多く製作されている。これらの遺跡もまた、石刃、剥片生産によってこの石材を多量に消費している遺跡であった。したがって、硬質頁岩や白滝頁岩と同様に、剥片生産のためにこの石材が集約的に補給された遺跡で、東内野型尖頭器もまた多量に補給されたと考えられる。ただし、遺跡に残された東内野型有樋尖頭器の点数から見ると、硬質頁岩や白滝頁岩ほどには、遺跡間の格差が認められないようである。

取香和田戸遺跡第2文化層もまた、剥片生産によってこの石材が集約的に消費された遺跡であるが、東内野型尖頭器は上でみた遺跡ほどには製作されていない。これもまた、白滝頁岩の場合と同様である。南部では、百々目木B遺跡で、素材剥片からの製作を示す接合資料が得られている。また大網山田台遺跡群No.6 地点第Ⅱ文化層では、再調整を示す小規模な調整が行なわれている。

最後に、万田野層等諸石材をみると（第47図）、南部で多量に石刃、剥片生産において消費されているのにもかかわらず、東内野型尖頭器の製作は低調である。大網山田台遺跡群No.6 地点第Ⅱ文化層で、小規模な調整が行なわれているのにとどまっている。

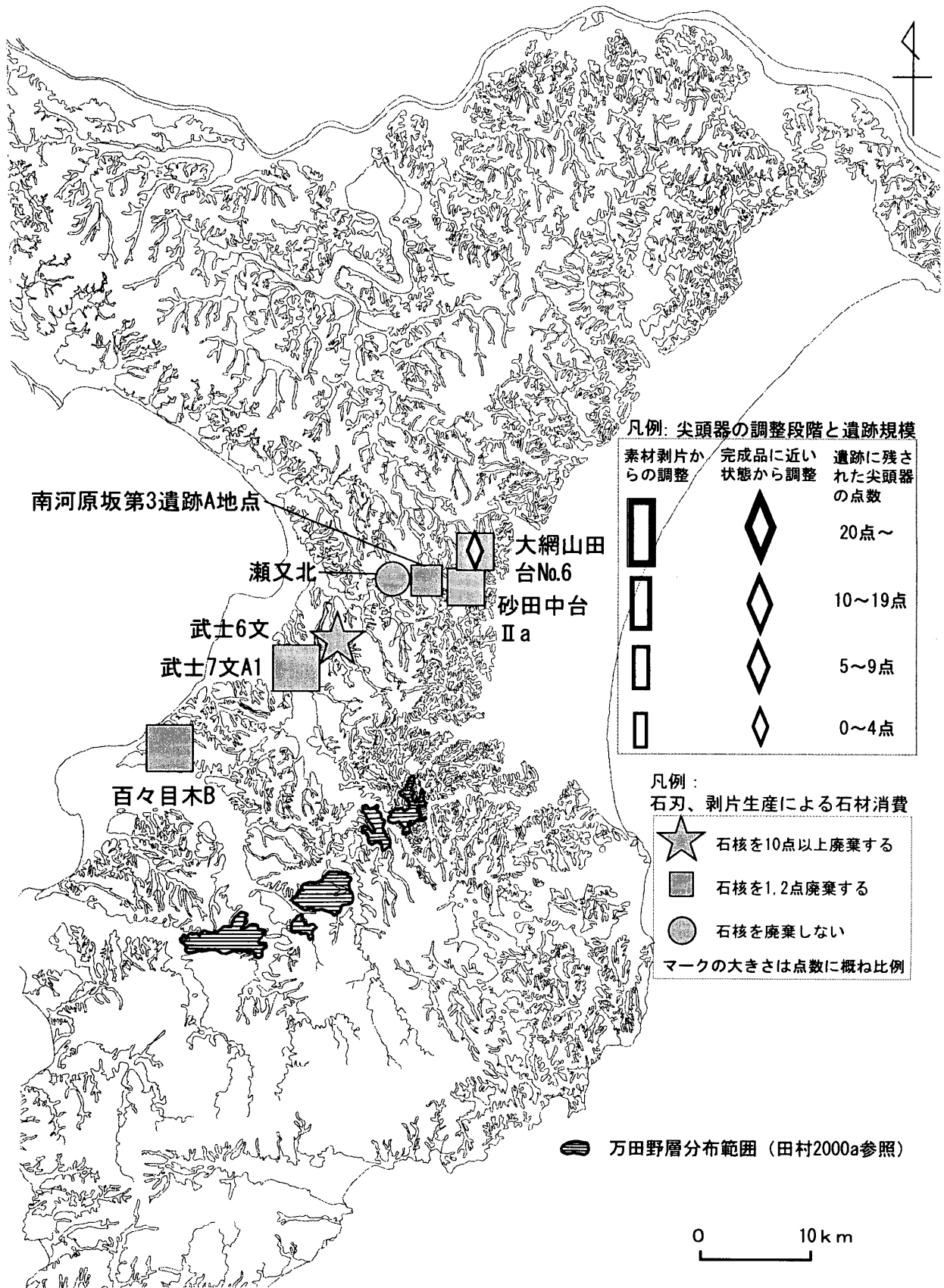
5. 各地域にみられる戦略束

以上のように、石材ごとに2種の石器生産を組み合わせしてみたところ、石材の違いを越えて地域的な特徴が見えてくる。まず、北西部では東内野型尖頭器の素材剥片からの製作が、同じ石材による石刃、剥片生産と地点を違えて行なわれた。したがって、両石器生産のための石材補給の機会は一異なっていたと考えられる。さらに、石刃、剥片生産が行なわれた多くの遺跡は、主に古鬼怒川上流の各地域で採取されたと考えられる多様な石材が少量ずつ組み合わされているのが特徴であったが、東内野型尖頭器の製作址では例外なく単一の石材で占められていた。多様な石材構成を示す前者は、上記の地域との residential な移動の過程で石材が採取され、その一端が下総台地の北西部において表れているとみられる。これに対して、東内野型尖頭器の製作址は、素材剥片のかたちで



第46図 東内野型尖頭器の製作と石刃、剥片生産との対応 (黒色緻密質安山岩)

旧石器時代の領域分析
—特定共時における‘戦略束’—



第47図 東内野型尖頭器の製作と石刃、剥片生産との対応 (万田野層等諸石材)

持ち込まれていることからみても、単一の石材が一括して持ち込まれた状況が推測される。その獲得方法としては、residential な移動に伴う採取というよりも、むしろ石材獲得を目的とした移動が考えられる。

これと、同様の石材獲得方法は、石刃、剥片生産のための石材補給にも認められた。白滝頁岩と玉髓による量依存型（一括搬入型）の補給である。

したがって、北西部の戦略東は次のように理解される。まず、古鬼怒川上流の地域とこの地域との間の residential な移動が考えられる。他に、北関東地方と考えられる玉髓産地と、房総半島南部の白滝頁岩の産地への、石材獲得を目的とした移動も行なわれていた。これに加えて、両者の地域の中でも限定された石材（硬質頁岩、高原山産黒曜石、白滝頁岩）産地に対して、東内野型尖頭器の製作のための石材獲得を目的とした移動が行なわれていたと考えられる。

北東部では、石刃、剥片生産のために白滝頁岩と黒色緻密質安山岩が量依存型（一括搬入型）で、補給されていた。また、硬質頁岩も、石刃や大形削片の形で、同様の補給方法が採られていたことが判明した。そして、東内野型尖頭器は、これらの石材の一括搬入地点において、同じ石材によって一括して補給されていた。これは、北西部とは異なり、石刃、剥片生産のための石材補給と同じ機会に、東内野型尖頭器の素材獲得がなされたことを示している。量依存型の補給を支える石材の獲得方法は、先にも見たように、residential な移動の過程での採取というよりもむしろ、石材の獲得を目的とした移動による採取が想定される。すると、この地域の戦略東は、特定の石材（硬質頁岩、黒色緻密質安山岩、白滝頁岩）産地に対して、2種の石器生産のための石材を、同じ機会に、低い頻度で、多量に一括して獲得する戦略に特殊化していたと理解することができる。

ところで、これらの石材の補給は、より細かいレベルでは、やや異なるようである。硬質頁岩は、石核ではなく、石刃や大形削片など、すでに剥離を済ませた状態で持ち込まれていることは先に指摘したとおりである。東内野型尖頭器のための石材補給は、その集約的な製作状況から、未製品などのほかに、素材剥片などによる搬入が主体であったと考えられる。これに対して、白滝頁岩による東内野型尖頭器の補給は、一括搬入地点である東内野遺跡の調査所見（篠原前掲）に従うと、完成品に近い状態での持ち込みが推定される。したがって、両石材による東内野型尖頭器は、異なる製作段階で補給されていたことになる。また、黒色緻密質安山岩は、硬質頁岩や白滝頁岩と比べると、一括補給地点とそれ以外の遺跡の間で、石核や東内野型尖頭器の出土点数からみた格差が少ない。したがって、硬質頁岩や白滝頁岩ほどには供給頻度が低くはなかった可能性も考えられる。

また、道木内遺跡では、硬質頁岩、透明度の高い黒曜石、黒色緻密質安山岩、白滝頁岩など多様な石材により、東内野型尖頭器の小規模な再加工が行なわれるとともに、これらの石材による東内野型尖頭器が1、2点ずつ残されている。これは、各石材が一括搬入された後に、この地域内を活動領域として循環するなかで残された、東内野型尖頭器のメンテナンスの場として理解することができる。そして、この道木内遺跡も含めて、大畑Ⅰ遺跡、前原Ⅰ遺跡、北長山野遺跡など、この地域の小規模な遺跡で、玉髓が頻度依存型で補給し消費されているのも、同様にこの地域における

循環的な移動の過程で、採取されたものと考えられる²⁰⁾。

南部は、東内野型尖頭器の製作が零細である。石刃、剥片生産のための石材補給を量・頻度依存型にもとめる一方で、東内野型尖頭器の製作は一部の遺跡で小規模に行なわれたにすぎない。

6. 東内野型尖頭器の存立基盤

東内野型尖頭器が用いられた要因としては、石材欠乏地帯における石材供給条件の制約がしばしば指摘されている（田村1992b：佐藤1995など）。小稿の分析に立脚してこの点をもう少し考えてみることにする。

各地域の東内野型尖頭器の製作をみると、北東部で最も盛んで、北西部がこれに次ぎ、南部が最も零細である。下総台地においてこの独自性の強い槍先形尖頭器が採用された背景を考えてみるには、当石器が最も盛んに運用されている北東部の石器群に焦点を当てるのがよさそうである。

これまでみてきたように、下総台地北部の石刃、剥片生産のための石材の補給と消費は、頻度依存型を中心にした消費石材構成を選択できないために、他の類型を併せて選択していた。その選択の仕方は、北西部と北東部で異なっていた。北西部では、硬質頁岩、流紋岩、珪質凝灰岩、黄玉石による頻度依存型の他に、量依存型（一括搬入型）の白滝頁岩、玉髄、欠乏耐久型の黒曜石で消費石材を構成していた。このように多様な石材に対して、多くの石材補給戦略を採るのは、あらゆる石材原産地と離れているために、石材補給の信頼性を高めるため、代替戦略を多く有する必要性があった可能性を先に指摘した。この観点にたつて北東部の遺跡を見てみると、硬質頁岩、白滝頁岩と黒色緻密質安山岩という単純な石材に対して、量依存型（一括搬入型）という単一の石材補給戦略を適用していた。領域内での循環的な移動において、頻度依存型である玉髄が補助的に加わるとみられるが、基本は硬質頁岩、白滝頁岩と黒色緻密質安山岩による量依存型（一括搬入型）である。これは、北西部と同じく供給頻度に依存できない点を、量依存型（一括搬入型）のみに特殊化することで克服しているのである。そして、この量依存型（一括搬入型）に向かって消費石材の補給と消費を強く特殊化させた北東部において、とりわけ顕著に東内野型尖頭器の運用が認められるのである。

量依存型（一括搬入型）にのみ、主要な消費石材の補給と消費の方法を特殊化してしまうということは、供給頻度が大変に低いということであるから、次に石材が補給されるまでの期間が長くなってしまう。この点において、再加工によってその寿命を延ばすことができる面取り尖頭器は有効な器種である。それゆえに、東内野型尖頭器の再生加工の意義は、これまで示してきた活動領域の範囲において、石材の供給頻度の低さに耐えるための役割に求められることになる。

これに対して、北西部においては、多様な石材に対して、多くの石材補給戦略をもっている。これらの多様な石材補給戦略は同時に発揮されたというわけではなく、むしろ状況に応じて選択的に発揮されたのだとすると、とりわけ量依存型（一括搬入型）に強く依存した状況において、北東部と同じ理由、すなわち供給頻度の低さを克服するために、東内野型尖頭器の製作遺跡が残された可

性能が考えられる。また、仮に多様な石材補給戦略を同時に発揮させていたとしても、量依存型（一括搬入型）の石材補給への依存度が、北東部ほどには強くないため、その供給頻度の低さを他の補給戦略によって補完し得たと考えられる。そのために東内野型尖頭器への需要は、北東部ほどには強くなかったと考えられる。

以上のように、東内野型尖頭器の存立基盤は、量依存型（一括搬入型）の石材補給への対応策としての役割に求めることができる。ここで想起されることは、武蔵野台地の北東部において、東内野型尖頭器の製作遺跡が、硬質頁岩の搬入経路に沿って認められることである（国武2000a 参照）。武蔵野台地北東部の消費石材の組成は、欠乏耐久型の硬質頁岩と黒色頁岩の他に、細粒凝灰岩が量依存型（一括搬入型）で補給されている（第1表）。量依存型の石材補給と東内野型尖頭器の製作遺跡の相関はここにも見ることができる。この点が、この地域において、東内野型尖頭器の製作遺跡が形成された理由であると考えられる。

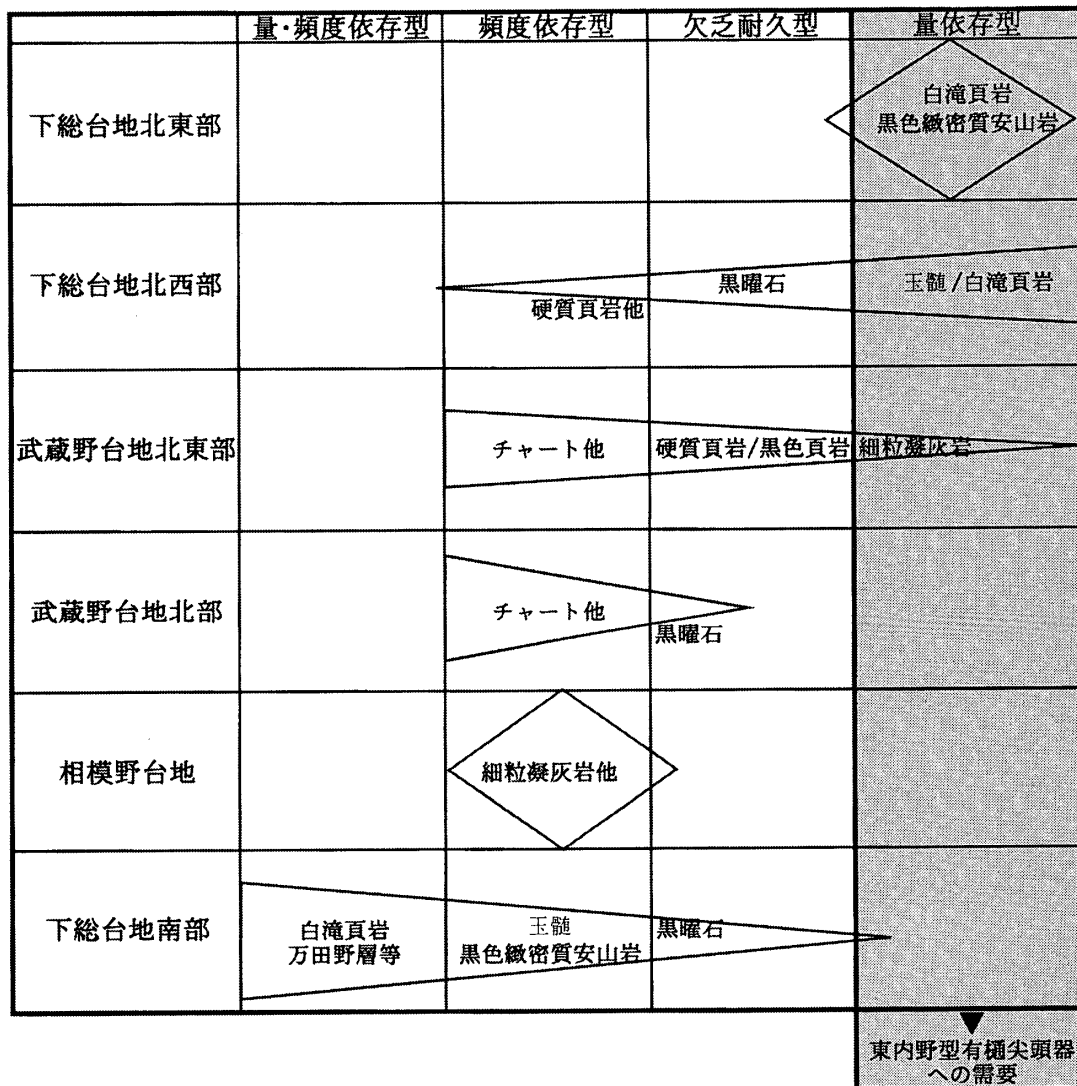
このようにみていくと、下総台地に特殊に発達した東内野型尖頭器の存立基盤も、小稿の分析によって明らかとなった石材の補給と消費の一般的な類型化に沿って位置付けることができそうである。第48図は、下総台地の各地域と西南関東地方の諸地域を、石刃、剥片生産に用いられる消費石材の補給と消費のタイプの組み合わせから、比較したものである。

まず、量・頻度依存型の補給と消費を中心とする地域としては、下総台地南部が挙げられる。白滝頁岩と万田野層等に由来すると考えられる諸石材であるが、両者は遺跡によって偏りがあり、それぞれ独自の補給と消費の過程が存在する可能性がある。とりわけ、武士遺跡第6文化層に認められるような、万田野層等に由来すると考えられる諸石材による石核の多量の集積は、供給頻度を中心にこの地域の石材補給についてさらに詳しい分析が必要となる²¹⁾。また、玉髄や黒色緻密質安山岩を頻度依存型で用いているが、これも万田野層等から採取された可能性がある。この地域では東内野型尖頭器は、単品ではしばしば認められるものの（島立1996）、製作遺跡は零細であり、その原因を量・頻度依存型の石材補給に求めることができる。つまり、豊富な量と頻度で石材が供給される環境においては、供給頻度の低さに対応した東内野型尖頭器への需要は低かったと考えられる。これが、この地域で東内野型尖頭器の製作が零細であった理由とみられる。

次に、頻度依存型の補給と消費を中心とする地域としては、相模野台地と武蔵野台地北部から入間台地にかけての地域が挙げられる。これらの地域では、前者は細粒凝灰岩を、後者はチャートや在地の珪質頁岩を高率に用いており（国武前掲参照）、遺跡間変異が非常に小さい地域である。先にも指摘したが、武蔵野台地北部の砂川遺跡の分析から導き出された「原料の二重構成と時差消費」（安蒜1992）による遺跡のつながりとは、この石材補給戦略に特殊な現象であるといえる。

その次に、このような石材の供給頻度にもみ依存していない（あるいは依存できない）地域である。まず、武蔵野台地北東部であるが、消費石材の多くは、チャートや在地の珪質頁岩などを頻度依存型で用いているが、それ以外に、量依存型（一括搬入型）の細粒凝灰岩（第24図）、欠乏耐久型の硬質頁岩、黒色頁岩（第25図）が認められる。

旧石器時代の領域分析
—特定共時における‘戦略束’—



図註 それぞれの地域の図形の中で、各類型の占める面積が、その地域における各類型への依存度を表している。これを見ると、頻度依存型に特殊化した相模野台地と量依存型（一括搬入型）に特殊化した下総台地東部との間に、両類型を用いる武蔵野台地北東部と下総台地北西部がある。これを介して南関東地方各地域が、漸移的に変化しているのがわかる。また、本文で述べたように各地域の量依存型への依存度に応じて、東内野型有樋尖頭器への需要が生じており、この点においても、これらの地域の該期の石器群を統一的な視点から理解することができるのである。

第48図 石材の補給と消費の類型構成からみた各地域の関係

これと、バラエティーは似ているが、その比重をさらに量依存型（一括搬入型）に移しているのが下総台地北西部である。量依存型（一括搬入型）の玉髄（第16図）、白滝頁岩（第17図）の他に、頻度依存型の硬質頁岩（第6図）、流紋岩（第7図）、珪質凝灰岩（第8図）、黄玉石（第9図）、欠乏耐久型の黒曜石（第15図）が認められる。そして最後に、北西部よりもさらに一層、量依存型（一括搬入型）に特殊化しているのが下総台地北東部である。その内容は、硬質頁岩、白滝頁岩（第17図）と黒色緻密質安山岩（第19図）という単純な組み合わせに対して、すべて量依存型（一括搬入型）によって用いている。前項の考察で明らかにしたように、東内野型尖頭器はこの量依存

型（一括搬入型）による石材補給による，石材供給頻度の極端な低さに対応して発達した石器であると考えられた。そして，各地域の東内野型尖頭器の製作遺跡の頻度から見て，東内野型尖頭器への需要は，この類型への依存度に応じて生じていたと考えられるのである²²⁾（第48図図註）。

7. まとめ

東内野型尖頭器の運用は，量依存型（一括搬入型）の石器群に対応していたことが判明したが，実は東内野型尖頭器そのものが「一括搬入型」で補給される石器であった。これは北東部において特に顕著であり，また規模の差はあるが，素材剥片の一括搬入という意味では北西部においても同様である。このような集約的な石材補給は，residential な移動に伴う採取というよりも，むしろ石材獲得を目的とする移動によって採取された結果と考えられることは先にも指摘した。すると，下総台地の北東部と北西部に遺跡を残した local group の活動領域には，東北地方南部や北関東地方及び，房総半島南部という下総台地北部から80km 以上離れた地域の特定の石材産地が，その一端に組み込まれていたことになる。また，その石材産地近傍では，下総台地北部に一括して持ち込まれる素材剥片や未製品の生産が，集約的に行なわれていたことも推察される。この石材産地近傍での素材の集約的な生産と持ち出し，及び下総台地北部での一括搬入と集約的な製品製作は，当該石器に限らず，biface reduction 一般を特徴付ける段階的な石器生産戦略（Binford1979：田村1998）の範疇で理解できる。さらに，北東部のようにこの石器の運用に特殊化した地域では，頻度は低いが定期的にこの石材獲得と石器生産戦略が行なわれていたと考えられる。

田村隆は，特定石材産地が周回領域へ取り込まれ，上述したような石材獲得が定期的に行われる戦略を「定期的な特定石材の目的的補充戦略（SQS; Scheduled Quarrying Strategy）」と呼び，biface reduction の段階的な石器生産戦略は，この SQS を必要条件としているとした（田村前掲）。小稿の分析では，この間の状況を具体的に記述したことになる。そこで，小稿の分析とは逆に，biface reduction を主体にして北東部の戦略束を見直すと次のように評価できる。東内野型尖頭器の段階的な石器生産を支えるべく，石材の補給が，従来の埋め込み戦略から，特定石材産地への定期的な補充戦略へと移行した。これに併せて石刃，剥片生産のための石材もまた，東内野型尖頭器の素材獲得時に同時に補給されるようになり，量依存型の補給戦略に特殊化した，となる。

ところで筆者は，biface reduction が在地の石材による石器製作のなかに取り込まれるようになった武蔵野台地のナイフ形石器終末期の分析を通して，これとよく似た結論を導いたことがある（国武2000b）。すなわち，在地石材による両面加工の槍先形尖頭器の段階的な製作過程に対応して，この時期の遺跡全体の石材の補給と消費が段階的な在り方へと変化していたのである。この背景にも，石材の獲得方法の同様な変化が影響しているのかもしれない。はじめにも少し触れたが，田村は biface reduction の定着を支えるべく伝統的な埋め込み戦略が解体して，上で述べたかたちへと石材獲得方法が変化する過程に，local group の領域の固定化と，バンド社会の形成の要因を求めている（田村前掲）。したがって，石材獲得戦略が，埋め込み戦略から SQS へと変化する過程を具

体的に跡付ける作業は非常に重要であり、上で挙げた武蔵野台地のナイフ形石器終末期や小稿の分析を、この観点から今後さらに検討する必要がある。

さて、「領域分析」を標題に掲げ、戦略束の固有性の抽出を当面の目標に分析を進めてきたが、その過程で、石刃、剥片生産のための石材補給戦略が、「供給頻度」と「一度の供給量」の強弱で4種に類別された。これらが石材獲得方法の違いと関連していることが予測されるとともに、その組み合わせから各地域の特徴が抽出された。しかしながら、北西部にみられるような非常に多様な石材補給戦略や、南部にみられる比較的単純な戦略からは、これらの地域的な区分を local group による固有の活動領域と対応させるのに躊躇させるものがある。既に述べたが、北西部はその石材獲得方法からみて北関東地方へと広がる領域の一部であると考えられるし、またこの地域には、北東部の戦略の一部も表れている可能性もある。また、南部の遺跡が北西部と北東部の local group によって残された可能性も検討してみる必要があるかもしれない。他には、とりわけ北東部において、各石材が一括搬入された後の、領域内での循環的な移動によって残された遺跡の跡付けも検討する余地がある。

戦略束の固有性から地域間の関係を検討し、その通時的な変化からこの時期の行動論的な変化を評価する必要があると考えている。そのための、特定共時における「パレオ・エスノグラフィー叙述」(田村2000a ; 85頁)が小稿のささやかなねらいである。

小稿で対象とした遺跡の調査に関わられた全ての関係者に感謝申し上げます。とりわけ千葉県文化財センター資料課の各氏は筆者の際限のない要望に忍耐強く対応してくださった。小稿の作成においては今村啓爾、安斎正人、佐藤宏之、大貫静夫の各先生にご指導いただき、掲載にあたっては安斎正人先生に格別のご配慮をいただいた。また、千葉県立房総風土記の丘の田村隆氏と矢本節朗氏からは、平成13年度企画展「槍の身振り」を通して、豊富な経験に裏打ちされた貴重なご助言を数多くいただいた。これは筆者にとって格別に貴重な機会であった。他にも多くの研究者に御指導いただいたが、本文中に誤りや誤解があるとすればその責はすべて筆者に帰せられることはいうまでもない。

註

- 1) 田村隆氏のご教授による。
- 2) 同一の母岩で5点以上をとりあえずの目安とした。第1表。
- 3) 千葉県立房総風土記の丘の平成13年度企画展『槍の身振り』の展示を参照にした。
- 4) 更新世の海面が現在より低かったために、河川の下刻作用が現在より強かったことを考慮すると古鬼怒川の中流域にまで黒色緻密質安山岩が流下してきて、下総台地の北西端部において採取された可能性も考慮する必要もある。しかしながら、第19図からわかるように当地域では黒色緻密質安山岩の消費は零細である。
- 5) 大部分を占める面取り尖頭器の製作によるものと石刃、剥片生産によるものを点数の上で区別する

ことができなかつたために第3図に示していない。ただし、この遺跡における消費が最も顕著であることを付け加えておく。

- 6) L. R. Kelly は biface reduction の諸側面を検討した論考 (Kelly1988) のなかで、この問題に関連するモデルを提示している。先史時代の Pawnee の biface reduction に関わる遺跡の類型化と分析を行なう中で、同一の集団による biface reduction が、石核としての役割から、道具の寿命を長引かせるためのメンテナンスとしての機能に切り替わったとしたら、それは居住パターンが residential なものから logistical なものへと移行した可能性が高いとしている。Pawnee の場合では、その変化の原因として冬季の積雪によって石材産地へのアクセスが困難になったことを挙げている。平賀一ノ台遺跡の居住基地的な性格を考慮すると (田村1992b), 当該石器群の場合、石材を一括して下総台地に搬入した後に、石材産地とのアクセス頻度が下がったため結果として似た現象が起きた可能性も考えられる。しかしながら、また別の視点からの詳細な検証が必要である。
- 7) 下総台地の黒曜石の消費について、北西部と南部、東部にわたって連続的な消費過程にあるかどうかは検証していない。今後、各遺跡の作業内容を対象としたより細かい分析が必要となる。
- 8) 点数が少ないだけではなく、遺跡内で剥片剥離された資料以上に搬入された資料の方が多い特異な遺跡である。石核もわずかに剥片剥離されているのみであり、このような遺跡の性格を特定するためには、小稿において採用している分析とはまた異なる視点からの分析が必要となる。
- 9) その上で、南部における白滝頁岩の補給の在り方を考える必要があり、北部の遺跡と同様な少数の遺跡への一括搬入の可能性も考慮する必要があると考えている。
- 10) 点数の上では平賀一ノ台遺跡 2～6 ブロックの241点の方が多いが、これは槍先形尖頭器の調整剥片の可能性のある剥片、碎片を含んでいる数字である。
- 11) 大作遺跡 (藤崎・田島1990) において、これらの石材によるナイフ形石器や石刃が搬入品のかたちで検出されていることが注意されるが、消費遺跡ではない。
- 12) ただし、その石材が主要な消費石材である場合に限られるかもしれない。副次的な消費石材であると、石核の廃棄後も、主要な石材によって必要な石材量は賄われていると考えられるからである。これとは逆の現象だが、下総台地北東部の玉髓の消費は、主要な消費石材である白滝頁岩や黒色緻密質安山岩と補完的な関係にあることが注意されたが、このような場合も、石核の廃棄後に玉髓が補給されることを前提として考えることはできないであろう。
- 13) 前註を参照。
- 14) 厳密に定義はしないが次のように考えている。東内野型尖頭器は、再生加工を繰り返すことが前提となる石器であるとする、完成品の段階を特定できないのだから、逆に未製品の段階も特定できないのではないかと、という批判は成り立つであろう。しかし、小稿でいう未製品がさす石器とは、東内野型尖頭器が剥片や板状の素材から最初に尖頭器として調整されるその途中の段階で廃棄された石器を指している。その判別基準は、器体に認められる調整の不揃いさ、荒さや、それに起因する器体の厚さの不揃いさなどが挙げられるが、基本的にはそれぞれ個別の石器の観察からの判断である。
- 15) 作図と掲載の許可を頂いた。千葉県文化財センターの御好意に感謝する。
- 16) これらの製作過程から分かるとおり面取りが2度も施されているにもかかわらず、この母岩の削片は1点も確認できなかった。調査精度と調査範囲の制約に原因を求めるにしても、2点とも検出されないのは不可解なように思われる。また、この遺跡全体でも削片は3点しか検出されていないようである。第26図から分かるように、これよりはるかに多くの東内野型尖頭器が検出されているにもかかわらずである。もし、削片の不在の原因を調査精度と調査範囲の制約のみに帰せられないとすると、面取りを施した場所が異なる地点であった可能性も浮上する。そして、別地点で面取りを施しては、当遺跡に持ち帰ってまた加工を施していたことになる。しかし、これを検証することは小稿ではできなかった。第27図に示した製作過程において、欠落している面取りの段階は、別の地

旧石器時代の領域分析
—特定共時における‘戦略束’—

点で行なわれていたと考えてよいのかどうか。さらに精度の高い分析法を考案する必要がある。

17) 14)を参照。

18) 小稿の区分では領域内への石材の搬入は、石核や原石の形をとることを前提としたものだったため、石核の点数で消費規模を量っていた。それゆえにこのような管理性の強い石器群に十分に対応し得る基準ではなかったということになる。

19) 西向野Ⅰ遺跡（第2地点）は地理的には小稿で北東部として扱っている地域に入っているが、本文中で述べた特徴から他の北西部の遺跡と同様に考えた方がよい。両地域の地理的な境界が直線状に分かれている必要はなく、むしろ境界付近で相前後する遺跡があるのは自然だと考えられる。

20) その供給源として藪・地蔵堂層の礫層を考えることができる。

21) 礫群の礫の再利用パターンから、遺跡での滞在期間に着目した分析など（田村2000b）、より個別の行動による遺跡形成の原因を解析し得る方法論が要求される。

22) このように東内野型尖頭器は、剥片剥離のための石材の供給頻度の低さへの対応であったからこそ、その機能や運用においてはナイフ形石器と同等のレベルにあったことが想定される。このことは当石器がナイフ形石器と「形態的親和性」（堤1989）を示すことや、槌状剥離面角が男女倉型面の取り尖頭器よりも小さく、ナイフ形石器に近いこと（伊藤1989）、そして、当地域においても西南関東地方とりわけ武蔵野台地と同様に、黒曜石製の男女倉型面取り尖頭器がしばしば単品で検出されていることなどがそれを傍証している。それゆえ東内野型尖頭器は、男女倉型面取り尖頭器とは運用のレベルが異なると考えられるのである。

第1表 石刃、剥片生産による各遺跡の消費石材

	HS	RHY	ST	JS	OB	AG		白SH	AN	M		SH	CH	OP	OT	合計
聖人塚遺跡第1文化層	109	(2)			162							5	(1)			276
聖人塚遺跡第1文化層E12						25										25
落山遺跡				23	14			170	(12)							207
西の台遺跡			10	(2)	176	25					5					216
今島田遺跡					10	(1)	171	(10)								181
下郷後遺跡		14	(2)		8											22
石場遺跡	5				27									41		73
水砂遺跡Dブロック						16	(1)									16
片山古墳群内遺跡D地点		22	(1)													22
白井第1遺跡					37											37
大門遺跡					17	85	(2)	(1)		9	(2)	8	(1)			34
大林遺跡第Ⅲ文化層	9		87						7			16	(2)		21	140
柳山遺跡第Ⅴ文化層		19	48		61	(1)		7	5							140
西向野Ⅰ遺跡第2地点					50	(1)					6					56
平賀ノ台遺跡 (2～6ユニット) (*1)					28		6			241	(5)					282
坂香和田戸遺跡第2文化層 (*1.3)	152				59	(2)		264	(14)	125	(12)			112	80	792
坂香和田戸遺跡第3文化層							26			46	(6)					72
道木内遺跡					7		9	34		15				27		92
大作遺跡							5									5
北長山野遺跡						60	(2)									60
前原Ⅰ遺跡					22	(6)					6					28
大畑Ⅰ遺跡					22	(4)			31	(7)						53
杉内遺跡					6		43		149	(1)	(13)			8	23	235
木戸先遺跡第2群							34									34
瀬又北遺跡					31		28	400	(1)		37					496
大綱山田台遺跡群No.6地点第Ⅱa文化層						10	(1)	264	(6)	15	1	64	(5)			353
砂田中台遺跡Ⅱa文化層					8			248	(7)			20	(3)			276
砂田中台遺跡Ⅱb文化層										5	2	23				28
武士遺跡第6文化層						12	(2)	89	(14)	24	5	174	(18)			299
武士遺跡第7文化層A1					53	(1)	44	(1)	216	(4)	72	4	522	(8)		907
白々目木B遺跡					61	(2)	132	(1)	1335	(23)	59	1	756	(6)		2343
南河原坂第3遺跡A地点							400	(10)	10	1	50					460

*1 両面調整と区別していない *2 オパール含む *3 永塚2001参照
 HSH 硬質頁岩 AN 黒色緻密質安山岩
 RHY 流紋岩 M 万田野層等諸石材
 ST 珪質凝灰岩 S H 頁岩
 JS 黄玉石 CH チャート
 OB 黒曜石 OP オパール
 AG 玉髄 OT その他
 白SH 白滝頁岩 () 石核数

<引用文献>

- 阿子島 香 1989 『石器の使用痕』ニュー・サイエンス社
 安斎正人 1988 「斜軸尖頭器石器群からナイフ形石器群への移行一前・中期/後期旧石器時代過渡期の研究一」『先史考古学論集』第1号 1-48頁
 安斎正人 1990 「石器は人 (individuals) を語れるか」『先史考古学研究』第3号 1-34頁

- 安蒜政雄 1992 「砂川遺跡における遺跡の形成過程と石器製作の作業体系」『駿台史学』86 駿台史学会
- 石田広美 1985 『主要地方道成田安食線道路改良工事（住宅地関連事業）地内埋蔵文化財調査報告書』（財）千葉県文化財センター
- 稲田孝司 1984 「旧石器時代武蔵野台地における石器石材の選択と入手過程」『考古学研究』30-4 考古学研究会 17-37頁
- 稲葉理恵 1998 『百々目木B・C・清水頭・清水沢遺跡』（財）君津郡市文化財センター
- 今泉 潔 1999 『杉内遺跡』（財）香取郡市文化財センター
- 宇田川浩一 2000 「東内野遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古1（旧石器・縄文時代）』千葉県史料研究財団 124-129頁
- 岡崎浩子 1997 「下総台地の地質」『千葉県の自然史 本編2 千葉県の台地』千葉県史料研究財団 241-268頁
- 落合章雄 1988 『片山古墳群内D地点遺跡』（財）千葉県文化財センター
- 落合章雄 1994 『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書』（財）千葉県文化財センター
- 落合章雄 1998 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XⅡ—白井町一本桜南遺跡—』（財）千葉県文化財センター
- 織笠 昭 1982 「第Ⅲ篇 水砂遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ—館林、水砂、花前Ⅱ—1—』（財）千葉県文化財センター
- 角張淳一 1991 「黒曜石原産地遺跡と消費地のダイナミズム—後期旧石器時代石器群の行動論的理解—」『先史考古学論集』第1集 25-82頁
- 国武貞克 1999 「石材消費と石器製作、廃棄による遺跡の類別—行動論的理解に向けた分析法の試み—」『考古学研究』46-3 考古学研究会 35-55頁
- 国武貞克 2000a 「石材消費から見た領域—台地外石材による遺跡連鎖を標識として—」『石器文化研究』9 235-262頁
- 国武貞克 2000b 「槍先形尖頭器をめぐる行動論—石器製作システムの変換点—」『考古学ジャーナル』465 ニュー・サイエンス社 12-16頁
- 国武貞克 2000c 「下柳沢遺跡第3文化層をめぐる問題—槌状剥離を有する尖頭器の製作をめぐる行動論的考察—」『下柳沢遺跡』早稲田大学文化財整理室 615-628頁
- 国武貞克 2001 「武蔵野台地・大宮台地の面取り尖頭器」『有樋尖頭器の発生・変遷・終焉』千葉県立房総風土記の丘 31-52頁
- 柿原弘二 1997 『大門遺跡』（財）千葉県文化財センター
- 佐藤宏之 1988 「台形様石器研究序説」『考古学雑誌』73-3 1-37頁
- 佐藤宏之 1995 「技術的組織・変形論・石材受給—下総台地後期旧石器時代の社会生態学的考察—」『考古学研究』42-1 考古学研究会 27-53頁
- 山武郡市文化財センター 1994 『文化財かわら版 設立10周年記念号』
- 島田和高 1996 『土気南遺跡群Ⅴ 南河原坂第三遺跡』（財）千葉市文化財調査協会
- 島立 桂 1998 「西上総地方における槍先形尖頭器について」『研究紀要』Ⅷ（財）君津郡市文化財センター
- 篠原 正 1980 「東内野型尖頭器と槌状剥離に関する一考察」『大野政治先生古希記念房総史論集』1-54頁
- 杉原荘介 1971 「先土器時代の遺跡」『市川市史第一巻』市川市史編纂委員会 112-142頁
- 鈴木定明 1978 「第Ⅲ篇 白井第一遺跡 2章 先土器時代」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』（財）千葉県文化財センター
- 高倉 純 1998 「北海道における石刃族石器群の研究—移動・居住形態の検討を中心に—」『考古学研

旧石器時代の領域分析
—特定共時における‘戦略束’—

- 究』44-4 考古学研究会 55-78頁
- 高花宏行 1993 『西向野Ⅰ遺跡(第2地点)』(財)印旛郡市文化財センター
- 田川 良・高橋政充 1983 『下郷後』船橋市教育委員会
- 田村 隆 1986 「聖人塚遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ—元割, 聖人塚, 中山新田Ⅰ—』
(財)千葉県文化財センター
- 田村 隆 1989a 「二項モードの推移と巡回—東日本におけるナイフ形石器成立期の様相—」『先史考古学研究』第2号 1-52頁
- 田村 隆 1989b 『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—佐倉市御塚山・大林・大堀・西野・芋窪遺跡—』(財)千葉県文化財センター
- 田村 隆 1992a 「石材についての諸問題—特に関東地方の石材採取戦略について—」『考古学ジャーナル』345 ニュー・サイエンス社 2-7頁
- 田村 隆 1992b 「遠い山・黒い石—武蔵野Ⅱ期石器群の社会生態学的一考察—」『先史考古学研究』第2集 1-44頁
- 田村 隆 1993 『大綱山田台遺跡群Ⅰ—旧石器時代篇—』(財)山武郡市文化財センター
- 田村 隆 1994 『砂田中台遺跡(旧石器・縄文時代篇)』(財)山武郡市文化財センター
- 田村 隆 1996 『市原市武士遺跡Ⅰ』(財)千葉県文化財センター
- 田村 隆 1998 「移行の論理—石器群のデザイン分析と文化=社会理論—」『先史考古学論集』第7集 1-48頁
- 田村 隆 2000a 「木荊峠再訪—房総半島小型石槍の変遷—」『千葉県史研究』第8号 85-113頁
- 田村 隆 2000b 「武士遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古Ⅰ(旧石器・縄文時代)』千葉県史料研究財団48-53頁
- 田村 隆・澤野 弘 1987 『研究紀要(先土器時代の石器石材の研究)』11 (財)千葉県文化財センター
- 田村 隆・橋本勝雄 1984 『房総考古学ライブラリーⅠ 先土器時代』(財)千葉県文化財センター
- 戸田哲也・篠原 正・並木忠良 1977 『東内野遺跡 発掘調査概報』新東京国際空港公団・富里村教育委員会
- 永塚俊司 2001 「千葉県内の有樋尖頭器について」『有樋尖頭器の発生・変遷・終焉』千葉県立房総風土記の丘 7-30頁
- 野口 淳 1995 「武蔵野台地Ⅳ下・Ⅴ上層段階の遺跡群—石器製作の工程配置と連鎖の体系—」『旧石器考古学』51 旧石器文化談話会 19-36頁
- 西山太郎 1994 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ No.7 遺跡』新東京国際空港公団・
(財)千葉県文化財センター
- 新田浩三 1994 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ 取香和田戸遺跡(空港No.60遺跡) 第一分冊』新東京国際空港公団・(財)千葉県文化財センター
- 橋本勝雄 1990 『東内野遺跡—富士エステート富里宅地造成地内埋蔵文化財調査—』印旛郡市文化財センター
- 林田利之 1994 『木戸先遺跡 御成台団地住宅造成事業地内埋蔵文化財調査』(財)印旛郡市文化財センター
- 林田利之 2000 「木戸先遺跡」『千葉県の歴史 本編Ⅰ 旧石器・縄文編』千葉県史料研究財団 174-175頁
- ひたちなか市教育委員会 1998 『武田石高遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編 第一分冊』
- 藤崎芳樹・田島 新 1990 『佐倉大作遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 道澤 明 1985 『西の台(第2次)』船橋市遺跡調査会
- 道澤 明 1986 『平賀遺跡群発掘調査報告書』平賀遺跡群発掘調査会
- 道澤 明 1994 「三崎3丁目遺跡」『第1回石器文化研究交流会発表要旨』石器文化研究会 28-32頁

国 武 貞 克

- 道澤 明 1990 『東・北長山野遺跡』北長山野遺跡調査会
道澤 明 2000 「三崎3丁目遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古1 (旧石器・縄文時代)』千葉県史料研究財団 86-91頁
安井健一 1994 『主要地方道多古笹本線埋蔵文化財調査報告3 -干潟町道木内遺跡・椎木遺跡-』(財)千葉県文化財センター
安井健一 1994 『石場遺跡』(財)千葉県文化財センター
矢本節朗 1994 『四街道市御山遺跡(1) 第1分冊』(財)千葉県文化財センター
横山 仁 1984 『市原市瀬又北・瀬又南, 千葉市大木戸・板倉町遺跡』(財)千葉県文化財センター
Binford, L. R. 1979 Organization and formation process: Looking at curated technologies. *Journal of Anthropological Research* 35: pp253-273
Kelly, R. L. 1988 The Three Sides of A Biface. *American Antiquity* 53-4 pp717-734
Marks, A. E. 1983 The Middle to Upper Paleolithic Transition In the Levant. *Advances In World archaeology* 2 pp51-98

<図版出典>

- 第10図 田村1986, 安井1994, 矢本1994, 田村1989
第11図 落合1988, 道澤1985
第12~14図 道澤1986
第18図 橋本1989
第20図 戸田・篠原・並木1977, 新田1994, 石田1985
第26図 落合1994
第28図 織笠1982
第29図 矢本1994
第30図 高花1993
第31図 田村1989
第32図 落合1998
第33, 34図 道澤1986
第35図 今泉1999
第36図 戸田・篠原・並木1977
第37図 新田1994
第38図 安井1994
第39図 篠原1980
第40図 林田1994
第41図 稲葉1998
第42図 田村1993

上記以外の図は筆者原図による。